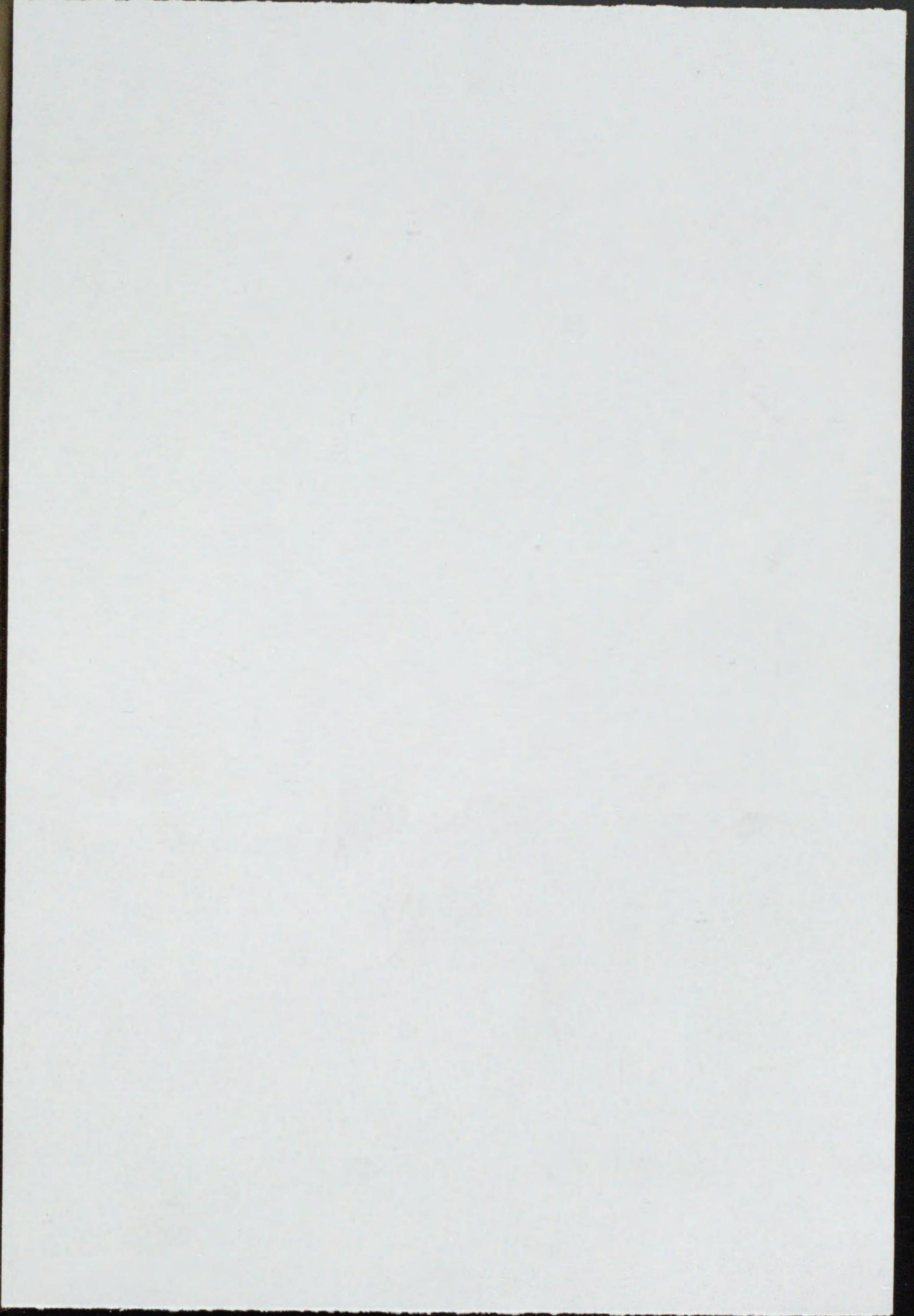
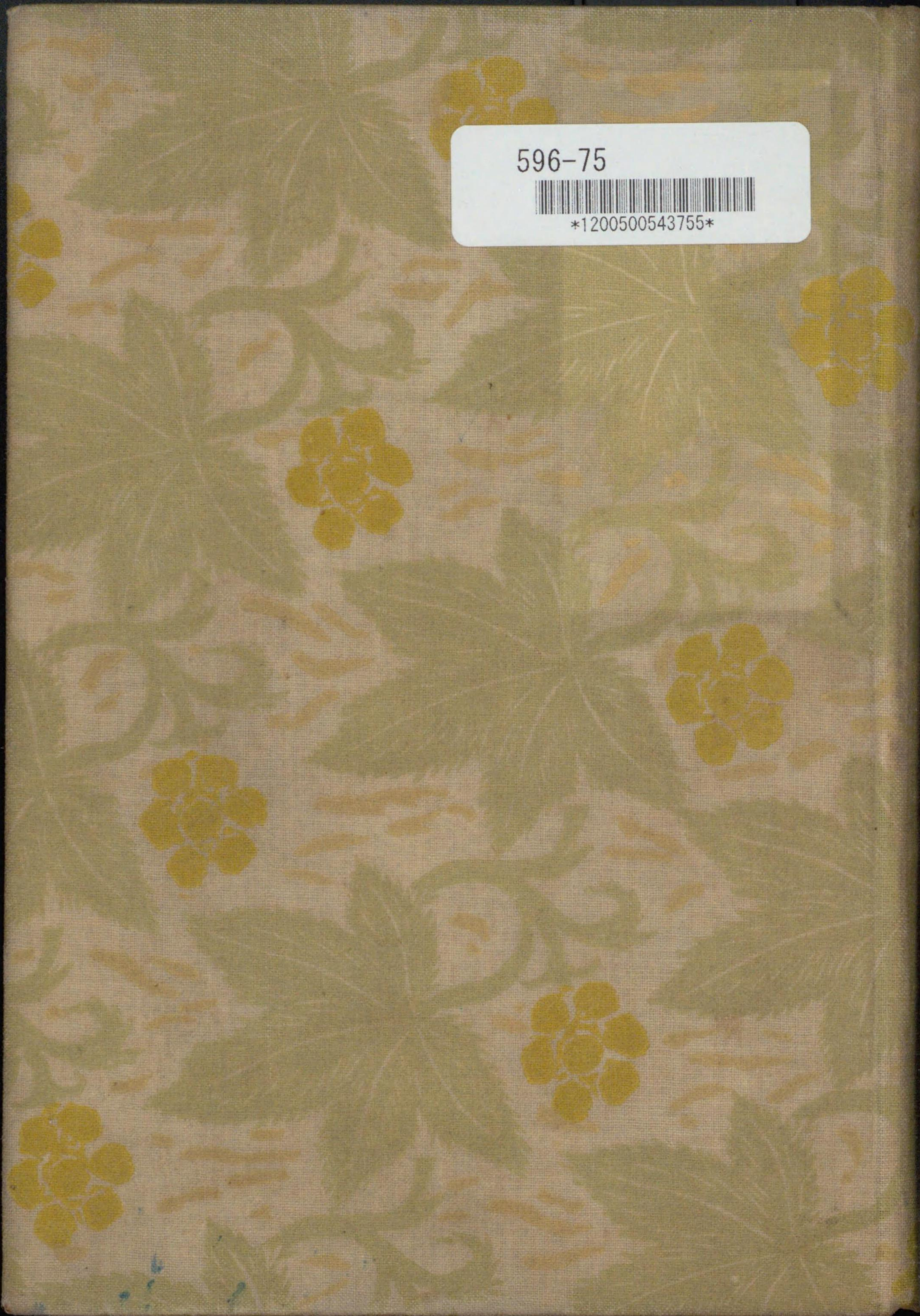


596-75



1200500543755





饗 宴

著 雄 武 藤 加



1929

版 社 潮 新

596

75

目次

婚	約	者	三				
明	日	二五					
或	る	結	婚	式	三		
運	命	の	軌	道	四		
ジ	ャ	ン	プ	六			
戀	と	思	想	と	七		
新	し	い	「	明	日	」	八
友	だ	ち	九				
巴	渦	一〇				



I 種
W



1200500543755

少年畫家	死	燃ゆるもの	不幸な戀人	第二のジャンプ	城西ホテル	水際の家	劇場	明眸難	謀叛人	彷徨	同伴者
.....	床
二六八	二六〇	二四六	二三四	二二九	二〇七	一六六	一八三	一六四	一五三	一四六	一三七

早	第三のジャンプ	裏切者	出	地上の愛	屈辱	死を越えて	まぼろし	女の世界	邂逅	おもかげ	姉と弟と
.....
四四二	四三二	四二四	四一四	三九三	三八二	三五六	三四七	三三四	三〇八	二九四	二八五

饗
宴

加藤武雄著

眸をあげて……………
街頭の雨……………
四四九
四六四

装幀……恩地孝四郎氏

—了—

婚約者

九月中旬の午後三時頃、今年はとりわけきびしい残暑で、美術館の入口の白い石段も、太い石の圓柱も、斜に射す日にかアッと燃えてゐた。丁度二科と院展とが同時に開かれてゐるので、石段の前には五六臺の自動車並び、石段の上にも、時々、出て来る人、入つて行く人の姿が濃い陰影をひいて動いてゐた。

コルテンのズボン穿いたのと、小倉の袴を尻下に着けたのと、いづれも美術書生らしいのが二人、何か興奮した調子にしゃべりながら降りて来たあと、圓柱の蔭に華やかな袂の色がちらと動いたと思ふと、洞穴のやうに暗い入口から、すらりとそこに立ちあらはれた二十ばかりの背丈の高い令嬢があつた。

薄藤に荒い縞模様の明石に青磁の細の帯、帯には大きな翡翠が飾られてゐたが、無造作に束ねられた束髪には、何の装ひもなかつた。

解けばさらりと鳴りさうなその髪は黒さに、雪白な顔がくつきりと映えて、顔は輪廓の正しい希臘型だつた。やゝ濃過ぎる眉と、すつと通つた鼻梁とは、高尚な感じと共に、確に幾らかのいかつさも添へてゐたが、すこし厚目の唇と、二重にくまれた頰とに、ある甘やかな無邪氣さが残されてゐた。殊にすばらしいのは、精巧な牙彫のやうな二重瞼と長い睫毛とに包まれたその二つの眼だつた。十分に理知の鋭さを含み、しかも激しい情熱と、豊饒な夢とをたゞへたその美しい二つの眼だつた。

萬千子は——榎村萬千子、それは彼女の名であつた——二つの展覽會を見終つて、まだ色彩の残影のちらめく眼を、眩しさうに外光にみはりながら、ちよつとの間、そこに繪のやうな立姿を見せて立ちどまつてゐたが、その時塗色の新

しいダイヤナが、輕塵をあげて走つて来て、その石段の下の處で停つた。そして、ひらりと飛び降りた助手が、小腰をかがめながら、恭しくあけた扉から、一人の若い紳士が、エナメル靴の先と、ステッキの銀頭とをきりりと日にきらめかして降り立つた。降り立つた紳士は身繕ひして立ち直りながら、眼をあげてそこに萬千子のあるのをみとめるや、「やあ！」

と思はず叫んだ。同時に、そのオールバックにした白哲の顔が笑み崩れるやうに笑つた。

「これからですか！——お歸りになるところなんですか？」

二十五六かとも思はれるその華美な色の夏服の紳士は、急ぎ足に階段を上つて萬千子の前に立つた。

「歸るところでございますの。」

「さうですか！それは残念でした。しかし、丁度うまくお目にかゝれて宜かつたです。宜かつたです。」

紳士はポケットからハンケチを取り出して額を拭きくいつた。

「實はお宅の方へ電話をおかけしたのです。すると、展覽會へお出掛けだといふことで——多分お目にかゝれるだらうと思つて急いでやつて来たんです。」

「まあ、さうでございましたか？」

萬千子は口許だけで笑ひながらいつた。

「お一人でしたか？」

紳士は、分の厚い金縁眼鏡越しに相手の顔を眺めた。ひどい近眼らしく、細い眼の脛がはれぼつたく盛りあがつてゐた。

「いゝえ。弟と一緒にまゐつたんでございますの。」

「あゝさうですか？千——千尋さん御一緒ですか？」

紳士はひどく早口だつた。紳士がさういふと殆ど同時に、萬千子の弟の千尋が、詰襟の制服姿で出て来た。

「御待遠。」

と千尋はちよつと姉に會釋してから、

「あゝ小野寺さん！」

少年らしい率直さで無造作に頭を下げた。萬千子の弟の千尋は、今年十七のまだ中學生であつたが、姉によく似てすらりとした長身だつた。

「残念でした。もう少し早かつたら、御一緒に観られるんでしたのに。」

小野寺啓三郎は、萬千子と千尋との顔を交るゝ見ながらいつた。

二

「では、御免下さいませ。」

萬千子は態と澄ました調子でいつて、すれ違ひに石段を降りかけた。すると、啓三郎はひどく慌てゝ、

「いや、僕も御一緒に歸りますよ。」

「でも、繪を御覧になるんでせう？」

「いゝえ。繪なんかどうでもいゝです。どうでもいゝです。——これから、僕の自動車でお宅までお送り致しますせう。もしお差支が無かつたら、僕んどこへお寄り下さつて、お茶でもあがつて下さるといゝのですが——。」

「えゝ。」

と、萬千子は困つた顔付をして、

「あの、私共少し散歩致したいと思ひまして——。」

「あ、さうですか？ ぢや、御一緒に散歩ませう。自動車は返して少し歩ませう。」
啓三郎は石段を降りると、そこに待つてゐた自動車の運転手に先に歸るように命じた。そして、にこくと笑ひながら、

「お目にかゝれて宜かつたです。丁度いゝ都合でした。」

さういつて啓三郎は歩き出した。少し猫背で、左足に故障のある啓三郎は軽度の跛をひいた。それを眺める萬千子の口許には苦笑が浮んだ。やりきれないな、といふ氣持がした。だが、この人と一生かういふ風に一緒に肩を並べて歩かなければならぬ自分なのだと思ふと、今更のやうに心が暗くなるのだつた。

「姉さん！ 僕少し咽喉が渴いた。冷たいものをほしいな。」

千尋が甘えるやうにいふと、

「ぢや、あそこの、S—軒へ行きませう。」

啓三郎がすかさず應じた。

三人は、やがてS—軒の庭前の藤棚の下の粗末なテーブルを圍んだ。他には一組も客が無かつた。噴水の音が何かものうげな午後の静けさの中でさらりと鳴つてゐた。小さい黄の蝶が一羽、ひらりと藤棚の葉を縫つて舞ひ去つた。

「どうでした？ いゝ繪がありましたか？」

啓三郎は、アイス・クリームの匙を取りあげながら千尋に問ひかけた。

「さうですね。うまいといやあみなうまいんでせうが、別にこれつてもものも無いんぢやアない？ ねえ、姉さん。」
後半を萬千子にいひ掛けるやうにしていつた。

「さうね。私にやよく分らないけど、千尋さんよかまづい人もどつさりあるやうな氣がしたわ。」

「僕、來年は出してみようかと思ふんですよ。」

千尋は興奮した眼の色になつていつた。千尋はまだ中學生でしかなかつたが、もう五六年も油繪具に親しんで、彼の師事してゐる某畫伯からは天才的だとさへいはれてゐた。

「出して御覽なさいな。來年だつてまだ十八でせう。落選したつて恥にやならないわ。」

「でも、初めから落選ぢや悲觀しぢやふからな。——姉さん、僕、中學を卒業したら、すぐにフランスへやつてもらひたいんです。そして五六年みつしり勉強して來たいんです。お父様に姉さんから頼んでくれない？」

千尋は、薔薇色を頬に輝かしながらいつた。

「えゝ、頼んであげるわ。それもいゝかも知れないわね。」

萬千子はその希望に燃える弟の顔をいとほしむやうに見やつた。その眼付には、いとほしみと共に、いくらかのあはれみに似た表情も交つてゐた。萬千子はいつぞや初めて父から自分の家の財政状態について聽かされた事を思ひ出し、何も知らずにゐる弟の暢氣さを悲しく微笑せずにはゐられなかつた。

「いゝですね。繪をやるなら矢張りフランスですね。千尋君のやうな天才は——。」

「天才だなんて——。」

と、千尋は啓三郎の言葉をいひ消して、

「小野寺さんは、繪が好きですか？」

「えゝ、好きです。非常に好きです。僕も繪なら勉強したいと思つてゐるくらゐなんです。」

啓三郎は力を籠めていつた。

「あら、そんなに繪が好きなんですの？」

と、萬千子は思はず問ひ返した。繪を愛する——せめてそれだけの趣味をでも持つてゐてくれるといふ事が頼しい

気がした。
「え、非常に好きです。」
啓三郎は強くなづくやうにした。

三

「さういへば、今度の院展の『魚籃観音』といふのは却々宜いですね。」

啓三郎は、繪が好きで、その上若干の批評眼さへも持つてゐる事を示さうとするらしくこんな事をいひ出した。

「あら、もう御覧になつたんですの？」

「え、二三日前に一度来て見たのです。今日は、萬千子さんにお目にかゝれるだらうと思つてそれでやつて來たのですよ。」

啓三郎は一寸はにかむやうにして、

「あの大觀の『魚籃観音』は、却々面白いですね。」

「大觀ぢやない、あれは觀山ですよ。」

千尋が訂正した。

「あ、さうですか？ 觀山でしたね。觀山の『魚籃観音』——。」

啓三郎は少し慌て、

「面白いにや面白いけれど、あの顔ですね。ラファエルのモナ・リザにそっくりぢやありませんか？」

「ラファエルの？」

千尋が妙な顔をした。

「ラファエルのモナ・リザですよ。」

啓三郎は得意さうに繰返した。

「は、ムム。」

と、千尋は笑ひ出して、

「モナ・リザなら、ラファエルぢやありませんよ。ダ・ヴィンチです。」

「あ、さうでしたかね。さう、ダ・ヴィンチの、モナ・リザ——。」

「モナ・リザですよ。」

「何だつていゝぢやないの？ 千尋さん。」

と、萬千子は、口許ではふき出しさうに、眼ではきつとたしなめるやうにして、

「本當ですわ。あの觀音さん、モナ・リザにそっくりよ。私もさう思ひましたわ。」

「そっくりでせう。ね。」

と、重ねの失敗にすつかりへどもどとしてしまつた啓三郎は、萬千子に執成されてほつとしながら、

「あれは、僕、たしかに摸倣だと思ひますね。」

「さうかも知れませんか。」

「それで、ね。萬千子さん。」

と、啓三郎はばちくと隣ながら萬千子の顔を見て、

「あなたは、時々、あの繪のやうな口許をなさるですよ。」

「繪のやうな口許？」

「え、あゝいふ笑つたやうな笑はないやうな妙な口許をなさるのです。よく似てゐますよ。」

「観音様に？ モナ・リザに？」
「兎に角あの繪に似てゐるんです。」

「まあ、さうでせうか？ — ぢや、あなた、あのモナ・リザがどうしてあんな妙な口許をしてゐるか御存じ？」

「知らないです。」

啓三郎は正直にさういつた。

「あの人、不幸な人だつたんですよ。」

「さうですか？」

「不幸な結婚をした女だから、あんな妙な口許をして笑つてゐるのですよ。」

「不幸な結婚？」

啓三郎は流石に、ぢつとその眼を据ゑるやうにした。

「ほ、ほ、ほ！」

と、萬千子はだしぬけに笑ひ出して、

「だから、私が、あんな妙な口許なんかしてゐる筈がございませぬわ。私、この上も無い幸福な結婚をする事になつてゐるのですもの。」

「勿論、僕はきつとあなたを幸福にしてあげますよ。」

啓三郎は、感激的な調子でいつた。

「ほ、ほ。」

と、萬千子は、黙つて聴いてゐた千尋の顔を見ると、急に弟の前に恥づかしくなつたので、てれ隠しにもう一度

笑つて、

「何だか妙なお話になりましたわねえ。」

「いゝえ。面白いです。今日は萬千子さんいつもと違ひますね。」

「さうですか？ どう違ひますの？」

「今日は大變な元氣です。いつもは、少し沈んでゐらつしやるのですが——。」

「私、これで随分蓮葉娘なんですよ。今に憫れておしまひになりますわ、きつと。」

實際、今日はどうした加減か少しはしやぎ過ぎてゐると思ひながら、萬千子はこんな事をいつた。

四

「いゝえ、結構です。僕は活潑な方が好きなんですから。」

「活潑ならいゝけれど、私のははねツかへりなんですのよ。何しろこれで、女學校時代には跳躍の選手でしたもの。」

萬千子が笑ひながらいつた。

「えゝ。知つてゐますよ。あなたが、神宮競技場で、走幅跳のレコードをお作りになつた時僕は觀てゐたのです。あれは二年前の菊花節の日でしたね。」

啓三郎は近眼鏡の底で瞬ながらいつた。

「あら、あの時？」

「あの時、初めて僕はあなたといふ方を知つたのです。眞白な運動着でまるで白鳥のやうだつたです。そして實に美しいフォームで——僕はすっかりチャームされてしまつたですね。」

啓三郎は熱心にいつた。

「あら、あんな事仰有つて——。」

萬千子は又しても苦笑したが、その時萬千子の眼には、青く晴れた秋の空や、紅白の幔幕や、日光のさんくと降りそぐフィールドや、スタンドにどよめく観衆や、そんなものが未來派の繪のやうに錯雜しながら浮びあがつた。その幾萬の觀衆の視線を浴びて晴れがましく競技の庭に立つた時の若々しい力で張り切つた自分の姿——それが二年前の自分とは思はれぬ程の速さでかへりみられた。

「それで僕は家に歸ると、直ぐに宮子に訊いたのです。そして、あなたのお名前を初めて知つたのです。そして——」
熱心になればなるほどの早口で、啓三郎はいひ續けようとした。

「ちやア——」

と、萬千子はそれを抑へるやうに笑ひかけた。

「私の、はねツかへりなところがお氣に召したのだとしても仰有るの？ 父などはそんなに飛んだり跳ねたりばかりしてゐちやア、お嫁に貰ひ手が無くなるだらうツて、心配してをりましたけど。」

「そんな事アないです。そんな事アないです。僕はスポーツは大好きです。ゴルフなら僕も少しはやるんです。」

まあ、この人が跛を曳きくゴルフをやる時の恰好はどんなだらうと思ひながら、

「いろく御趣味がお廣いのね。」

と萬千子はいつた。

「萬千子さんは、ダンスはおやりですか？」

「いえ。」

「うちの宮子はうまいですよ。夏中鎌倉では毎晩××ホテルのダンス・ホールへ出かけて行きました。」

宮子といふのは、啓三郎の従妹で啓三郎の家に身を寄せてゐる娘だつた。萬千子とは女學校時代に同窓だつた。いかにダンスの上手さうな、そしてダンスの好きさうなモダン・ガールだつた。

「私ダンスなんか駄目ですわ。あなた、なさいまして？」

この人が跛を曳きくダンスをするところは——と、慘酷な諧謔をもう一度心に弄びながら萬千子は訊いた。

「いえ。僕はあんなもの嫌ひです。あんな浮きくしたものは大嫌ひです。僕はいつも宮子にいふのです！ ダンスなんかやる女は大嫌ひだつて——」

啓三郎はさも厭はしげに激しく頭を打ち振つた。

「あら、だつて——」

「ダンスなんかやる蓮葉娘は僕嫌ひです。」

「あら、私だつてこんな蓮葉娘なんですのに——」

「いえ、あなたはいいですよ。」

「どうしてよすの。」

「蓮葉娘でも何でも、あなたはいいですよ。」

「だつて——」

といひかけたが、ふと先刻から黙つて聽いてゐた千尋の薄笑を浮べた顔に氣がつくと、萬千子は又急にひどく恥づかしくなつて口を噤んだ。本當に、何て馬鹿々々しいノンセンスな會話なんだらう？

「出かけませうか？ 姉さん。」

と千尋がいつた。

「え。」

萬千子はうなづいた。

三人はそこを出て、漫然と山下の方へ歩を運んで行つた。

緑色のバラソルに深く顔を隠すやうにした萬千子に、ひたと寄り添ふやうにして啓三郎は歩いた。啓三郎は、いそいそと子供ツぽく悦んでゐた。婚約が成り立つてから三月にもなるが、そして幾度となく會つてはゐるのだが、今日のやうに打ちとけて話し合つたのは初めてだったので、啓三郎は、もう有頂天になつてゐるのであつた。

だが、萬千子は何時の間にかすつかり不機嫌になつてゐた。萬千子は、黙つてゐればどこまでもついて來さうな啓三郎と、どうして別れようかと、その口實を考へてゐた。

「ねえ、千尋君、君も一緒にこれから僕の家に行かうぢやありませんか？」

「いえ、僕は今日は用事があるんです。」

千尋は無遠慮に頭を振つた。

「さうですか？ それは残念ですねえ。萬千子さん、あなたはいゝでせう。」

「私も今日はこれで失禮させていただきますわ。」

「何か——何か御用でもありませんか？」

「ええ。一寸——。」

こんな應酬のうちに山下の停留所近くまで歩いて來た時であつた。

「萬千子さん！」

後からさう呼ぶ聲がした。振返つた萬千子の眼の前に、クリーム色のワンピースをすかくしく着た娘が、血色のいゝ健康さうな圓顔で晴れ々と笑つてゐた。

「あら、柳子さん——。」

「さつきから尾行して來たのよ。知らなかつて？」

「相變らず人がお悪いのね。矢張り展覽會？」

「ええ、だけど本當にお久振りね。千尋さん、しばらく——。」

萬千子の親友の結城柳子は、千尋の方へも愛想よく笑ひかけた。千尋はべこりと頭をさげた。——啓三郎は少し離れたところでまぶしさに瞬をしてゐた。

「すぐお歸りになるの？」

萬千子が訊いた。

「どうでもいゝのよ。」

「私、あなたをお訪ねしようと思つてゐたところなの。」

「ぢやア、いらつしやいな。——でも、構はないの？」

柳子は萬千子の同伴者の方へ眼を遣りながらいつた。

「構はないのよ。——丁度よかつたのよ。」

萬千子は小聲で答へて置いてから、啓三郎の方へ歩み寄つて、

「あの、お友達に逢ひましたから私、失禮させていたゞきますわ。」

「さうですか？」

と啓三郎はいかにも残念さうにいつた。

「ぢや、失禮致します。」

萬千子は斯ういひながら一寸會釋すると、急ぎ足に線路を突つ切つて赤い柱の方へ歩いた。丁度そこに電車が停つ

てみた。萬千子は素早くそれに乗った。柳子も千尋も續いて乗った。

「どうしたのよ？」

柳子は萬千子と並んで吊革に手をかけながらいつた。

「なあに？」

「だつて、まるで逃げるやうにして？」

「ほ、ほ、ほ。」

萬千子は可笑しさに笑つた。

「彼人誰なの？」

「誰だと思つて？」

「わからないわ。」

「どう？ あなたの印象は？」

「印象ツて？」

「立派な紳士ぢやないこと？」

萬千子は反語的にいつて、

「ほ、ほ、ほ。」

と聲をたて、笑つた。いかにも可笑しくて可笑しくてたまらぬといふ風に。

「何を笑つてゐるの？ 可笑しな方！」

「だつて可笑しいんですもの。」

「何が可笑しいのよ？」

と柳子はずりこまれて笑ひ出しながら、

「だけど、本當にあれ誰なのよ？」

「あて、御覽なさい。」

「そんな無理な事いつて——。」

「ぢや教へてあげませうか？ もう一月したら、私のハズバンドになる人なのよ。」

「あら、さう？」

六

それから三十分ばかり後、萬千子はお茶ノ水のアパートメントの柳子の部屋に、柳子と向ひ合つて話してゐた。柳子は下町の方の大きな商家の二番娘で、思ひきつて舊式な家庭に育ちながら、その家庭の重壓を滑りぬけ、ある雑誌社に勤て自立の生活を営んでゐる小さな反抗兒だつた。

「私はいやだな。」

と、柳子は卓の上に突肘した兩腕をX形に胸もとに組み、頤を突き出すやうにして萬千子の顔を凝視した。そのやんちやらしい、くるりと圓い眼には明に非難の表情が動いてゐた。

「だつて仕方がない——。」

「仕方がないつて事アないわ。親のためだの家のためだのツて、今更そんな事馬鹿々々し過ぎて話にも何にもなりやアしない。それがあなたの悲劇だとすりやア、だいち筋書があんまり古過ぎるわよ。」

「それは私にだつて分つてゐるわ。あなたに話したらきつと嗤はれるに違ひないと思つて居たわ。」

萬千子は憂鬱な微笑でいつた。

「馬鹿々々しくつて、嗤へもしないわ。」
柳子はむしろ腹立たしげだった。

「だけどいざとなつてみると却々然うもいかないものよ。私もお父さんから——父から初めてその事情を聴かされ時は、何よりも先づ可笑しかったわ。だから私、父の前で笑ひ出してしまったのよ。だつて何もかもが餘り型通り過ぎるんですもの。お前には本當に濟まないがさういふ事情なんだから一つ犠牲になるつもりで行つてくれ——父は、涙ぐんだりしてゐるんだけど、私何だか可笑しくなつてしまつて——。」

「古いお芝居の臺詞だね。(濟まないが犠牲になつて行つてくれ!) (分りました。お父さん、ぢやア私死んだつもりでまゐります。馬鹿らしいツチャやない!」

「馬鹿らしい事は分つてゐるのよ。でも、自分がさうしなきや見すく親兄弟が死地に落ちるといふ場合を考へて御覽なさいな。」

「——だから自分が犠牲になるといふのは奴隸の道德だわ。奴隸時代の女性の道德だわ。私ならそんな事斷然いやだな。」

と柳子は又形に組んだ手を頬杖に直しながらいつた。

「それは私、自分ながら意氣地無しだと思つてゐるわ。勇氣が足りないんだわ。」

「私、正直のところ萬千子さんはそんな意氣地無しぢやないと思つてゐたわ。」

「何が私をこんな意氣地無しにしたか、柳子さん知つてゐる？」

萬千子は柳子の攻撃的な眼付を見返しながらいつた。

「あなたをそんなに意氣地無しにした、何か特別の理由があるとでもいふの？」

「あるのよ。——私だつて、唯、親のため家のためなんて事ではかりこんな結婚を選んだのぢやないのよ。」

「ぢや、どういふわけなの？」

「私、あの男を愛してゐるのよ。あの人少し低能のやうだけど、一寸とぼけてゐて面白いのよ。」

萬千子は笑つた。

「何いつてるの？」

「本當よ。私、度々會ふうちにあの跛さんがそんなに嫌ひぢやなくなつたのよ。いくらかづゝ好きになつてゆくよ。自分で氣がつかないうちに、段々あの男を愛し初めて來たらしいの。」

と、萬千子は、冗談とも眞面目ともつかぬ調子でいつた。

「それに、あの人は忠實なの。まるで犬のやうに——奴隸のやうに忠實なの。私をあの男のところへゆかせるのは奴隸の道德かも知れないけど、あの人の處へ行けば私は奴隸でなくて女王なのよ。」

「愛してゐるんなら、そんならそれでいふ事はないぢやアないの？ でも、そんな自棄な事いつちや駄目よ。」

柳子は、たしなめるやうな眼で萬千子を見やつた。

「自棄——自棄といやアまあ自棄だわね。だけど柳子さん。」

と萬千子は急に眞顔になつて、

「どうして私がこんなに自棄になつてしまつたか？ それをあんた知つていらつしやる？」

七

「ぢやア、何かの事情で自棄になつて、その氣持も手傳つて、それでそんな結婚をするんだといふのね？」

「その氣持も手傳つて——ぢやない。その氣持が主なのよ。私はこの人生といふものに對してすつかり自信を失つてゐるのよ。」

萬千子の、刺繍した襟の下で白い胸肉が揺れた。彼女の言葉には底深い嘆が籠つてゐた。

「自信を失つて——？」

「ええ、私はもう自分で自分が頼めなくなつたの。自分で自分を、信ずることも愛することも出来なくなつたの。」

「なぜでせうね？」

と、柳子は問ひ返したが、なぜ萬千子がそんな事をいふのか？ 柳子にもそれが分らない事はなかつた。柳子は痛

ましげな眼付で萬千子の顔を眺めた。

「柳子さん！ あなたは幸福よ。」

「なぜ？」

「吉浦さんのやうな方があれば、私だつてとつとくに家出でも何でもしてゐるんだけど——。あなたには失戀した女の氣持は分らないわ。」

「失戀だなんて——どうもへんだなあ！」

と、柳子はまじくくと相手を視成りつゞけながら、

「あなたの口からそんな言葉を聞くのは實際へんよ。たとへば、百萬長者のお金持から貧乏の愚痴を聴かされるやうな氣がするのよ。まづい譬喩だけどね。」

「だつてさうに違ひないぢやアないの？ 私、丁度一年半待つたわ。一日を千日にもしての一年半ですもの。待つには長過ぎる月日だつたわ。」

「まるきり消息が無いのね？」

「ええ、まるきり。——でも、私今年の春頃までは、まだ失望しきりやしなかつた。きつと戻つて来る！ さう思つてゐた。戻つて来ない筈はない！ さう思つてゐた。それはね、一時の氣紛からほかの女に心を奪はれたにしろ、い

つかはきつと私の方に戻つて来る——と思つてゐたのよ。私は、その競争者に對しては堅く自分の優越を信じてゐたんですもの。だけど、それは私の自惚だつたのよ。あの人はたうとう歸つて来ない！ 私は矢張り負けたんだわ。あの人の人にとつて私なんか何でもない、何の價値もない女だつたんだわ。」

萬千子はさういつてもう一度深く嘆息した。

「もし、さうだとしたら、あの人には——石田さんにはあなたの眞價が分らないんだわ。あなたの眞價が分らないやうな人は駄目だわ！ 私にいはせてもらへば、あなたがあの人に價しないんぢやない、あの人があなたに價しないんだわ！ そんな人思ひ斷つてしまつた方がいゝのよ。」

「だから思ひ斷つたのよ。」

萬千子は例の淋しい微笑を見せた。

「相手を思ひ斷る事と、自分自身の思ひ斷る事とは違ふわ。」

「自分自身をも——。然うよ。面倒臭いからついでに思ひ斷つてしまつたのよ。見切りもの大安賣り！ 愚圖々々してゐるうちに、埃を被つて棚ざらしになると始末が悪いからね。でも、向うにいせりや、大安賣りどころぢやないかも知れないわ。あんまり高價過ぎる——現に向うのお姑さんなんか、さういつてひどく反對したさうよ。ほ、ほ、ほ！」

柳子も思はず誘ひ込まれて笑つたが、笑ふにはあまりにいたましい諧謔だつた。

「ぢやア、今どこにゐらつしやるか？ それさへ分らないのね。」

柳子は、一年半前に突然萬千子の前から姿を消してしまつた萬千子の戀人について問ふのであつた。

「ええ、まるきり分らないの。——だけど、不思議な事があるの。二三日前の晩、私用事があつて神樂坂を歩いてゐると、すれ違ひながらちらと見た横顔が何だかあの人にそっくりのやうに思はれたの。若しかしたら東京にゐるのか

萬千子の、刺繍した襟の下で白い胸肉が揺れた。彼女の言葉には底深い嘆が籠つてゐた。

「自信を失つて——？」

「え、私はもう自分で自分が頼めなくなつたの。自分で自分を、信ずることも愛することも出来なくなつたの。」

「なぜでせうね？」

と、柳子は問ひ返したが、なぜ萬千子がそんな事をいふのか？ 柳子にもそれが分らない事はなかつた。柳子は痛

ましげな眼付で萬千子の顔を眺めた。

「柳子さん！ あなたは幸福よ。」

「なぜ？」

「吉浦さんのやうな方があれば、私だつてとづくに家出でも何でもしてゐるんだけど——。あなたには失戀した女の

氣持は分らないわ。」

「失戀だなんて——どうもへんだなあ！」

と、柳子はまじくくと相手を視成りつけながら、

「あなたの口からそんな言葉を聞くのは實際へんよ。たとへば、百萬長者のお金持から貧乏の愚痴を聴かされるやう

な氣がするのよ。まづい譬喩だけどね。」

「だつてさうに違ひないぢやアないの？ 私、丁度一年半待つたわ。一日を千日にもしての一年半ですもの。待つに

は長過ぎる月日だつたわ。」

「まるきり消息が無いのね？」

「え、まるきり。——でも、私今年の春頃までは、まだ失望しきりやしなかつた。きつと戻つて来る！ さう思つ

てゐた。戻つて來ない筈はない！ さう思つてゐた。それはね、一時の氣紛からほかの女に心を奪はれたにしろ、い

つかはきつと私の方に戻つて来る——と思つてゐたのよ。私は、その競争者に対しては堅く自分の優越を信じてゐた

人にとつて私なんか何でもない、何の價値もない女だつたんだわ。」

萬千子はさういつてもう一度深く嘆息した。

「もし、さうだとしたら、あの人には——石田さんにはあなたの價値が分らないんだわ。あなたの價値が分らないや

うな人は駄目だわ！ 私にいはせてもらへば、あなたがあの人に價しないんぢやない、あの人があんたに價しないん

だわ！ そんな人思ひ斷つてしまつた方がいゝのよ。」

「だから思ひ斷つたのよ。」

萬千子は例の淋しい微笑を見せた。

「相手を思ひ斷る事と、自分自身の思ひ斷る事とは違ふわ。」

「自分自身をも——。然うよ。面倒臭いからついでに思ひ斷つてしまつたのよ。見切りもの大安賣り！ 愚圖々々し

てゐるうちに、埃を被つて棚ざらしになると始末が悪いからね。でも、向うにいはせりや、大安賣りどころぢやない

かも知れないわ。あんまり高價過ぎる——現に向うのお姑さんなんか、さういつてひどく反對したさうよ。ほ、ほ、

ほ！」

柳子も思はず誘ひ込まれて笑つたが、笑ふにはあまりにいたましい諧謔だつた。

「ぢやア、今どこにあらつしやるか？ それさへ分らないのね。」

柳子は、一年半前に突然萬千子の前から姿を消してしまつた萬千子の戀人について問ふのであつた。

「え、まるきり分らないの。——だけど、不思議な事があるの。二三日前の晩、私用事があつて神樂坂を歩いてゐると、すれ違ひながらちらと見た横顔が何だかあの人にそっくりのやうに思はれたの。若しかしたら東京にゐるのか

も知れない。」

「ぢや、どうして探して見ないの？」

「いゝえ。あれはきつと、氣の迷で見た幻影のやうなものかも知れないわ。今までも、そんな事は數知れずあつたのですもの。さう思つて見ると、逢ふ人逢ふ人の顔がみんなそんなやうに思はれて——だらしが無いッたらないの。」

萬千子は自ら嘲るやうにいつた。

八

萬千子が、牛込の加賀町の家に歸つたのはもう夕方になつてからであつた。

「あ、お歸んなさい。」

と、彼女の繼母——彼女の父の後添のまだやうやく四十そこくの若い繼母は、彼女の姿を見ると直ぐにいつた。

「遅かつたのね。今のさつきまで、M——の番頭が來てゐたのだよ。つい、一足違ひで歸つたところだがね。いろいろ見本を置いて行つたから、こつちへ來て見て下さいな。」

繼母の關子は少し興奮した調子でいつた。もう一月足らずに迫つた萬千子の結婚の準備で、繼母は何かと忙しく、忙しさのために緊張してゐた。衣裳の支度だけでも大變だつた。が肝腎の萬千子は、すべてに對してまるで他事のやうに冷淡だつた。

「え、あとで——あとで見せて頂きますわ。」

萬千子はうるさうに、首を振つて、自分の部屋へはひつて行つた。そして縁先の藤椅子に、何がなしに疲れ切つた身體を投げ掛けた。黄昏の庭には、すがれ際の夏花が、やゝ聳立つた空氣の中に仄かな色彩をこぼしてゐた。そこへ千尋がはひつて來た。途中から別れて郊外の方の友人を訪ねた千尋は、今歸つて來たところだつた。

「姉さん！」

「なあに？」

と、少し間を隔ててから、萬千子は物憂く答へたが、千尋は別に話し掛けようとしなかつた。千尋は柱に寄りかかつたまゝ、物思はしげな姉の、ひどく蒼ざめて見える横顔をちつと眺めるのであつた。

「え？ なあに？」

と、萬千子は促すやうに問ひ返した。

「何でもありません。」

「どうかしたの？ 千尋さん。」

「いゝえ。どうして？」

「だつて。何か考へ込んでゐて——。」

「姉さんこそ、ひどく考へ込んでゐるんぢやアない？」

「いゝえ。私、何も考へ込んでなんかもやしない。たゞ、ぼんやりしてゐるだけよ。」

萬千子は淋しく微笑した。

その淋しい微笑——千尋は、それを見ながら思ふのだつた。曾ての姉はもつと快活で晴れ々としてゐた。いつも朗かに笑つてゐた。決してこんな淋しい微笑などは見せなかつた。これは最近——少なくとも、この一年ぐらゐ以來見せはじめた一種特殊な表情である。それは、たとへば逆巻く怒濤を底に籠めた深い湖水の表面に浮んだ小波のやうなものであつた。その淋しい微笑の底に、どんなに激しい苦悶がひそめられてゐるか？ しかしそれを知るには、千尋はまだあまりに少年だつた。

「だけど、僕にや分らないなあ！ 姉さんはどうしてあんな人と結婚するんです？」

千尋は姉の顔に熱ッぽい眼を投げつけながらいつた。多くの求婚者、多くの求愛者のうちから、どうして選りも選つてあんな男を選んだのか？ 否、それが姉が進んで選んだのではないとしても、どうして手強く拒み切らなかつたのか？ 千尋にはそれが不思議であり、同時にまた不平でもあつた。この美しい姉にとって、あの男はたしかにあまりに釣合はなさ過ぎる！

「そんな事いふものぢやないわ。」

「だつて——どうも僕にや姉さんの氣が知れない。」

「どうでもいゝぢやないの。子供のくせに、そんな事問題にするのは生意氣だわ。」

千尋は、姉の調子の思ひ懸けない激しさにちよつとたぢくとなり、やゝ不平らしく口を噤んだが、

「僕、今日妙な人に逢ひましたよ。」

と、ふと思ひ出したやうにいつた。

「妙な人ッて、どんな人？」

「省線の電車の中で、いきなり僕に話し掛けました。失敬だが、君は榎村君といふんぢやないか？ と訊くからさうだといふと、矢張りさうだつたね、君の姉さんはどうしてゐますッて訊くんです。可笑しな奴なんです。」

「さう、可笑しな人ね。」

と、萬千子はいつたが彼女の胸は激しく躍りはじめた。

明日 日

結婚の日は次第に近づいて来た。ぼつ／＼と祝の品が持ち込まれたりして、繼母を初め、周囲の者はそのために忙しく動いてゐたが、萬千子にはどうしてもそれが他事としか思へなかつた。

「本當にどうしたといふのですよ？ 私にばつかり氣を揉ませて——自分の事ぢやありませんか？」

と繼母は焦ら立たしくいふのだつたが、萬千子は、

「濟みません。お母様。」

さういつて、例の淋しい微笑を見せるだけだつた。

萬千子は斯うして、刻々に迫つて来る結婚に面をそむけてゐた。面をそむけてゐても身體は次第に牽き寄せられてゆく。否應なしの、それがすでに定められた運命なのだ。今更なるものでもない——さう思ひながら、しかし萬千子は、何か斯う、奇蹟のやうなものが現はれて、自分をこのすでに定められた運命の軌道から救出してくれる事を空想するのだつた。少し古風過ぎる譬喩だが、首の座に坐つて、落ちかゝる刃の下に、なほ赦免の使を待ち望む氣持

——そんな氣持だつた。

「明日」——人は皆この「明日」の希望に生きる。それが確實な期待であると、當もない空想であることを問はず、「明日」の何ものかを想ふことによつて人は生きるのである。「明日は？ 明日は？」あの北歐の文豪の言葉をこゝに持ち出すまでもなく、人は「明日は？」の觀念に引かずられて墓への道を辿つて行くのであらう。

とりわけ、萬千子の場合がさうだつた。萬千子はその愛人が、何の理由をも告げずに突然姿を消してから今日の日

までの一年半の間、毎日、「明日」をのみ思ひ續けてゐた。一年ほどの間は、彼女は必ず彼のもう一度歸つて来る事を信じてゐた。信じてそして待つてゐた。彼女は夜のベッドにつきながらいつも斯う繰返した。
「今日はたうとう空しく過ぎた。明日は——明日はあの人を連れて来るかも知れない。」
さうして一年が経つた時、流石に彼女も、待つ事に疲れ、待つことの愚さを知りはじめた。絶望が徐々に彼女を蝕んだ。彼女は深い溜息と共にいつた。
「駄目だわ！ 矢張りあの人には歸つて来ないわ！ ——私は捨てられてしまつたのだわ！」

彼女が、あの熱心な求婚者の申し出に承諾の返事を與へたのは、その絶望の結果だつた。彼女はみじめな失戀者としての自分をそこに見出した時、さうした自分を、憐れむ代りに輕蔑した。
(萬千子！)

と、彼女は自分で自分に呼びかけるのであつた。

(お前はたうとう捨てられたのだね。何てみじめな女なんだらう？ お前は生命がけで愛した人に、古ハンケチか何かのやうに捨てられたのだね。お前は、それほど無價値なつまらない女だつたの？)

彼女は、さうした無價値なつまらない女でしかないところの自分を、この上もう愛する事が出来なかつた。愛する事が出来ないばかりか、憐れむ事さへ出来なかつた。

こんな時多くの女は、自ら憐れんで泣くその涙をせめていくらかの慰とするであらう。が、萬千子はそれをしなかつた。胸底からこみあげて来る慟哭が、かみしめた唇でびたりと閉ざし籠められた時、彼女の口許には、例の淋しい微笑がぎざみつけられた。彼女の口許の淋しい微笑——冷たい、謎めいた、啓三郎にはせると時としてモナ・リザのそれにも似通ふその微笑は、人一倍誇の強い彼女が、それゆゑにこそ自ら思ひ棄てた、悲しい自棄の思をこめてゐるのであつた。

自棄と絶望と——彼女は、かうしてたうとう啓三郎の申し出を承諾した。だが、その諦の底にも彼女の情熱は、ともすれば燃え立ち、彼女の夢みがちな眸は、又しても「明日」を望んで輝くのであつた。

「明日！」

そこにはまだ幾つかの「明日」が残されてゐる。どんな奇蹟があらはれて、どんな新しい運命を自分の前に展いて見せてくれるかわからないのだ——。

愈々結婚の日も近づいたといふ時になつて、「明日」が再び彼女に魅へり、再び彼女を誘ひはじめたのであつた。

二

自ら思ひ棄てながら、なほいくらかの棄てかねた心で、「明日」の奇蹟に、萬一の望をかける——それは矛盾といへば矛盾に違ひなかつた。

が、最後の日が——彼女の運命を決定すべき最後の日が近づくにつれて、この氣持は、益々彼女の心に昂じて行つた。彼女は、日數を數へては、まだ二十日ある、まだ十五日あると思つた。二十の「明日」。十五の「明日」。

だが、「明日」は一つづつ音も無く通り過ぎた。結婚の日は、もう十日の後に迫つて来た。結婚の日が迫つて来るにつれて、彼女は次第に堪へ難い焦燥に捉はれ初めた。

(萬千子！ お前は——)

と、萬千子は、その徒らな焦燥を、冷たく自嘲せずにはゐられなかつた。
(何て馬鹿な女なんだらう？ 今更何をくだらない事を考へて——)

それにも拘らず、萬千子は「明日」への、いや、次の刹那への、何ものかの期待を棄てる事が出来なかつた。あの日の、弟の千尋の話が、萬千子にはいつまでも氣になつた。省線の電車の内で突然千尋に話しかけ、自分の

ことを訊いたといふその男——その男は一體誰なのだらう？」

「いきなり、そんな事きくんだもの。餘り失敬だから、僕、何も返事なんかしてやるまいかと思つたんだ。」

と、千尋はひどく憤慨してゐた。

「さう？ それでどんな人だつたの？」

「どんな人つて？ 色の黒い、瘦せた人だつたよ。——何だか不良さうな奴だつた。」

「それで千尋さん、何て返事をしたの？」

「家にゐる——さういつた。」

「それなら？ それなら何といつて？」

「それツきり、黙つてゐた。僕はへんな奴だと思つたから、うんと睨みつけてやつた。すると、少ししてれたやうな顔をしてゐた。そのうち、四谷見附へ來ると『失敬』ツていつて降りて行つた。」

「さう？ ぢやア、千尋さんの方ぢや全く記憶のない人なのね？」

「あゝ、どう考へて見ても知らない人なんだ。」

「で、どんな顔の人？」

「どんな顔つて、さう訊かれると一寸困るな。色の黒い、瘦せた、眉の濃い——。」

「髪は短くかつてゐるやしなかつて？」

「いゝや、髪はもぢや〜に伸ばしてゐたと思ふ。」

「年齢はどのくらゐ？」

「さあ、二十五六かな？ それとも三十五六ぐらゐかな？」

「あら、二十五六と三十五六ぢやあんまり違ひ過ぎるぢやアないの？」

「一寸の間——ほんの二言三言話し合つたばかりだもの、そんなによく見やしなかつた。だけど、姉さん心當りがあるの？」

「いゝえ、別に心當りなんかありやしないけど——。」

と、萬千子は異様な胸騒を感じながらいつた。瘦せてはゐなかつた。寧ろ、いくらか肥つてゐる方であつた。色が黒く、眉の濃いのは、彼も亦さうであつた。髪は、あの時分の彼は毳栗にしてゐたが——など、萬千子は胸の扉に彫りつけてゐるその人の面影を千尋の言葉と對照して見た。そして、あのいつぞやの夜のそゞろ歩きに、神樂坂の人込のなかでちらと見た姿をもそこに思ひ合せて、若しや？ と胸を騒がすのであつた。

「姉さんはシャンだからな。女學生時代にも随分騒いだ奴があるんでせう。姉さんが知らないでも、先ぢや大騒ぎをしてる——さういふ奴が随分澤山あるだらうと僕思ふな。姉さんが結婚しちまつたら、さういふ奴はみんなつかりするよ。」

「何をつまらない事をいふのよ。」

と、萬千子は千尋をたしなめたのであるが、若し、それがあの人であつたなら——と思ふと、千尋の暢氣さが腹立たしい氣がした。だが、千尋は、何も知らないのだつた。堅く〜秘密のうちに包まれてゐた彼女の戀であつたから——。

三

萬千子の胸に一つづゝの嘆息を残して「明日」は一つづゝ消えて行つた。もう十日、もう七日と數へるうちに、結婚の日は愈あと三日といふところまで押し迫つて來た。

(もう駄目だわ。矢張これでいゝんだわ。)

萬千子はちつと眼を閉ちて、かうその心に繰返した。自ら選んだ運命でないまでも、自ら許した運命ではないか？
もう何もかも諦めきつてゐる筈ではないか？ 何を今更——。
だが、その諦の一方で故もない焦ら立ちが益昂じて來た。かうしてはゐられない——さういふ氣持が當も無く彼女を驅り立てるのだつた。
その日の夕方、脱け出すやうにして家を出た萬千子は、お茶ノ水のアパートメントに柳子を訪ねたが柳子は生憎留守だつた。

それから二十分の後、やゝ飄立つた黄昏の空気に、ちらく／＼と灯のともり初めた銀座の街のしめつぽい鋪道を、萬千子は重い歩を刻んでゐた。何しに、こんな處に來たのか？ それは萬千子自身にも分らなかつた。

たゞ、萬千子は、三日の後に迫つた自分の結婚のためにひしめき騒いでゐる家へ歸りたくなかつた。——萬千子はやうやく宵の雑沓に入りかけた人通の中を、一人の漂人のやうにして歩いてゐた。

いつの間にか、思ひ出が彼女を捉へてゐた。彼女は彼と二人でこの鋪道の上を歩いたいくつかの夜をそこに思ひ浮べた。袂のかけで握り合はされた手のしつとりした汗ばみや、耳朶をこそぐるやうな瞬の熱い息づかひや、そんなものが感覺的に甦つて來た。その頃の彼女は戀の喜びで一ぱいだつた。その一歩々々が、白い鍵黒い鍵を踏んでそこに楽しい青春の歌が奏で出された。この街のあらゆる灯といふ灯が、皆自分のために輝き、走り交ふ自動車の響さへ自分のためにあげる歡呼の聲かと思はれた。

が、今は——今は、この華やかな街も墓のやうに淋しかつた。
彼女はふと立ち停つた。そこは、とある街角の、銀行か何かの大きな建物の前であつたが、上り口の石段を背に、瘦せさらばうた一人の老婆が、うす暗くうづくまり、三味線を抱へてぼつ／＼と鳴らしてゐるのだつた。華やかな散歩者達は、眼もくれずに通り過ぎて行つた。萬千子は何かそのみじめな姿に心が牽かれた。彼女は、紙入から銀貨を

一つ出して老婆の前へ投げた。老婆は、地に額をすりつけるやうにしてお辭宜をした。
そのお辭宜から逃げるやうに老婆の前を離れて、二三歩あるき出した時だつた。彼女ははつとして立ちどまり、思はず背後を振り返つた。彼女の視線の外をちらと掠めて行つた男の顔——濃い眉と、鋭い眼と、きり／＼とひきしまつた口許と——。彼女は振り返りざま、思はず、

「石田さん。」
と心の中に叫んだ。

振り返つた彼女の視野のうちには、いくつかの人の姿が入り亂れて動いてゐた。肩と肩とで揉み合ふやうにしながらさよめきつれて殺到して來た三四人づれの會社員風の人達に足出を遮られて、もどかしくそれをやり過すうちにも、しかし萬千子の眼は、その羽織無しの肩の嚴つた、正しくその人に違ひないうしろ姿を見失ひはしなかつた。

「石田さん！」
もう一度心の中に叫びながら、彼女はもうしろ姿を眼がけて走り寄つた。彼女の心臓は、胸腔から飛び出すかたばかり激しく躍つてゐた。石田さん！——それは石田辰夫に違ひなかつた。

萬千子は、夢中で追ひすがつた。そのうしろ姿はもう二三歩の前にあつた。
「石田さん！」

彼女は聲に出して呼ぼうとした。——が、もしや？ やゝ躊躇してゐるうち、その男はふと、こちらを振り返つた。
萬千子は、はじめられたやうにして立ちすくんだ。
矢張り、それは、瞬間の錯覺が描き出した一つの幻影でしかなかつた——。

或る結婚式

— 深みゆく黄昏を銀灰色にけむらせて、冷たい雨が蕭々と降りそよいでゐた。が、神田の一つ橋際の、N— 會館の大きな石造建築の窓といふ窓は、明るい灯影で輝いてゐた。車寄には幾臺も自動車が並び、更に後からくと、次々に乗りつけられる自動車からは、フロック・コートの紳士、裾模様の令夫人といった手合が、幾組となく現はれてはその入口に吸ひ込まれて行つた。

階段の上り口に陣取つた紋服姿の受付が、紅白のカーネーションの胸飾と一緒に、來賓達に手渡すプログラムの表紙には、「小野寺槇村兩家結婚披露——」と刷り出されてゐる。萬千子と啓三郎との、慇懃今夜が結婚披露なのであつた。

階段を登り切つた、宴會場の入口の處には、華やかな灯に照り映える金屏風を背景に、兩家の親達や媒妁人やを左右にして、今夜の花婿花嫁が立つてゐた。

花婿の啓三郎は、きちりと合つたフロック・コートの折目正しく、流石に育のよさを思はせて品好くそこに立つてゐたが、眼許のあたりをぼつと紅く上氣させて何かそはくと落着かない風だつた。小心な彼は暗れがましさにやゝ壓倒されたらしく、同時にまた、身うちには踊る喜を鎮めかねてゐるといふ風にも見えた。——が、啓三郎と並んだ萬千子の姿は、あくまで冷たくあくまで靜に、來賓達に引き合はされてつゝましく會釋を返す時の外は、まるでできざみ出されたやうに微動だもしなかつた。

來賓達は、皆眼を睜つた。睜つて、そして降いた。萬千子の花嫁姿は、まことに眩ゆいばかりに美しかつた。古代

紫地に源氏車と几帳とを染め出した本振袖に、帯は白地に牡丹唐草の錦糸唐織。女學生時代にスポーツできたへた身體の、とりわけ下半身の流れるやうなのびやかな線が、その盛裝を一しほ引き立たせた。生れてはじめて結つた高島田も、その豊頬ながらやゝ長目な顔立に思ひがけない調和を見せ、漆のやうな黒髪につやが、背の金屏風にくつきりと映つてゐた。しかし、彼女の顔色は、あまりに冷たく沈んでゐた。厚化粧の白粉もほの青むばかり、假面のやうな無表情な顔に、眸がちつと伏せられてゐた。それは來賓達や周囲の人達が推察したやうに、恥らひのために伏せた眸ではなかつた。

「噂には聞いてゐたが、なるほどすばらしく綺麗だな。」

控へ室の方では、給仕の運んで來たグラスで、咽喉をしめしながら、若い紳士たちがこんな風にさゝやき合つてゐた。

「いや、まつたく！ あゝいふ美しいのを見ると、どうも少し憂鬱になるな。」

「本當だ！ 僕もさつきから少し悲觀してゐるんだ。」

「僕は、少し憤慨したくなつた。どうも怪しからんぢやないか？ 人もあらうに——。」

「金だよ。みんな金の問題だ。——君はこの結婚の内情ッてやつを知つてゐるかね？」

「知らない。いづれ事情があつた事だとは思ふがね。」

「だが、細君にするにや少し美し過ぎるよ。あまり美しい細君を持つ事も考へものさ。あゝいふのはしまひには背負ひ切れなくなるよ。」

「初めッから、あれぢやア背負ひきれさうもないな。駿馬痴漢を乗せて走るといふ奴さ。」

「事實に即き過ぎると譬喩も慘酷になるね。はゝゝゝ。」

やがて、宴會が開かれた。來賓達は、そろりと食卓の用意の整つた廣間の方へ雪崩れ込んで行つた。

席が定まつた。
萬千子は、啓三郎と並び、媒妁人の國田男爵夫婦に左右から挟まれて席に着いた。小野寺家といへば財界に重なる
す富豪なので、今夜の來賓にも、知名の貴紳が多かつた。
シャンデリヤの光が、卓上の花束に降りそゞぎ、洋々たる樂の音が、光の波を廻つて湧き起つた。

二

「どうかなさいましたか？」
並んで坐つてゐる國田男爵夫人が、かう、そつとさゝやいた程、萬千子の様子は打ち沈んでゐた。打ち沈んでゐる
といふよりも、寧ろ彼女は放心してゐた。彼女は、自分が今花嫁としての晴の盛宴に臨んでゐるのだといふ氣などは
ちつともしなかつた。彼女は時々眼を上げて、宴席を見渡すやうにした。三百人にあまる來賓達は、儀禮的な微笑を
眼顔に浮べてさゞめきながら、しきりにフオークを動かしたり、グラスを舉げたりしてゐる。飾針が輝き、白襟が白
ひ、ところ／＼に若い令嬢の華美な振袖が色ある波と揺れて、匂いほれる卓上の花、ふりそゞぎシャンデリヤの光
——まことに眼もあやな一場の光景だつたが、萬千子にはそれが、自分とは全く何のかゝはりもない、遠い幻のや
うなものにしか見えなかつた。

萬千子は、その光景を、眺める——といふよりも、たゞぼんやりと見開いた空虚な眼に映してゐたが、ふと、向つ
て右の方の、窓際寄りの第一の側の中ほどの席に、つるりと綺麗に禿げあがつた老人と隣合つて坐つてゐる一人の青
年紳士を見つけると、彼女は思はずはつとした。濃い眉、高く通つた鼻梁、そしてがつしりとした頤の線——その
横顔は、あの人と——石田辰夫と、そつくりといひたいほどよく似てゐた。が、次の瞬間には、彼女はすぐにその思な
驚を取ねばならなかつた。すでに幾度も繰返したこの愚な驚を、しかも、場所もあらうに、こんなところでもう

一度繰返さうとは！

それにも拘らず、彼女は、その男が矢張あの人であり、あの人こそ素知らぬ顔をして今夜の來賓に交つてゐるのでは
ないかといふ荒唐的な空想——寧ろ奇怪な幻想にとらはれはじめた。戀人の結婚式の夜に、客の一人に化け込んで、
花嫁姿の戀人を盗み出す——活動寫眞で見たかしたそんな話が、彼女の幻想とごつちやになつた。(愚圖々々してち
や駄目です！この間に逃げるのです！)(大丈夫？)(大丈夫です。さあ！)裏口の暗い階段を相抱いて降りて行く。
裏門の際には用意の自動車が待たせてある——。

その時、急電のやうな拍手が起つた。彼女の幻想は消えた。何時の間にかデザート・コースに入り、媒妁人の國田男
爵が立ちあがつたのだつた。

結婚媒業者など、蔭口されてゐる國田男爵は、その半白の美髯を一寸ハンケチで擦るやうにしてから、如何にも物
慣れた、しかし十分に莊重な調子ではじめた。

(え、満場の紳士並に淑女諸君、今回、小野寺謙三氏の令嗣啓三郎君と、横村陽之助氏の令嬢萬千子さんの間に
良縁成り、こゝに本々結婚披露の宴を挙げましたところ——)

しんと水を打つたやうな静肅の中に、男爵の聲は朗々と響き渡つた——が、それは萬千子の耳にははひらなかつた。
萬千子はもうその荒唐な空想を追ふことはやめたが、今度は數々の思ひ出が、次から次へと彼女の心を捉へはじめた。

彼女は、場所を忘れ、時を忘れ、彼女自身の存在をさへ忘れて、その思ひ出の中へ溺れ込んで行つた——。
彼女の眼には、ある夏の日の情景が浮んだ。女学校の三年生の時だつたから、今からもう四年前の、燃え立つやう
な炎熱の午後だつた。夏休中であつたが、秋の競技會の練習のために、學校のグラウンドに集まつた二十人ばかりの
選手達——彼女もその中の一人だつた。運動服一枚の軽快な姿で、元氣な娘達は、湧きかへる生の喜そのものゝや
うに、跳び廻り、はね廻り、それ／＼の特技に熱中してゐた。ハードラアは燕のやうに躍つてゐた。槍はきら／＼と

輝きながら青空に弧を描いてゐた。——萬千子は、砂場の方で二三人の仲間と一緒に汗みどろになつて走幅跳の練習をしてゐた。

ふと、氣がついて見ると、砂場の傍に一人の青年がにこ／＼と笑ひながら立つてゐた。上着を脱いで襟衣一つになつて、廣い胸に腕を組んでゐた。萬千子は、何がなし赧くなつて、きまり悪くそこに立ちすくんでしまつた。

「さあ、もう少しやつて御覽なさい。」

青年は、黒い眼に人なつっこい笑を浮べていつた。いゝ顔だと萬千子は思つた。ギリシヤの彫刻みたいな姿だと萬千子は思つた。それが、初めて見た石田辰夫だつた。

三

その頃帝大の法科にゐた石田辰夫は、學校から聘せられて、彼女達のためのコーチャーとして、彼女達の前に——萬千子の前に現はれたのであつた。

が、彼は萬千子にとつてはいつまでも單なるコーチャーではあり得なかつた。彼女より一級下ではあつたが、彼女と非常に親しくしてゐた一人の友——辰夫がその友の兄であるといふ事が、二人を接近させる機縁を作つた。勿論それは極めて純潔な愛情であつた。一人の男性に對する一人の女性の愛といふよりも、むしろ兄に對する妹の思慕であつた。母に別れて繼母の手に育ち、家庭の情味に飢ゑてゐた萬千子は、彼の兄らしいたはりに、妹のやうに甘えてゐた。

その頃辰夫は妹の志津子と二人で、本郷の方に一人の老婢を傭つてくらしてゐた。萬千子は、よくその家を訪ねて行つた。

思ひ出は、そこに、ある春の夜の情景を描き出す。——その日の朝、萬千子は繼母に叱られて泣いた。學校が退

ても家に歸るのがいやだつた。萬千子は志津子に誘はれるまゝに、その日も本郷の家を訪ねて、夜になるまでたわいなく語り耽つてゐた。

「遅くなつてまた叱られやしませんか？」

辰夫は歸りの遅れるのを心配していつた。

「いゝえ、いゝのよ。叱られたつて構はないのよ。」

と萬千子はいつた。

「いつその事お家になんか歸ることは止めて、こゝで私達と一緒にくらす事にしたらどう？ ねえ、萬千子さん。」

志津子がそんな暢氣な事をいひ出した。

「馬鹿！ そんなわけに行くもんか？」

辰夫が笑つた。——靜かな春の夜だつた。吐息のやうな微風が、甘酸っぱい匂を運んで來た。

萬千子は、その甘酸っぱい沈丁花の匂をなつかしく思ひ浮べてゐた——と、その時、拍手が鳴り響き、萬千子は十七の女學生から、披露の宴の花嫁の現在にまで連れ戻されなければならなかつた。

もう一度拍手が起つた。來賓側から小野寺家と年來の親交のある、そして事業の上でもまた盟友といつた關係にある多額納税議員の今井氏が立つた。無髯の、角頸の今井氏は、その背低な、ぶんぐりと肥つた身體に精悍の氣を漲らしながら、

「え、私は小野寺御一家とは長年御庇懇に願つてをりますもので、今回小野寺氏の令息啓三郎君の——」

若々しい、率直な調子で初めた。

一寸の間花嫁の現在に連れ戻された萬千子の前から、やがてまたすべての光景が遠ざかつて行つた。現在の光景が遠い幻となつて消え去つたあと、彼女のうつろの眼には、再び思ひ出のシーンが描き出される。

十七の女學生にとつては、すべてのものがまだ半はお伽噺の世界に屬する。兄に對する妹の思慕——その眞白さが桃色になり眞紅になり、遂に激しい炎となつて燃え出したのは、それから一年経つたあくる年の春、志津子が流行性感冒に罹つて急死した前後の頃からだつた。——兄妹は孤兒だつた。その上頼になる親戚もない二人だつたので、その二人の妹の志津子の死は、はげしく辰夫を打ち碎いた。

「今までは、あなたを、もう一人の妹のやうに思つてゐた。だが、これからはあなたの外誰もゐない。」

さういつて辰夫は嘆息した。

「誰もゐない？——私にだつて、あなたの外には誰もゐないんだわ。」

そつとつぶやいて萬千子は顔を赧くした。その時分から、二人の心は分ち難いものとなつた。言葉に出して告白し合つたり、誓ひ合つたりした事はなかつたが、そんな告白や誓ひを必要としないほど、いつの間にか二人はしつかりと相結ばれてゐた。

二人は堅く信じ合つた。心の底深くまで愛し合つた。その愛に一つの宿命的なものをすら感じたのであつた。

ほんたうに、あの時分の自分はどんなに幸福だつたらう！

萬千子は溜息をついた。

四

テンプル・スピーチはそれからそれへと續けられて行つた。兩家の關係してゐる各方面の代表者といつたやうな人達が、次々と拍手に迎へられて立つた。萬千子の父の舊友の退職陸軍少將の某は、訓諭めいた謹嚴な調子で夫婦の道を説いた。

（——申すまでもなく、夫唱婦隨は家庭生活の鐵則であります。近頃、モダン・ガールとかいふものが發生致しまし

て、貞淑の美德漸く地を拂ひ、夫婦關係に於きましても、夫唱婦隨が逆になり、いはゞ婦唱夫隨とでも申すべき状態になつてをる——さういふ家庭もよく見かけるのであります。これは誠に慨嘆に堪へぬ次第でありまして——。）

本夕、こゝに華燭の典を擧ぐる新郎新婦は、必ずかくの如き悪風潮に染まず、夫は夫としての、妻は妻としての本分と責任とをつくして、良き模範を世に示されるであらうことを信ずる——退職陸軍少將がこんな風に述べたてゝ坐ると、今度は、老遊蕩兒として聞えてゐる某子爵が立ち、滑稽まじりの洒脱な話振りで、やゝ緊張に倦みはじめた一場の人々をどつと笑はせたりした。

が、萬千子はもう完全に一人の世界に切り離されてゐた。彼女の眼には思ひ出のシーンがそれからそれへと繰りひろげられる——。

街角の停留所で電車を降りる。それから左右を見廻すやうにして、その横町を小走りに曲つて行く。三階建の下宿屋——先づ、その三階のこちら向の窓を振仰ぐ。うすれかけた夕陽を、窓の障子が白々と反射してゐる。どうかすると窓が開いてゐて、そこから待ち構へてゐるやうなその人の顔が笑ひながら見おろす——。

「私、あそこをはひる時眼をつむつて飛び込むやうにするのよ。」

「どうして？」

その四疊半に向ひ合つて坐つた時、萬千子が喘ぐやうにしていふと、その人は、にこ／＼笑ひながら問ひ返す。志津子が死んでから、辰夫は下宿にかはつたのであつた。

「だつて、誰かに見られるやうな氣がするんですもの。」

「見られたつて構はないぢやありませんか？」

「それに女中さんが妙な顔をしてじろ／＼見るんですもの。」

「それで萬千子さんは、そんなに跣足で飛び込んで来るんですね？ 萬千子さんは案外臆病なんですね。」

「でも悪いと思ふわ。男の下宿に訪ねて来たりして、まるで不良少女みたいだわね。」

「男の下宿って、僕の處ちやありませんか？ 前にはあんなによく訪ねて来たのに——。」

「でも、前には志津子さんがいらしたからよかつたけれど——。」

「そんな事をいつて——どうも心細いな。」

「どうして？」

「あなたはどうも臆病過ぎるですよ。そんな事ぢや、これからの事が思ひやられるな。」

「いざとなれば私だつて勇氣を出してよ。私そんな意氣地なしぢやないわ。」

「もし、どうしてもお家の方で許してくれなかつたら——多分、僕は許してくれないだらうと思ふんだが、その時はどうしますか？」

「一生懸命に頼めば、父だつて許してくれない事はないと思ひますわ。」

「しかし、若し、どうしても許してくれない時は？」

辰夫は、熱ッぽい眼でちつと見つめるやうにしながら、

「その時は、逃げて来ますか？ 逃げて来るだけの勇氣がありますか？」

「え、あるわ。きつと逃げて来るわ。」

「きつとですね。」

「きつと。それをあなたはお信じになれないの？」

「信じないつてわけはないけど、何しろあなたはブルジョア育のお嬢様だからなあ！」

「そんな風にはれると萬千子は腹が立つた。」

「私、ブルジョア育だか何だか知らないけど、そんな意氣地なしぢやありませんわ。」

躍起となつてかういつたのであつた。

五

更に萬千子は思ひ出す。彼と連れ立つて、郊外の方に散歩に行つた日のことを。雑木林には小鳥が囀つてゐた。半黄ばんだ草は風に靡いてゐた。その高い草の中に肩を寄せ合せて、二人は日の暮れかゝるのも忘れて坐り續けた。

言葉に出して語るよりも、沈黙によつてより深められる戀のエクスタシイ。併し、その頃から彼女の心に影を落しはじめた一つの不安があつた。彼女は、彼の下宿で落ち合つた一人の女性——何かの交渉を彼と持つてゐるに違ひない一人の女性について、彼に問はずにはゐられなかつた。

「は、は！ あんな女何でもないですよ。あれは僕の友人との間にいざこざを起してゐるので、それで僕の處へもやつて来るのです。見たばかりでも分るでせう？ あんな卑しげな女！ あんな女の事を氣にするなんて、萬千子さんも随分神経質だな。」

辰夫は事もなげに笑ひ棄てたが、その女の毒ある花のやうな美しさと、自分などはまるで持ち合せてゐない一種の濃厚な媚態とは萬千子をひどく不安にした。

「そんな事仰有つても、何だか分らない。」

「どうも困るなあ！ そんなつまらない事をいひ出して——。」

辰夫は苦笑したが、萬千子の感情は妙にヒステリックに興奮し、顔を押しへて泣き出してしまつた。そして、さうした涙が彼女に羞恥の線を乗り越えさせた。一年にあまる長い戀の日に、かつて許さうとしなかつた唇をその時初めて男に與へたのであつた——。

彼女に更にその日の歸りの電車の中で、生徒監の小出先生に逢つた事を思ひ出す。何といふ不幸な偶然！ そのあくる日の學校で、その異性の同伴者についての小出先生の老嬢らしく意地の悪い質問でどんなに苦しめられた事であらう！

「いえ、隠しても駄目ですよ。さういふ噂は今までにもちよい／＼聞いておりましたが、よもやと思つておりましたのに、本當にあなたにも驚きます！」

その小出先生の細くふるふるやうな聲が思ひ出の中から響いて來た時、萬千子は、ふと、うつゝの耳に、その同じ聲を聞きつけた。はッとして萬千子は我に返つた。我に返つて氣がついて見ると、今夜の來賓の一人として主卓の一隅にゐた小出先生が、今立ちあがつて何かしやべり立てゝゐる最中であつた。

（——檜村萬千子様は私が、前後五年を通じて面倒を見てさしあげた教へ子でございます。萬千様が未だ髪をおさげにしてゐらした頃から五年の間、萬千様の、のびやかに美しくお育ちあそばすのを、私は毎日見まもつて居つたのでございます。肉體的にも、精神的にも、萬千子様ほど美しい方は、私が十幾年來手がけてまゐりました幾百人の娘達の中に、萬千様の外一人もなかつたといふことを、私は敢て斷言致したいのでございます。殊にその純潔さ、磨いた珠のやうな清らかさ——）

そこまで聽いて來た時、萬千子はその言葉が鋭い匕首の如く心臓を刺すのを感じた。まあ、あんな皮肉を——と思ひながら、そつとその方へ眼をやると、小出先生は、飽くまでも眞面目な勿體振つた調子で續けた。

（——私の多くの教へ子のうち、萬千子様こそ私の誇とする方でございます。理想の處女とは萬千様の如きを申すのでございませう？ 萬千様のやうな方をお迎へになる花嫁様は、本當に何といふ御幸福な方でございます。う！）

萬千子はもう聽くに堪へなかつた。その言葉を、如何にもといふ風に心の中に領きながら、深い喜に酔つてゐる

であらう隣席の啓三郎のことを思ふとたまらなかつた。結婚式の席上に、別れた戀人の姿を追ひ求めてゐる女——それがこの自分なのだ！ さう思ふと、もう一刻も席にあられぬ思ひがした。

小出先生のテーブル・スピーチが終り、場を揺るがして拍手が鳴り響いた時、萬千子は突然激しい眩暈を感じ、額を押さへて卓に面を伏せた。

「ど、どうしました？ 萬千子さん！」

啓三郎が、取り外したやうな聲でいつた。その聲があまり大き過ぎたので、やゝ驚きを合んだ人々の眼が一齊に、その花嫁花婿の方に注がれた。

運命の軌道

一

宴會が済むと、その場から直ぐに新婚旅行の途に上つた。時間の都合上、その第一夜は箱根の塔ノ澤の旅館で過ごされた。

東京驛から汽車に乗り、啓三郎と二人だけになつた時、萬千子はたうとう——と思つた。たうとうこれで自分の運命もきまつてしまつた——。

「どうかしましたか？ ひどく顔の色が悪いですね？」

啓三郎は、その有頂天の悦のなかでも、萬千子の様子を気にしてかう問ひかけた。

「え、少し頭痛が致しますの。」

事實、しん／＼と頭のしんが疼くやうな氣がした。

「それはいけませんね、きつと疲れたんでせう？」

啓三郎は寄り添つて、不安さうに萬千子の顔をのぞき込んだ。妻に對する夫のいたはりといふよりも寧ろ女王にかしづく奴隷の氣づかはしさで。

さういふ啓三郎である事が餘計に萬千子を苦しめた。自分の運命に對してそれがどんなに忌はしい存在であるにせよ、萬千子は、啓三郎その人には、愛も感じない代り、ちつとも憎を感じてはゐなかつた。少し頭が悪いらしい、體力も精神力も人並には少し足りぬらしい啓三郎ではあつたが、人柄は飽くまで素直で、濁や下品さは全く無かつた。そして一生懸命に自分を愛し、その一生懸命さの故にいくらか、ユーモラスに見える啓三郎に、萬千子は多少憐

れみを交へた好意をさへ感じてゐた。もし、啓三郎が、憎々しい掠奪者として彼女の前に現はれたのであつたなら、萬千子は憎む事によつてせめてもの悶を遣る事が出来たであらう。憎む事も争ふ事も出来ぬ啓三郎である事が、一層彼女を苦しめるのであつた。

小田原からの自動車は夜更の暗を衝いて走つた。雨はいつの間にかあがつてゐたが、潤りを帯びた山氣が身にしみて冷たかつた。——が、彼女の身體のわななきは、寒さのためではなかつた。

たうとう來るところまで來てしまつた。明日はもう自分は處女ではないだらう。

いつそ、この自動車がひつくりかへり、大怪我をするか死んでしまふかしたならば——。萬千子はそんな事も考へてみた。

だが、あくる朝、明方になつて少しとくとしただけの重い頭で覺めた時、萬千子は、これでもう一日延びたと思つた。彼女の新婚の第一夜は、彼女を處女のまゝにして事もなく明けた。

「ねえ、私、今夜ひどく頭痛が致しますの。」

「それはいけませんね。」

「明日になれば治ると思ひますわ。だから、ね——。」

啓三郎は素直に頷いたのであつた。

「もしかしたら、二三日こゝに滞在してゐてもいいです。新婚旅行にあまり歩き廻るのはよくないといふことですよ。殊に、女の身體にはよくないさうです。生理的に大きな變化がある——そのためもあつて、非常に疲れるんださうです。僕或る婦人雜誌で讀んだです。「新婚旅行についての注意五ヶ條」ツてのを——。」

啓三郎は、そして、いくらか顔を赧らめながらいつた。
「本當に、私ひどく疲れたやうですわ。」

「今夜はちつと、静かにおやすみなさい。」

「我儘いつて御免なさいね。——あなたは本當にいゝ方ね。」

萬千子は感謝の念をこめていつた。ひどく感じ易くなつてゐる萬千子には、それが涙ぐましいまでに嬉しかった。

「あなたのいふ事なら、僕何でもきくつもりです。」

啓三郎は眩さうに瞬きながらいつた。

「有難う！ 本當にあなたはいゝ方だわ。」

「どうしたら、僕あなたのために良い夫になれるかとそれを考へてゐるんです。それを考へてゐるんです。」

と啓三郎はにこくと笑ひながらいつた。この人は本當に心から自分を愛してゐてくれる。この人の愛に、潔くす

べてを抛つ氣には何故なれないのだ？ さういふ聲を萬千子は心の何處かに聞いた。にも拘らず、あくる朝處女な

らの自分を發見した時、彼女は

「もう一日！」

と心の中で叫んだ。もう一日！ さうだそこには、もう一つの「明日」が残されてゐたのであつた。

二

第一夜を箱根で過し、それから京都へ行き、奈良、大阪に遊んで、別府に湯浴して歸らうといふのが、その蜜月の旅のプログラムだつた。

「どうですか？ 頭痛は——？ 若し何なら二三日こゝに滞在してもいゝと思ひますが——。」

その朝、啓三郎は氣つかはしげにいつたが、

「いゝえ。もうそんなでもなくなりました。」

と萬千子は答へた。こんな氣持で、格別の話題もなくぼんやりと鼻を突き合せて過す一日を思ふと堪へ難かつた。萬千子は豫定通り、今日西行の汽車に乗る事に同意せざるを得なかつた。

十時五十八分に國府津を發つ一二等急行に乗り込むため十時少し前に二人は宿を出た。雨あがりのすがくしい山

映の朝を、自動車は小田原に向つて走つた。

「よく霽れましたね。」

啓三郎は、瑠璃色に晴れた晩秋の空を自動車の窓越しに仰ぎながらいつた。

「美しい日です！ 本當に美しい日です。」

「えゝ。」

と答へたが、萬千子の心は重かつた。

「萬千子さん、京都へ行つた事ありますか？」

「えゝ。一度——。」

「奈良は？」

「矢張一度——學校の修學旅行の時にまゐりました。」

「實は僕も、あつちの方はよく知らないんです。——今度はゆつくり見て歩きませう。」

日は美しく晴れてゐる。楽しい旅を前にして啓三郎はもう歡に酔ひきつてゐた。が、萬千子の心は、益々重く沈

むばかりであつた。

自動車はやがて小田原の停車場に着いた。

「少し早過ぎました。まだ二十分ございます。」

運轉手臺に乗つて來た宿の番頭が、詫るやうにいつた。番頭が運轉手と共に荷物を待合室のベンチの上に運んだり

するうち、二人は入口に近く立つてゐたが、啓三郎は買物をでも思ひついたのでか、
「一寸——」

といひ棄て、賣店の方へ歩いて行つた。

萬千子はそのまゝそこに立つてゐたが、誰の眼にもそれと知られる新婚者の華やかな姿に、うるさくまっはる周囲の視線を感じると、逃げるやうに待合室を出て、入口の横の窓の外の柱の蔭に身をそばめた。そして足許に眼を落して、ぼんやりとした放心状態になつてゐた。

「萬千子さん！」

さう呼ばれて萬千子は振り返つた。啓三郎だと思つて、やゝものうく振り返つたその眼の前に、眉の濃い、眼の鋭い、鼻梁の通つた、顎の線の強い顔が映つた。——石田辰夫の顔だつた。彼女は、はつとした。しかし、彼女はその驚を抑へてもう一度眼を睜つた。その惨酷な幻影が、いかに屢々彼女の眼を欺いたか？

「それは幻影でもなく瞬間の錯覚でもなかつた。」

「萬千子さん！」

と——もう一度呼びかけられた時、萬千子は、そこに、明るいつつた日光の中に、正しくその人に違ひない石田辰夫が、二年前に別れた戀人が、その淺黒い顔に微笑を含めて立つてゐるのを見た。

「まあ、あなたは——」

萬千子は、さういつたきり、啞のやうに唇をわななかした。彼女の頭には旋風のやうなものが渦巻いた。さまざまの感情が一度にわつと聲をあげた。得體の分らぬ激動が彼女をそこに打ち倒さうとした。彼女は辛うじて足を踏みしめて立つた。

「随分久振りでしたね。——あなたは結婚なすつたのですね。」

と、辰夫は正面に萬千子を見据ゑた眼で微笑しながらいつた。

「お目出度う。」

「——いゝえ——私——」

萬千子は一生懸命で辰夫の眼を見返しながら、辛うじてかういつた。

「旅行にお出掛けのやうですね？——こゝでお目にかゝれるなんて、本當に偶然です。」

辰夫は、微笑し續けながらいつた。

「あなたは？ あなたは——？」

萬千子は、大きく開いた眼に辰夫の視線を吸ひ込みながら、論語めく調子で喘いだ。

「こゝに友人があるの、今日訪ねて來たのです。僕も一度お目にかゝりたいと思つてゐたのですが——」

辰夫は早口にしかし平然としていつた。

三

その平然とした辰夫の様子が萬千子をくわつとさせた。二年の間抑へ包んでゐた恨が、怒が、悲が、一度に胸先につきかけて來た。彼女は、いきなり彼に武者振りついて、なじつて、責めて、揺り動かしてやりたかつた。足許に身體を投げつけて、思ひきり慟哭したかつた。おゝ、今日のこの日、この時を、いかに長い間、いかに激しい苦惱と焦燥とのうちに待つてゐたことか！

彼女はわななくと身をふるはせながら、わづかにその激情をさへて立つた。——熱い涙が臉をおしあげて、ふたつの眸が、波の底に松明のやうにゆれた。

「まさかと思つてゐたのですが、矢張りあなたでした。こんな處でお目にかゝるなんて本當に不思議です。」

辰夫は繰返した。

「あなたは、どうして、いらつしやるんですの？」

一語々々句切るやうに萬千子はいった。

「半年ばかり前——この春に外國から歸りました。それからずっと東京にゐたのです。」

「外國から？」

「ええ。」

「ぢや、外國へいらつしてたのでございますの？」

「さうです！ 外國へ——ロシアへ行つてゐたのです。」

と、辰夫は彼の持前の低い、しかし力のある聲で靜かにいつた。——しかし、彼も矢張、萬千子が最初さう思つたやうに「平然として」ゐるのではなかつた。彼もまた、いかに激しい感動と闘つてゐるかは、そのやゝわなゝきを含んだ言葉つきで知れた。

「ロシアへ？ どうしてロシアなんかへ、いらつしたんでございますの？」

「あなたには何にもお知らせしなかつたので、きつと變にお思ひになつたでせう？ あの時は實際、事情をお話する餘裕もなければ、又、そんな事でああなたに迷惑をかけちゃいけないと思つたのです。——是非一度、あの時の事情をお話したいと思つてゐたのですが——。」

「どういふ事情があつたのでございますの？」

「僕は、ある秘密結社の一員だつたのです。その秘密結社の内情が探知されて、僕の身にも危険が迫つて來たのです。愚圖々々してゐると逮捕されさうになつたものですから——。」

憚るやうに聲を落して、辰夫はしかし、はつきりと澄んだ調子でいつた。

「ぢや、ロシアへ逃げていらつしたのね？」

「さうです？ そして丁度一年半、あつちで暮してゐたのです。」

「まあ？ 私ちつとも知りませんでした。」

萬千子は、さういつて、改めて男の様子を見直すやうにした。二年前にくらべるとずつと瘦せて頬の骨が立つてゐた。長く伸ばされた髪が、もぢやゝと額に亂れかゝり、その広い顔が憂鬱に曇つてゐた。眉のあたりにも悲涼なかげが添うてゐた。二年間彼を撃つた風霜の激しさは、やゝ荒んだ皮膚の色にも見てとられた。

「急に、事情をいはずにお別れたので、あなたは誤解してゐるだらうと思つてゐた。誤解されるのは辛いと思ひました。」

辰夫は、萬千子の、矢張二年前とは見ちがへるほど、なよやかに蕩たけた姿を、ちつとその悲しげな眼で見やつた。

萬千子もちつとその眼を見返した。萬千子は、そこがどこであるか、どんな場合にゐる自分であるかを忘れてしまつた。啓三郎の存在も、遠く意識の外に消えてゐた。彼女は、たゞ、二年目にめぐりあつた、戀人と相對してゐる自分だけを、その激しい感情の動亂のうちに、そしてまだいくらかの夢見心地のまじつてゐる意識のうちに意識してゐるだけであつた。

賣店の方から戻つて來た啓三郎は、強度の近眼鏡の底から、はれぼつたい臉をばち／＼とせはしく瞬きながら、あたりを見廻すやうにした。だが萬千子の姿は見えなかつた。丁度その時乗りつけられた大型の自動車が、そして、その自動車から降り立つ三四人連の動が彼女の姿を隠してゐたので。

「どうしたのか知ら？」

啓三郎は不安さうに呟きながら、待合室の内の方へはひつて行つた。

「ぢやア、あなたは——？ あなたは——？」
萬千子は喘いだ。

「僕も苦しかつたのです！ だが、僕もやうやくその苦を征服しました。お目出度う！ 僕は心から、かうあなたにいふ事が出来るの喜びます。」

「それは、皮肉に仰有るのでございますか？」

「いゝえ。心から——。」

と、辰夫は言葉に力を籠めて、

「心から、僕はあなたの結婚にお目出度うを申し上げます。」

「私の結婚を、どうして御存じ？」

「蔭ながら、お噂を聞いてゐたのです。」

「ぢやア、半年も前から東京に歸つていらしたのね？」

「ええ。」

「どこにいらつしやるんですの？」

辰夫は、そんな事は答へる必要もなからうといふやうに口を噤んでゐた。

「教へて下さいませ。今東京のどこにいらつしやるのでございますか？」

「東五軒町の方です。」

「東五軒町の何番地？」

「——五十三番地。」

「東五軒町なら目と鼻の間なのに——そんなにすぐ近所にいらしたのに——。」

と、萬千子は、恨めしげに男の顔を見やりながら、

「私は待つてゐたのでございます！ あなたにお逢ひ出来る日を、長い間待つてゐたのでございます。」

「僕は、もう、僕の事なんか忘れておしまひになつたかと思つてゐたのです。——兎に角すべての事が、もう完全に過去になりました。僕は、たゞこれから先のあなたの幸福を祈る外ありません。」

「いゝえ！」

と、萬千子は首を振つた。いゝえ！ いゝえ！ と激しく心に叫び續けた。こゝで逢つたのはあまりに遅過ぎた！

しかし、まだとりかへしのつかぬほどに遅くはない。どうぞ、これから私を伴れて行つて下さい。あなたの行くところへなら、どこへでも、どこまででも私はついてまゐります！ 萬千子はさういひたかつた。そして、さういはうと

した。——が、その時であつた。啓三郎は、やうやくそこに萬千子を見つけ出した。

「萬千子さん！」

さう呼び掛けられて萬千子が驚いて振り返るより先に、辰夫はくるりと背を向けた。

「こんなところにゐたんですか？ 僕探したんですよ。」

啓三郎が歩み近づいて来た時は、辰夫はもう啓三郎の視野から消えてゐた。

「もう、改札を初めましたよ。さあ！」

啓三郎は萬千子の、手を取らんばかりにしたが、萬千子は、大きく見ひらいた眼で、見えなくなつた辰夫の後姿を

追ひながら、凝然として石のやうに突つ立つてゐた。

「どうしたんですか？ 萬千子さん！」

啓三郎は、萬千子の顔をのぞき込むやうにした。萬千子はよろめくやうな足どりで待合室の内へはひつた。魂の抜けた人形のやうに。宿の番頭がスウト・ケースなどを擔つて先に立つた。萬千子は啓三郎のあとから改札口をはひらうとする時、彼女のハンド・バッグが、その白い手からすべり落ちた。啓三郎は、慌てゝそれを拾ひあげた。萬千子も拾はうと身をかがめたが、その時、改札口の外五六歩のところに突つ立つて、ちつとこちらを見つめてゐる辰夫の眼が、萬千子の眼とぶつかった。

——その眼！ それは突き刺すやうな眼であつた。その一瞥が百年の印象を刻むであらうところの、強い感動を含んだ眼であつた。

「石田さん！」

彼女はかう呼びながら駆けもどりたい衝動を辛うじて抑へることが出来た。

ブラット・フォームへはひると、そこにはもう國府津行の汽車が來てゐた。

彼女は、その一等室への、踏み臺へ片足を踏み掛けたが、あとの片足がどうしても動かなかつた。

「さあ！」

と、啓三郎は、手をとつて萬千子を引き上げるやうにした。

五

「あの人、誰ですか？」

54 汽車に乗つて席が定まるのを待ち兼ねるやうにして啓三郎が訊いた。啓三郎の眼付にも、流石にある疑惑の表情が動いてゐた。

「一寸、知つた人でございますの。」

「知つた人？ ぢや、お友達——？」

「お友達のお兄様なのでございます。」

殆ど、絶え入るやうな言葉つきで萬千子が答へた。

「さうですか？ ぢや、僕も紹介して貰ふとよかつたですね。僕はこれから、あなたのお友達やあなたのこれまで親しくなすつた人達とは、誰によらず、あなた同様な交際をしたいと思つてゐますよ。」

さうする事も、僕のあなたに對する愛の表現の一つなのだから——といふ意味をこめて啓三郎はいつた。啓三郎の眼からは、もう疑いのいろは消えてゐた。たゞ、單純な好意だけがそこに示されてゐた。

萬千子の胸のわなゝきは未だ止まなかつた。たうとう逢へた！——だが、何といふ意地の悪い仕方、神様は私をあの人に逢はせて下さつたのだらう？

もう一日、もう一日、早かつたら——。

魂を榎木にかけられる思ひとは正にこれだつた。——逢ふ刹那までは逢ひたい思で一杯だつた。逢つて見るとなまじい逢つた事が悔いられるのだつた。

だが、それにも拘らず、一つの力強い感情が、心の底から湧きあがるのを彼女は感じた。それは、辰夫が決して自分を捨てたのではなかつたといふ事を知つた、その喜だつた。さうだ！ あの人が黙つて自分を去つたのは、自分を愛しなくなつたからではなかつたのだ。あの人には矢張自分を愛し續けてゐたのだ。そして今もまだ自分を愛してゐるのだ！

（萬千子！）

と、彼女は自分に呼びかけた。

（お前は捨てられたのぢやなかつた！ お前の自信をもう一度とり戻すがいい。お前は、今までお前が考へてゐたやうなそんななじめな失戀女ぢやアなかつたのだ。——萬千子よ。ゆるしておくれ。私はお前をあまりに責め過ぎた。あまりに性急に蔑すみ過ぎた。）

彼女はさう自分に向つていつた。そして、いとほしむやうに自分で自分を抱きしめた。

——しかし、今更それを知つたところで、それが何であらう？ 何もかも、もうあまりに遅過ぎた！

あまりに遅過ぎた！ と彼女は繰返した。が、その嘆息を打ち消すやうにもう一つの聲が叫んだ。いゝえ、まだ遅くはない！ 取返しつかぬほど遅くはない！

彼女の胸の中には、さまざまの感情と意志とが相せめいだ。

「どうしました？」

と、先刻から不安さうに萬千子の様子を打ちまもつてゐた啓三郎が聲を掛けた。

「矢張、頭痛がするんですか？ また顔色がひどく悪くなりましたね。」

「えゝ、少し——。」

萬千子はハンケチで額際を押へるやうにした。その純白の絹ハンケチに絡まれて、象牙細工のやうな美しい指がわなわたと、わなゝいた。その左手の無名指には、二つの指環がきらめいてゐた。金の蒲鉾型の結婚指環と重ねて、眞紅のガアネットの許婚指環——。その、貞操と眞實との表象だといはれる眞紅のガアネットが、血のやうな色に揺れてゐた。

「いけませんねえ。ぢや、どうです？ 少し横におなりなつたら？」

啓三郎は憂はしげに眉を寄せて、萬千子の顔をのぞき込むのであつた。

「いゝえ。それほどでもございませんの。」

萬千子は顔を見られるのが辛かつた。彼女は頭を振りながら顔をそむけた。

が、やがて汽車は國府津に着き、そこで神戸行に乗り換へなければならなかつた。

こゝから思ひきつて逃げてかへらう！

萬千子は、五分ばかりの待合せ時間のうちにも幾度かう思つたか知れなかつた。——が矢張思ひきつてさうするだけの勇氣はなかつた。

ジャンプ

一

急行列車は走り去った。明るい秋の日は、燦々として車窓に振りそよいだ。萬千子は、日除の蔭に青ざめた顔を把握えて、ちつと坐つてゐた。彼女の頭の中では、さまざまの想念が相撃ち相闘れてゐた。

啓三郎は、何かと話しかけたが、萬千子ははかしく應へもしなかつた。啓三郎は、それを萬千子の気分が悪いせりだと思つた。

山北、沼津、静岡を過ぎて、汽車は、西へくと走つて行つた。停車する毎に、一つの衝動が、彼女をクツシヨンから起ち上らせようとした。こゝで降りよう！そして、東京へ、あの人の處へ逃げて行かう！

あの辰夫の、ぢつと見つめた強い眸——それがどこまでもどこまでも彼女を追つかけて來た。だが、汽車は刻々に走つた。ごう／＼と車輪の音が鳴り出したので、氣がついて見ると、天龍川の鐵橋にかゝつてゐた。

間もなく、濱松に着いた。

「どうですか？ 矢張頭痛がするんですか？」

「え、でも、もうよろしいんですの。」

「横におんななさいよ。きつと、ひどく疲れてゐるんでせう？」

啓三郎は、かういつて、スウト・ケースの中から毛布を出してやつたりした。どんな忠實な給仕だつて、これほどに

親切ではないだらうと思はれる。その行き届いたいたはりも、萬千子にはたゞ煩さくわづらはしいだけだつた。

「どうぞ、もう——構はないで下さいませ。そしてあなた、おなかとお空きになつたんでせう？ 私、待つてをりますから食堂へ行つていらつしやいませ。」

「いゝえ、いゝです。僕もまだ腹が一杯なんです。」

啓三郎が、どんなにその新婚旅行の喜で一杯になつてゐたとはいへ、しかし、あまりに憂鬱な、そして取りつく端しもなくよそ／＼しい花嫁の様子は彼を當惑させた。彼はそつとその横顔を眺め、ひそかに溜息をついた。

「もう、三時過ぎましたわね。」

萬千子がきいた。

「え、三時十分です。」

腕時計に眼をやりながら啓三郎がいつた。

「この次は、どこでとまりますの？」

「豊橋、それから名古屋です。——京都へは八時に着きますから、丁度これで半分乗つて來たわけです。あと五時間

——もうすぐですよ。」

「あと五時間ね。」

萬千子は繰返した。そして、車窓のガラスに熱した額を押當て、午下がりの日ざしの下に移りゆく窓外の光景に眼をやつた。

豊橋を過ぎ、名古屋に近づいた頃に平遠な尾張の平野には、もう蒼茫たる暮色が漂ひ初めた。

ボーイが、晚餐の支度の出來たことを知らせて來た。

萬千子は、何も欲しくはなかつた。が、自分のおつきあひで、今朝から何も食はずにある啓三郎が氣の毒になつた。

で、連れ立って食堂車の方にはひつて行つた。

「これで五へん目ですよ。あなたと一緒に御飯を食べるのは——」

啓三郎はフオークを動かしながらいつた。

「昨晚披露會の時、あの時は何も咽喉には通らなかつた。それから今朝と、今と——その前にたしか二度でしたね。

一度は、あの時帝劇の食堂で。一度はあなたが僕とこへ来て下すつた時——。だが、これからは毎日かうしてあなたと一緒に食事をする事が出来るんですね。」

啓三郎は子供ツぽい喜を眼顔に現はし、機嫌をとるやうにいふのであつた。

「さうですわね。」

と、萬千子はいつたが、その時萬千子はふと最近に讀んだある脚本の會話を思ひ出した。

（一生涯、毎日々々工合の悪い男にお茶の給仕をすることを考へてごらん。毎朝の御飯の時——それから毎日の午後ですよ！ それでそこにその人がゐるんですよ。どうしてもその人が動かないんですよ。それを考へてごらん。エミリー——それを考へるのよ。）

萬千子！ それを考へるのよ——と、心のどこかでいふ聲がした。そして、そこにあの鋭い眼が、今朝の辰夫の鋭い眼付が、いさゝかは嘲の色をも交へた、突きさすやうな凝視が、ちつと自分に向けられてゐるのを感じた。

二

食堂車から出て来ると、啓三郎は、クツシヨンに身を投げかけるやうにして、ちつと眼を閉ぢた。——と思ふと、いつの間にかこくりくと居睡を初めた。啓三郎もひどく疲れてゐた。昨夜はよく眠れなかつた。今日は朝から氣をつかひつゞけた。満腹に誘はれて昨夜からの疲が一度に襲ひ寄せたのだつた。

「まあ！」

それを見ると、萬千子は思はず微笑した。一生懸命に自分を愛してゐる、どこか幼げなところのある男が、ひどくいぢらしいものに思はれて来た。いゝえ、矢張これが私の運命なんだわ！ この「工合の悪い男」——しかし、この人は心から自分を愛してゐてくれるのではないか？

だが、その黄昏の光と交り合つた電燈の灯影に浮んだ、白い、弱々しい、醜い腫れぼつたい見やうによつては何となくユウモラスにも見える顔を見てゐるうちに、何かそれが不思議な非人間的な存在に思はれて来た。意地の悪い運命の神様が、その道化じみた姿に化身して、自分を誑弄するために自分の前に現はれたのではないか？ そんな氣がして来た。

今のさつきの、いぢらしい氣持とは反對の激しい呪はしさがぐつと込みあげて来た。

いやだ！

彼女は、思はず斯う叫んだ。

彼女の眼の前には、月の出る前の暗い夜が、黒い流となつて流れてゐた。風がつめたく頬をうつつた。——彼女は、化粧室から出ると、ドアの外のデッキの上に立つて、ちつと、その黒い流を見つめてゐた。

思ひきつて——思ひきつて！ と彼女は心に繰返した。思ひきつて、この汽車から降りてしまはう！

汽車は岐阜を出て大垣に近く走りつゝあつた。大垣でも一寸停車する筈だつた。そしたら、思ひきつて降りてしまはう！

やがて、汽車は大垣驛の構内に停つた。

彼女の乗つた車室は、乗る者も降りる者も無かつた。彼女は、明るい灯にうそ寒く照らし出されたアスファルトを見つめながら、今だ！ と思つた。車室の中をのぞいて見ると、啓三郎は、相變らず居睡を續けてゐた。

「まあ、暢氣なものだわ。」

そんな場合にも拘らず、急に可笑しさがこみあげて来たが、次の刹那には、自分がこゝから逃げて歸つたら？とその結果として惹起される様々の事件が、ぼつと彼女の頭の中に浮び上つた。自分の突飛な行動が新聞種になつて騒がれる——そんな事は構はないとしても、この結婚が破談になり、そのために父が非常に苦境に落ちる！

犠牲——犠牲の覺悟でこゝまで来たのではないか？ そんな無茶の事がどうして出来る？

そこに、火水の相せめく幾分があつた。彼女は、片足を昇降臺にかけて、激しく身悶えをした。

汽笛が鳴つた。ごとり、ごとり、と汽車が動き出した。

あゝ、矢張り駄目だ！

彼女は溜息をついた。

意氣地無し、なぜ思ひきつて飛び降りないのか？ 溜息の下からかう強く叫ぶ聲がした。

汽車の動きが急になるにつれてアスファルトは白く流れた。そのアスファルトが、見る／＼無限の廣さに擴がつてゆくやうに思はれた。廣い／＼フィールド！そして、あの二年前のスポーツ・マンの血が、その錯覺に刺戟されて湧上つた。

と、同時に、彼女の耳には、あのコーチヤの聲が——石田辰夫の力強い聲が響いて来た。

「勇氣と決斷！ ジャンパーにはこれが一番必要です！」

次の瞬間彼女は、ジャンプのフォームをとつた。長い袖が、ひらりと空を切つて舞つた。

小田原からの二百幾マイルは、少し長過ぎたかも知れない準備疾走だつた。彼女は、たうとう思ひきつてその運命の軌道から飛び降りた。同時に彼女は、飛び越えた。家庭を、世間を、女性を捉へてゐる所のあらゆる因習を——。

あらゆるものを越えて、そこにたゞ一つなるもの——戀があつた。

戀と思想と

—

「は、は、は！」

と、田代庄作は、持前の唳れ聲で笑つた。

「ちやア、その昔の戀人ツてえのが、新婚旅行に出掛けたのに、偶然ぶつつかつたつてのですね。昔の戀人に、しかも新婚旅行に出掛けた奴にね。なるほど、そりやアあんまりお説へ向きに来來過ぎてみらア！ は、は、は！」

やゝ嘲笑のこもつた庄作の笑聲を、蒼ざめた額に浴びながら、石田辰夫は苦い杯を含んでゐた。——彼は、飲んでも飲んでも酔へなかつた。今朝、小田原の停車場で見た萬千子の姿が、彼の胸にたゞへた冷たい憂愁の水の面に、濃く影を落してゐた。

「なるほどね、さういふ事ならふさぎ込むのも無理はないが、だが、新婚旅行などいふからにやどうせブルジョア娘のことでせう。あんたもまだブルジョアの世界に未練が残つてゐるとみえるね。」

「そんな事はないよ。そんな事アないんだ——。」

辰夫は、濃い肩をぴりりと動かした。

「そんな事はない？ ちや、ブルジョアの世界に未練は残らないが、ブルジョア娘は戀しいといふのかね？」

「戀しいとか何とか、そんな氣持ちやアないんだ。何しろ二年前ロシアへ行く時に思ひ斷つた筈の女なんだ。」

辰夫は、それを自分自身に向つていひきかせるやうな調子でいつた。

「だから、もう疾づくに結婚したんだらうと思つて歸つて来たんだがね。」

「ところが、結婚しないで待つてみた——といふんですかい？　だが、新婚旅行に出かけたんなら、矢張り結婚はしたわけだね。」

庄作の言葉には、どこかの田舎訛が交つてゐた。そして、その物のいひ振りには、何となく皮肉な調子が籠つてゐた。鼠色の毛糸のジャケットに、焦茶の上着の、見るからに労働者らしい風體で、片手は卓子に突肘してゐたが、片手はだらりと垂れてゐた。肩幅は廣いが、骨々しく瘦せて、赤銅色をした顔の、片頬に火傷の痕があつた。

「結婚したんだ。——これで僕の感情も清算が出来たといふものさ。は、は！」
辰夫はものうく笑つた。

「清算か？　流行り言葉だね。ところで、清算はして見たが、帳尻がうまく合はないとでもいふんですか？　何にしても二年越たア氣の長え事だ。」

「だから、もう疾づくに帳消しにはしてあるんだ。」
「そんなら、どうして、そんなに意氣地なく滅入り込んでゐるんですかね？」

「なあに、ちよつと、センチメンタルな氣持になつたよけなんだ。」
「プロレタリアにセンチメンタルは禁物だ。どうも、そんなぢやア、石田さんも心細いな。何ていつてもあんたは元がブルジョアのお坊ちやんだからな。お里が知れるツてもんだ。」

「どうも酷く遣ツつけられるな。」
と辰夫は苦笑して、

「だが、さういはれりやア一言もないよ。つまり、一種の夢魔みたいなものだ。」
「何だね、ナイト・メアアてえのは？」

「おぼけだよ。もう振捨てた筈の世界から、時々亡靈がやつて來るのだ。正直の話、僕はロシアへ行つてゐるうちどう

でも、時々、あの亡靈に惱まされ續けたものだ。」

「亡靈ぢやない。生靈でせう？　ブルジョア娘の生靈にね、は、は！」
「生靈か？　まあ、そんなものかも知れないね。」

辰夫は、そんな事をいひながら、今朝小田原の停車場で逢つた時の、萬千子の言葉を思ひ出した。「わたし、待つてゐたのでございます！」涙に燃える眼付で、かういつた萬千子の言葉を。

そして、彼は、彼自身またあの突然の別離以來二年の間、時によつての消長はありながら、その感情の洗底に、絶えずその一つの戀が抱かれてゐた事を思ふのだつた。

「は、は！　又考へ込んでしまつたね。」
庄作はもう一度聲をあげて笑つた。

——新宿の停車場に近い小さなカツエの午後、宵にはちよつと間があるので、外に客もなかつた。三四人の女給仕は氣の抜けたやうな顔付でスタンドの前にかたまつてゐた。
安物の蓄音機が、ぎい／＼と雑音を交へながら、『からたちの花』を歌つてゐた。

二

「兎に角ね。そんなブルジョア娘の生靈なんかにと取ツつかれてゐるうちや、まだあんたも駄目だな。（婦人に對しても階級的立場を忘れるな。——さういふ一箇條がなかつたかね？　いくらロシア歸りの新知識でも、そこそこを一つ突ツ切つてくれなくちや、僕等、まだあんたを信用する氣にやなれないね。」

「だから、僕はその女の事なんかもう何とも思つちやゐないのだ。その女が結婚してくれたので、これでまあ宜かつた！　と思つてゐるのだ。」

「そんなら宜いがね。は、は！ それで美代子も安心といふものだ。われ／＼プロレタリアのためになど、大袈裟な事ア兎も角も、あの美代子のためにだけでも、是非そのブルジョア娘の方は思ひ断つてもらひたいね。」

「美代子——美代子さんのために？」

「さうですよ。あの美代子のためにだ。石田さん、美代子がどんなにあんたに參つてゐるか？ あんたにだつてそれは分るだらう？」

「庄作は、額を突き出すやうにしてにやりと笑つた。」

「馬鹿な事を——そんな事があるものか？」

「は、は！ 隠さなくたつていゝ。あんたの方だつて満更ぢやねえんだらう。何しろ、あいつは可愛い娘だからな。」

「——それにしても、石田さんもこれで随分浮氣者だな。」

「何をいふんだ！」

「いや、美代子この頃すつかりしよけてゐるんですよ。戀をしてゐる娘心ツてえものは、鶏の肉冠のやうに感じ易いものと見えるんだ。どうも石田さんの様子は變だ、石田さんは誰か外の人を思つてゐるらしい——ちゃんと、もうそれを感じちやつたんだね。それで先生すつかり考へ込んでちやつてるんだ。」

「庄作の、筋張つたやうな額には赤く酔が出てゐた。」

「つまらんことをいふのはよしてくれ！」

「つまらん事ぢやねえ。何も僕に遠慮する事アねえんだ。僕ア眞面目にいふんだがね、石田さん、美代子を女房にする氣はないかね？」

「何をいふんだ！」

「何をいふんだつて、あんたはあの娘を可愛いと思はないかね？」

「そりやア、美代子さんはいゝ娘だよ。」

「いゝ娘だ！ 顔立なり氣質なり一點非の打ちどころのねえ娘だ！ 僕ア從兄妹同士の仲だから子供の時から知つてゐる。あんないゝ娘は世界中にねえと僕は思つてゐる。僕が満足な身體でゐたらなら、決して他人にやる事ぢやアねえんだ。だが、これぢやア、この片腕ぢやア——」

と、庄作は、兩腕を左右にひろげた。右の方へは力強い大きな握り拳が唸をたてる勢ひで突き出された。が、左の方はふらりとぶら下つた儘だつた。彼は左の腕を持たなかつた。

「この片腕ぢやア女ア抱けねえ。は、は！ 工場へ行きやこれでも十分に一人前の仕事はする。資本家の面ア張り倒すんなら、片腕だつて事ア缺かねえ！ だが、女は駄目だ。片腕ぢやア女は抱けねえ。は、は、は！」

「庄作は大きい口を開き、泣くやうな顔をして笑つて見せて、」

「だから、僕アもうあの娘の事ア思ひ断つた。あの娘から（兄さん兄さん！）といつて懐いて貰へるだけで、それで堪能するつもりでゐるんだ。だがね、どうもあゝしてゐられると、眼がちらくらしていけねえ。何だかかう氣持が落ちてゐなくて困るんだ。矢張生靈だね、僕も矢張あの娘の生靈にとツつかれてゐるんだ。」

「うむ。」

「そこで僕アあんたに頼むんだ。あんたに生靈を退治して貰ひたいんだ。あんたがあの娘を女房にしてくれりやア——あの娘が結婚しちまつて呉れりやア、結婚しないまでもあんたのものになつちまつてくれりやア、僕もこれでほつとする譯だ。ね、あんた、今、そのブルジョア娘が新婚旅行に出かけたのを見て、ほつとしたといつたね。それが嘘でなけりや、こんな事をいふ僕の心持も分つてくれるでせう？」

「だがね、あの娘を愛してゐる男が他にあるんぢやないか？」

「それは猪之スの事でせう。僕アどんな事があらうと、猪之スなんか美代子をやりたくねえんだ。」

片腕の製鐵工は、燃えあがる怒の中に叫んだ。

三

「それにね。」
と、庄作は續けた。

「美イ公はもう猪之スの事なんか何とも思つちやあねえんだ。石田さんでものが出て来てから、あの娘の氣持はすっかり猪之スから離れてゐる。美イ公はすっかりあなたに參つてゐるんだよ。あなた、あの娘の様子が眼につかねえかね。可哀さうにあの娘はこの頃戀の苦勞ですつかりやつれてる！」

「馬鹿な！ そんな事はないよ。」

と、辰夫はいつたが、美代子が自分を愛してゐるといふ事は、辰夫もとうから感じてゐた。辰夫はプロンドの、小柄な娘の姿を——白い小猫のやうな、赤いチュウリップのやうな可憐な娘の姿を思ひ浮べた。——そして、自分もまたその娘にかなり強く心を牽かれてゐる事はつきりと、そこに感じるのであつた。

「石田さん、僕ア、あなたにいふがね、あなたがそのブルジョア娘の事を忘れきり、あの美イ公の愛をしつかりとあなたの胸に收めきつた時、あなたは本當にわれ／＼の味方になれるのだ。あなたが本當にプロレタリアの味方であるんなら、あなたが愛する女は、プロレタリアの娘でなくちやならないのだ。この意味でだね、あなたが美イ公を愛する事が出来るかどうかは、つまり、あなたが本當のプロレタリアの味方であるかどうかを證據立てる事になるんだ！
「いや、未練なんか残しちやあないのだ。」

辰夫は相手の言葉を掻きさらふやうにして焦立たしくいつた。

「ぢやア、僕はあなたにいふ。」

庄作は前に置かれてあつたウイスキーのグラスを取上げ、ぐつとひと息に乾して、

「あなたは、美代子を愛してやらなけりやならねえ！ (婦人に對しても階級的立場を忘れるな) だ！ あなたは美代子を愛する事によつて、本當の階級意識を擲む事が出来るのだ。あなたが若し、美代子の愛を受容れる事が出来ないやうならば——。」

「分つた！——僕だつて、あの娘に愛を感じてゐなかつたのぢやアないんだ。」

「は、は！ たうとう白狀したな。まあ、あなたもそいつをぐつとやるんだ。」

辰夫もグラスを取上げてひと息に乾した。

「それでよし！ ところでさうきまつたら、もう少し飲まうぢやアないか？ あなたの新しい戀に祝盃を擧げるのだ。」

庄作は、興奮した調子でいつた。

新しいグラスが運ばれた。幾度も／＼運ばれた。庄作の酔は次第に加はつた。庄作は、如何に美代子が辰夫を愛してゐるかを酔ひもつれる舌で繰返した。辰夫もだん／＼酔つて來た。

二人が、そこを出たのは、もうすつかり夜になつて、後から／＼と押掛けて來る客が、その卓を一杯にした頃であつた。

庄作は、市ヶ谷谷町の方の下宿にゐた。角管の停留所まで歩いて、そこで庄作と別れた辰夫は電車に乗つて飯田橋で降りた。

電車から降りると足許がふらく／＼した。酔つたな！ と思つた。

酔つた頭には、いろ／＼の映像やら想念やらが、ごちゃ／＼に入り亂れてゐた。今朝、小田原の停車場で逢つた萬

千子の姿が近々と、痛いまでにひたと心に迫つて來るかと思ふと遠くく退いて行つて、今朝のことだつたか、それとも二三年前の事だつたか分らないやうな氣がして來たりした。

そして、あの別れ際に、もう一度庄作が叫んだ聲が、がんくといふ耳鳴りの中に甦つて來るのであつた。

「美伊公を愛してやつてくれ！ なあ石田さん！ 美伊公は可愛い娘だぞ——」

辰夫は、よろめきながら、濠端の道をすこし行き、そこから左の細い横町に折れて、東五軒町の宿へと歩いて行つた。

或商會社の下級事務員をしてゐる老人と、印刷局へ出てゐる娘とが細々と暮してゐる家の二階に石田辰夫はその隠れ家を持つてゐた。その娘といふのが、美代子であつた。

辰夫が格子戸を開けると、

「あら、お歸り。」

と、美代子が障子の蔭から顔を出して迎へた。

四

辰夫は二階へ上ると、机の前に胡坐をかいて、ほつと火のやうな息をついた。やがて、どさりと仰向に倒れて、もう一度深い溜息を天井に吐きかけた。酔はいくらか醒めてゐた。咽喉がからくに濕いて來た。その同じやうな湯が、焦立が彼の心に感じられた。

そこへ美代子が上つて來た。

「どうして？ 石田さん。」

「うん。少し酔つた——」

「珍しいことね。お酒あがるなんて。」

「田代君と會つたんだ。——美伊ちゃん！ どうしたの？」

いつも快活な美代子が、妙に蒼ざめた顔をして、鬢の毛が亂れてゐた。泣いた後らしく、眼が濡れてゐた。辰夫は仰向に寝ながら額越しに美代子を見やつて斯う訊いたが、美代子は答へなかつた。

「え、どうしたの？」

辰夫は起きかへつて訊いた。

「喧嘩したのよ？」

「喧嘩した？ 誰と？」

「赤城さんよ。——あの人、あんたがお歸りになる少し前までゐたの。いろくの事をいつて私をいぢめるんですもの！ 私、口惜しいから——」

赤城といふのは、あの庄作がいつた猪之スの事だつた。美代子と同じく印刷局へ出てゐる若い職工の赤城猪之助の事だつた。

「赤城君がどんな事をいつたの？」

「どんな事つて——口でいふだけならいゝけど、亂暴なんだから、打つたり何かして——」

美代子は後半は獨語のやうにいつた。

「打つた？ どうして赤城君が、美伊ちゃんを打つたんです？」

「……………」

「え？ どうして赤城君に打たれたんです？」

「そりやア、私も悪いんだけど——」

美代子はさう眩くやうにいふと、眼を上げてちつと辰夫の顔を見上げた。その眼は羞恥を含んで惱ましげに燃えてゐた。

「は、は、あんまり仲が好過ぎて、それで喧嘩したんだね。」

「いゝえ、私、あんな人嫌い！」

「おや、いつの間、そんなに風向が變つたんだい？」

「石田さん！」

「何だえ？」

「何故、私が赤城さんに打たれたか、あなたには分らない？」

美代子は食ひ入るやうな眼で辰夫の顔を見つめた。

「分らないな。」

「分らないやうな風をなさるのね。いゝわ！ どうせ、私なんか——。」

さういひかけて、どうしたのか、美代子は突然袂を顔にあて、泣き出した。耳朶が火のやうに紅くなつてゐた。

「どうして泣くの？ え？」

辰夫は當惑しながらいつたが、さうして自分の前に泣く娘の心持ははつきりと分つた。さうだ！ この娘は自分を愛してゐるのだ——。

「ね、泣いてたんぢや駄目だ。泣かないで——そして、まあ話さうよ。僕もあなたに話したい事があるんだ。」

その時、風がどつと吹き寄せて來た。障子ががたびしと鳴つた。そして、その風に吹き消されでもしたやうに、五

燭の電氣がすうと消えた。
「分つたよ。ね、あなたの氣持は僕にだつて分つてゐるんだ。さあ、泣く事はお止め。」

闇が彼を勇氣付けた。辰夫は、額をおさへてゐる美代子の手をとつて引き寄せるやうにした。美代子の身體は、さへをなくした蔓草の様に、たわくと彼の膝の上に倒れかゝつた。

むしろ狂暴ともいひたい激情が彼を衝き動かした。彼は、力一杯美代子の、小さい身體をその兩手の間に抱き締めた。美代子の小さい身體と、そして、もう一つ外の何ものかを。

その美代子の小さい身體と一緒に抱きしめたもう一つ外の何ものかと、果して、プロレタリアの精神——マルクスの、レーニンの精神であつたか、それとも、矢張あのブルジョア娘の、萬千子の幻影でしかなかつたか、彼自身にもよくは分らなかつた。

五

あくる朝、美代子はいつも少し寢坊をして五時半頃に眼をさました。少し頭が重かつた。が、彼女の胸は、新潮の海のやうに鳴つてゐた。彼女はいつものやうに共用控の傍に金盥を

持ち出して顔を洗つたが、顔を洗つてしまふと、雨戸が閉まつてゐる二階の方を見上げて、眼許を凝らめて微笑した。それから、爽かに明けはなれた空を仰いで今日から新しい日が初まるのだと思つた。新しい朝！ 彼女は微笑を以て

その新しい朝に挨拶した。

出勤時刻は七時だつた。どうしてもその三十分前に家を出なければならぬ。そしてそれまでに朝飯を拵へたり、

自分のばかりでなく、自分より一時間くらゐ遅れて出て行く父の辨當の支度もしておかなければならぬ。それに、

鬢の一つも撫でつけないければならぬ——彼女の朝は随分忙しかつた。

今朝は、少し寢坊をした上に昨夜米を磨いでおくのを忘れたので、忙しさは一層だつた。漸く飯は炊けたが、あわ

て、水加減を間違へたとみえて、ひどい生煮えだつた。

と相思と戀

「あら！ どうしよう？」

「簽とお櫃とを前にして、美代子は當惑した。」

「でも仕方がないわ。いゝとこだけ石田さんにだけ食べていたよいて、お父さんには我慢してもらつて私とお父さんで悪いところを食べることにしよう。——いゝえ、それぢやいけないわ。いゝとこはお父様にあけて、石田さんと私と二人で——さうだわ！ 石田さん一度ぐらゐる生煮えの御飯を食べてくれないで、さうだわ！」

美代子はさう獨語ちて、何がなしに笑つて見た。が、次の瞬間には美代子はまるきり別の事を考へてゐた。

「ただ、本當か知ら？ 本當に石田さんは私を愛してゐて下さるのか知ら？ ——ずつと前から、もうこゝへ来て直ぐとから私を愛してゐたんだとあの人はいつてたけれど——」

七輪の上の味噌汁の、煮えてこぼれた音に驚かされるまで、美代子はぼんやりと考へ込んでゐた。

やがて、美代子は一人だけで食事を済ますと手早く身支度をした。紡績の紺を着て、花模様のあるメリンスの帯を締めて、辨當箱と門鑑をつゝんだ風呂敷を抱へて——そして、寝てゐる父にちよつと聲をかけてから、美代子が入口の土間に降り立たうとした時であつた。

「御免下さい。」

張りのある、しかし忍びやかな聲がした。

美代子は驚いて見やつた。はつとその眼を擗つやうにして、華やかな人の姿が格子戸越しにちらつてゐた。

「……………」

美代子は眼を睜つた。

「あの、こちらに石田さんて方ゐらつしやいませうか？」

「石田さん？」

「は。石田辰夫さんて方、ゐらつしやいませうか？」

美しい訪問者の、澄んだ鋭い眸がちつと見据ゑるやうにした。美代子は思はずたじくとしたが、本能的な敵意が直ぐにそれを切返した。瞬間、四つの眼がはつしと空間に相擗つた。

「あなた、どなたでございませうか？」

「一生懸命にとり澄しながら、美代子はいつた。」

「ゐらつしやるなら、ちよつとお目にかゝりたいのでございます。ゐらつしやいませうか？」

美代子は餘ッ程、ゐないといつてやらうかと思つた。美代子は、それが決して普通の訪問者でないことを本能的に直覺した。

「どなたでゐらつしやいませうか？」

「槇村と仰有つて下さいませ！」

「あの石田さんはまだやすんでゐらつしやいませうけれど——」

「本當に、こんなに早くからお訪ねしてまことに失禮なんですけど、是非、至急お目にかゝりたくて上つたと申し上げて下さいませ。」

美代子はなほちよつとの間、女の顔を見つめてゐたが、

「どうぞ、あの——」

「さう繰返していはれると二階の方へ上つて行つた。」

六

「石田さん！」

美代子は二階へ上ると、辰夫の枕許につき膝をして、辰夫を呼び起した。辰夫は直ぐに眼を覺ました。

「お起きなさいな。お客様よ。」

「誰か来たの？」

「え、お客様よ。」

「誰？」

辰夫は問ひ返しながら起きあがつた。雨戸の隙から朝の光がさし込んでゐた。その薄明の中に、美代子の顔が仄白く浮んでゐた。眸が不安さうにふるへてゐた。——辰夫は、その早朝の訪問者を、高等課の刑事か何かではないかと思つた。

「どんな人？ ゐるといつたの？」

重ねて問ひ返した。

「返してもいゝの？」

「名刺か何か持つて来なかつた？」

「いゝえ、女の人よ。綺麗な女の人よ。」

「女の人？」

「お會ひになるの？」

「何て人です？」

「お會ひになつたら分るでしょ。」

美代子は子供ツぼくすねるやうにして、

「お會ひになるんならお起きなさいな。私、戸を開けますから——。」

「兎に角、ぢやア會つて見よう！」

辰夫は獨語のやうにいつて起きあがつた時、

「石田さん！」

と美代子は低く叫びながら、辰夫の肩に両手をかけて飛びつくやうにした。驚くべき敏捷で——そして、噛みつくやうな荒々しい接吻だつた。

その早朝の思ひがけない訪問者が、辰夫の部屋へ通されたのは、それから二三分の後であつた。

「やあ、萬千子さんでしたか？」

辰夫は眼を睜つた。極度の驚が彼を壓倒した。彼は暫くの間その眼を信じる事が出来なかつた。

「びっくりなすつて？」

萬千子は微笑んだ。いや、微笑に似た表情をその凄艶に蒼ざめた頬のあたりに浮べた。辰夫の顔を見ると、張りつめてゐた氣持が急に緩み、わつとそこに泣き伏したいのを、萬千子は僅に自ら支へたのであつた。

「どう——どうなすつたんですか？」

辰夫の口から漏れた最初の言葉はこれだつた。

辰夫は、容易にその狼狽から立ち直ることが出来なかつた。

「私、逃げて歸つたんでございますの？」

「逃げて？」

「え。」

「でも、旅行にお出かけになつたんぢやないんですか？」

「旅行の途中から、逃げてまゐりましたの。」

萬千子は、まともに辰夫の顔を見た。——そこには、萬千子の期待したやうな感激的な何ものも示されてゐなかつた。たゞ、醜い狼狽の色だけが落着き無く動いてゐた。

「私、思ひきつて逃げて来たんでございますの。何もかも棄て——私、あなたのところへ逃げて来たのでございませぬの。」

「本當に、ぢや、あなたは逃げて来たんですか？　だが、そんな無茶なことを——」
辰夫は喘ぐやうにいつた。

「無茶な事かも知れませんが、私はさうするより外なかつたんでございます。私、あなたとお別れしてから二年の間、毎日、あなたとお目にかゝれる日を待つてゐたのでございます。私——」

いひかけて萬千子は言葉をとぎらせた。いひたい事が、後からくと押し寄せて来て、しかもそれが思ふやうに言葉にならないのであつた。口許が徒らにわななき、眼には一杯涙がたまつて来た。

その時、階段の上り口の襖の蔭で、美代子がわななくとふるへてゐた。眼を空に据ゑ、一語をもきゝもらずまいと聴耳を立てながら——。

部屋の中の會話はしばらく杜絶えた。

七

「そんなにまで、僕の事を思つてゐて下さつたんですか？　ですが——」
と、辰夫は、迫り輝く萬千子の眼を、おどくどくと見返しながらいつた。

「ですが、あなたは結婚なすつたんぢやありませんか？」
「え、結婚は致しました。でもまだ式を挙げたといふだけの事でございます。私、本當に思ひきつて、何もかも打ち棄て、逃げて来たのでございます。——私、あなたが黙つて行つておしまひになつたので、そして、待つても待つても歸つて来て下さらないので、もう捨てられてしまつたのだと思ひました。それで結婚する氣になつたのでございます。でも、さうではなかつた——さうではなかつたのだとあなたは仰有いましたわね？」

「え、さうではなかつたのです。」
辰夫は、腕を組み眼を閉ぢていつた。

「さうでなかつたのでしたら——石田さん！」
と、萬千子は揺り動かすやうな調子でいつた。

「私、二年前のお約束を思ひ出してはいけないのでございませうか？」
だが、辰夫は眼を閉ぢたまゝ、苦しげに喘ぐばかりであつた。

萬千子はさうした辰夫の様子を見ると、激しい、漸層的に加はつてゆく焦立と、次第に暗く沈んでゆく絶望とをちやんぼんに感じた。お、これがあの入だつたのか？　この煮えきらなさは！　この分別臭さは！　こんな人を見るために、自分は斯うして、こゝへやつて来たのか？

裏切られた！　と萬千子は思つた。怒りと悲とにふるへながら、彼女はぢつと唇を噛みしめた。

「ですが、萬千子さん、あなたはもう結婚なすつたのです。——それほどに思つて下さるあなたのお心持に對しては、僕は何といつて感謝していか分らないのです。」

感謝！　何といふ空虚な、よそくしい言葉だ！
そして、何といふ力のない物のいひ方だ！　辰夫は、まるで、斷末魔の息の下からでもいふやうに、一語一語、苦しげにいふのであつた。

「ですが、あなたの幸福のために僕はいふのですよ。さうです、あなたの幸福のためにです。あなたは矢張りお歸

と想思と戀

りになつた方がいゝと思ふのです。」

「私の幸福のためにと仰有るのでございませうか？」

「さうです。僕は、だん／＼考へが變つて來たのです。そして僕は世界一般の常識からいへば、謀叛人と思はれてゐる人間です。いつどうなるか分らない人間です。僕の進まうとする路はあまりに峻し過ぎるのです。」

「どんな峻しい道だらうと、私、きつとついて行けると思ひます！ ついて行けないと仰有るの？」

「僕は、あなたを苦しめるに忍びないのです。あなたはそんな苦には堪へられない——いや、そんな苦には相應しくない人なのです。」

「どうしてそんな事を仰有るんですの、私、愛する者のために殉ずるだけの勇氣はいつでも持つてゐるつもりでございます。」

「問題は愛ぢやアない——。萬千子さん、僕は正直にいひます、僕とあなたとは矢張り同じ世界に棲める人間ぢやないのです。」

「私がブルジョア娘だからと仰有るのでございませう？」

「……………」

「ぢやア、矢張り私はあなたに捨てられたんでしたのね。——分りましたわ！」

萬千子は涙のたまつた眼を伏せて、強く唇を噛みしめた。

「いゝえ、さうぢやない、さうぢやアないのです。僕はあなたを愛してゐる。それだからいふのです。」

「ぢやア、何故、どこまでも一緒にいて來いと仰有つては下さらないの？」

「まるで火水の中にあるやうな僕の生活なのです。今かうしてゐても明日はどうなるか分らないやうな——。」

辰夫は再び眼を閉ぢた。そして女の情熱に捲き込まれまいと、辛うじて自ら支へた。と、その時入口の襖がきしみながら開いて茶盆を捧げた美代子のはひつて來た。

八

美代子は、二人の前に茶碗を置いた。出来るだけ淑やかであらうとする努力が、彼女の動作をひどくぎこちないものにした。一つを先づ萬千子の前に、それからもう一つの茶碗を辰夫の前に置かうとした時、手がふるへて、茶碗がころげて、赭茶けた疊の上に茶が流れた。

「あ——」

と、美代子は小さく叫んで、あわて、袂の端を掴んでそれをふいたが、その時彼女の手の甲に、ぽたりと一滴の涙が落ちた。拭いてしまつて顔をあげた彼女の顔には、涙がぼろ／＼ところび落ちてゐた。そして、上目づかひに辰夫を見やつたその二つの眼は、らん／＼と涙の底から燃えてゐた。——次の瞬間には、その眼がちつと萬千子の顔を視つめた。と思ふと、美代子はすつと立ち、くるりと背を向けて逃げるやうに部屋を出た。轉び落ちたかと思はれるやうな、しどろもどろの足音が階段から聞えて來た。

「あれ、どなた？」

「階下の娘です。」

さう答へた辰夫の顔はひどく混雜してゐた。

——最初、この家の格子戸の前に立つて、その何か様子のあるらしい娘の、敵意のあらはな眼で迎へられた時、すでに臆げに感じられてゐたことが、はつきりと萬千子の胸に來た。

——矢張り、さうだつたのか？

萬千子は、眼の前に、眞黒な淵が大きく口を開いたのを見た。
 「萬千子さん！ あなたは矢張り、お歸りになつた方がいゝのです！ あなたの幸福のために——。」
 と、辰夫は汗ばんだ顔を手でこすり上げるやうにし、鉛を吐くやうにしていた。
 「もう——もう、何もかも過ぎ去つた事です！」
 萬千子は、無言のまま、辰夫の顔を打ちまもつた。いひたい事は一杯ありながら、一言も言葉にはならなかつた。
 「ね、お歸りになつた方がいゝのです。」
 「分りました！」

と、萬千子は血のにじむほど唇を噛んだ。そしていつた。
 「矢張り——遅過ぎたのですわね。」

「——さうです。——もう遅いのです。」

辰夫は、面を伏せた。

萬千子は、なほしばらく黙つてそこに坐つてゐたが、

「ぢやア、私、失禮致します。」

さういつて立ちあがつた。立ちあがつた拍子に、ぐら／＼と激しい眩暈がした。眼先が暗くなつてよろ／＼とよろめいた。辰夫は思はず寄り添つて、肩に手をかけるやうにした。

「どうなすつたのです？」

「どうぞ——どうぞお構ひなく。」

萬千子は立ち直り、辰夫の手を振り拂つた。

「萬千子さん！ あなたのために——あなたの幸福のためにですよ。どうぞ、すぐにあちらへ戻つて下さい。それが

本當です。」

「どれが本當だか分りません。でも、私の事は私の考へで致します。どうぞ御心配なく。」
 萬千子の言葉は水のやうに冷やかだつた。

そして、一足づゝ踏みしめるやうに階段を降りると、そこに立つてゐる美代子にも一瞥を與へて、萬千子は格子戸を開けて出て行つた。

辰夫は、その格子戸の外に消えて行く後姿をぢつと見送つてゐたが、

「萬千子さん。」

と思はず呼びかけようとした。行かしてはいけないと、心の底で叫ぶ聲がしたのである。が、その時、激しい調子で美代子が呼んだ。

「石田さん！」

振り返つた辰夫の眼に、涙にゆれる一雙の眸が映つた。美代子はその眼で辰夫を見上げながら、両手を辰夫の胸にかけ、一生懸命により纏つた。

「は、は、は！」

と、辰夫は空虚な笑聲を立てた。

「歸つた！ 歸つてしまつた！」

「石田さん、あの人——。」

「なあに心配する事はないんだ。」

と、辰夫は、美代子の言葉を奪ふやうにして、美代子に向つてよりも、自分に向つていつた。
 「一時の氣紛れなんだ。だから、きつと戻つて行くだらう。今のうちに戻りさへすりや、何事もなく済むんだ。さう

してその方がいふんだ。は、は！ 美代子さんも何もそんなに心配する事アないんだ。」
 辰夫は美代子を抱き寄せていつた。
 「は、は！ 心配したんだね。馬鹿だね、美イちゃんも——。」
 だが、辰夫の言葉は、囁言じみて力がなかつた。

新しい「明日」

萬千子はよろめくやうに歩いた。眼先が眞暗だつた。——氣がついて見ると、頬に涙が流れてゐた。朝の風がつめたく涙の上を吹いてゐた。
 (泣いてゐるの？ 馬鹿な女！)
 萬千子は自ら嘲つた。
 自動車が、走つて來た。萬千子はその前に身を投げ出した。衝動を辛うじて抑へた。彼女はこのあまりにみじめな自分を、こなくに打ち碎いてしまひたかつた。
 彼女は、昨日からの事をきれぬに思ひ浮べた。何もかもが悪夢だつた。かうしてよろめきながら濠端の道を歩いてゐる今の自分も悪夢の中のものとしか思はれなかつた。
 彼女は立ちどまつた。そして街路樹に身をそばめるやうにして、滌青色の濠の水をぼんやりと眺めた。啓三郎の顔がそこに浮んだ。
 もう一度あの人の處へ戻つて行く？ そんな——今更そんな馬鹿なこと！
 しばらくの間彼女はさうしてちつと佇つてゐた。
 彼女は、その深い絶望の底から、徐々に盛り上つて來る或る力を感じた。それは、彼女の若い肉體と精神とがもつ反撥力だつた。同時に、勝氣な彼女の性格からの一つの意地でもあつた。
 「あの人は、私を、あんな結婚をでもするより外生きる事の出來ない意氣地無しブルジョア娘だと思つてゐるんだ

わ！——私は、ブルジョア娘かも知れない。でも、私だつて立派に生きて見せるわ。立派に——私一人の力で生きて見せるわ！

彼女はかう心の中でいつた。

「さうだ！ 私一人で生きて行く！」

さうきつぱりと自分にいつて見せて、萬千子は歩き出した。

萬千子は、そこへ通りかゝつた自動車を呼び止めて、お茶ノ水までと命じた。さしあたり、あの結城柳子の處へでも行くより外なかつた。自動車はすぐに、柳子のゐるアパートメントの前に停められた。

「まあ、まだ寝てゐたの？ お寢坊ねえ。」

萬千子は、寢衣のまゝ迎へた柳子の顔を見ると、いきなり斯うあびせかけた。

「あら！ 萬千子さん！」

柳子は、未だ睡れぼつたい寝起きの眼を一杯に睜らいて、呑み込まうともするやうな萬千子の顔を見ながら、

「どうなすつたの？ あんた！」

「まあ、そんな眼をして見ないで頂戴よ。」

「だつて、あんた！」

柳子は、萬千子がつい一昨日結婚したばかりである事を知つてゐる。その萬千子がかうして早朝——それに、蒼ざめて興奮して、見るからにたゞならぬ様子であつた。

萬千子は、手短に途中から逃げ歸つた事を話した。但し、小田原で辰夫に逢つた事や今朝辰夫を訪ねた事やはいはなかつた。

「まあ、本當？ 本當にぢやア、逃げて來たの？ そんな事いつて擔ぐんぢやない？」

柳子は、容易に信じられぬといふ面持をした。

「ほ、ほ！ 本當よ。びつくりしたでせう？」

「本當ね。」

と、それが本當だと分ると、柳子は、椅子から躍りあがるやうにして、

「まあ、素敵！」

と手を拍つた。が、すぐに何やら濟まないといふ顔付で、まじく〜と萬千子の顔を眺めながら、

「だけど、萬千子さんも随分思ひきつた事をしたもんだわねえ。」

「ほ、ほ！ 流石の柳子さんも驚いた？」

「いゝえ、驚きやしないわ。さうするのが當り前だわ。」

「だけどね、私、當分どうしていゝか分らないのよ。それに見つけ出されて、つれ戻されたりしちや大變だから——ねえ、あんた、當分のうち、あんたの處へ私を置いてくれない？」

「よし！ よし！」

と、柳子は男のやうにいつた。

「どこまでもあんたをかくまつて上げますよ。」

二

「斯うしてゐても、何時捕まへに來られるか知れないんだから——。」

「大丈夫よ。私、どこまでもかくまつて上げてよ。」

かくまつて——といふ時代な言葉にわけもなく喜ばされながら柳子は繰返した。

「いづれ大騒が初まるわ。けれど、私さへしつかりしてりや、どうにか問題は片付くでせう？ 私、これから、生れ變つたつもりで新しい生活にはひらうと思ふの。」

「疾くに、その覺悟をする筈だつたのよ。」

と、柳子は笑つて、

「家のために犠牲になるなんて、そんな馬鹿な事ツてないわ。どんな場合でも自分ツてものを失くしちや駄目だわ。」

「本當に、私、今まで、しつかりと自分ツてものを、擱んでゐなかつたのね。」

「さうよ。だから、そんな妙な犠牲的な氣持になんかかつたのよ。」

「いゝえ。私のいふのは、さういふ意味ぢやないのよ。」

と、萬千子は、相手の應答と自分のいひたい事との矛盾をもどかしがらひながらいひ續けた。

「私のいふのはね、今まであまり他に頼り過ぎてゐたといふ事なの。考へて見ると、喜も、悲も、望も生き甲斐も、みんな自分自身のものぢやアなかつた！ 自分自身のものぢやアなくつて他のもの——つまり他の心で他の力で生きて來たといふ氣がするの。」

「さう——さうよ。他の力で——男性の力でだわ。」

と、柳子はうなづいて、

「それが今までの女性の生き方だつたのよ。女性は、女性自身の力といふものを持たなかつたのよ。だから、女の幸福は男性に愛されること、そして男性の力でかばつて貰ふことの外になかつたんだわ。」

「私も矢張りさうだつたのね。」

「やつと、それに氣がついて？」

「氣がついたわ！」

萬千子は淋しく笑つて、

「私もう誰も待たないで生きて行けるんだわ！」

「待たないで？」

「えゝ。」

「あの人の事をいつてゐるのね。」

萬千子は黙つてうなづいた。

萬千子は、明日は？ 明日は？ と二年の間待つた男の事を——たつた今、絶望の嘆息のうちに「左様なら」を告げて來た男の事を、そこに思ひ返さざるを得なかつた。あの男は今や失はれた。そして、「明日」も、もう失はれた。

しかし、失はれた「明日」の代りに、新しい「明日」が彼女の心に生れて來た事を、彼女は感じた。

新しい「明日」！ 何人をも待つことのない「明日」！ 絶対に自由な一人に生くべき「明日」！

「ぢやア、あの石田さんのこと、もすつかり思ひ斷つてしまつたのね？」

柳子は念を押すやうにいつた。

「えゝ。思ひ斷つたわ！ 考へて見ると、馬鹿々々しい夢だつたわ！」

萬千子はもう一度淋しく笑つたが、その眼は流石に涙ぐんでゐた。

「馬鹿々々しい夢でないまでも、戀愛なんて、それに全部を賭けるほどのものぢやアないと私思ふわ。戀をするのばかりが女の仕事ぢやアないんだもの。女性といへば、屹度、戀をして泣くのを商賣にしてゐる者のやうに思ふのは、間違ひだわ。」

「さうね。本當にさうだわ！」

と、萬千子は強くなづいたが、急にまた、ひどく眩暈がして來た。萬千子は頬に手をあて、のめるやうにな

だれた。

「あら！ どうかやすつて？」

「疲れたのよ。何しろ、昨夜から——昨日の晩からちつとも眠らないものだから——」

實際、彼女の身體は、その身心の激動のためにすっかり疲労しきつてゐた。

「その筈だわ。ぢやア、兎に角ゆつくりお休みなさいな。」

柳子は、そのままになつてゐる自分のベッドへ、萬千子を扶け入れるやうにした。

三

二間續きの次の部屋の、緑色のカーテンを引いたベッドの上に萬千子はぐつたりと身を横たへた。

彼女は疲れきつてゐた。不眠と焦慮と、長い汽車と、そしてよくこらへて來たと思はれる程の心身の激動と——彼女

は、もうくたくさに疲れつてゐた。

何よりも先づ少しばかりの眠が欲しかつた。

「ぐつと一と眠りなさいな。安心してね。」

さういふ柳子の言葉を聞いて、萬千子はちつと眼を閉じたが、そんなにも疲れてゐながら、眠らうとするうちつと

も眠れなかつた。臉の裏には様々の幻影がちらつき、しん／＼と痛む頭の中に様々の想念が苦しく亂れた。

——だが、何といふ呆氣ない事であつたらう？

あんな思をして——そして、こんな結果にならうとは？ それもたつた二三分の會見で——本當に何といふ呆氣な

さだ！

未だいひたい事があつた。訊きたい事もあつた。所詮路傍の人となるべき運命にしろ、別れるなら別れるでもつと

話したい事があつた。

もう一度！ と萬千子は思つた。もう一度訪ねて行つて、もう一度會つて——。

が、その時彼女の眼には、あの娘の涙の底から燃える眼が、激しい敵意を含んだ眼が浮んだ。この人は私のもので

す！ と、その眼がはつきりかういつてゐたではないか？

萬千子は、二年前辰夫が理由を語らずに自分から去つた時、それを彼が他の女に愛を移したためだと思つた。二三

度見た事のある、毒の花のやうな美しい女——その女が辰夫の愛を奪つたのだと思つた。そして、長い間そのために

苦しんでゐた。が、さうでない事が分つた。辰夫が自分を去つたのは、他の餘儀ない事情からだつたのだ。辰夫は矢

張自分を愛してゐたのだ！——お、しかし、それも矢張思違ひだつた。あの人は矢張他の女を愛してゐたのだ！

さう考へて來た時、萬千子は慘酷な運命の翻弄を感じずにはゐられなかつた。なまじいあの人に逢はなかつたら——

さう思はずにはゐられなかつた。

彼女の眼には、あの氣の毒な唇三郎の、驚きふためいてゐる顔が見えた。そして又、この事實を知つた時の父の怒

り悶える顔が見えた。それからそれと浮んで來るものは、すべてが、想ふに堪へず描くに堪へぬ光景だつた。

父のもとへ、そして唇三郎のもとへ——もう一度戻るべきであらうか？

とさう思つた時、いゝえ！ と彼女は心に叫んだ。いゝえ！ 今更そんな事が——。

今更そんな事が出來るものではない。かうなつた以上、どこまでもこのまゝで生き通すより外はないのだ。自分の

方向はすでに決せられたのだ！

さうだ。何人をも頼らずに、何人をも待たずに、自分一人で、自分一人の力で生きるより外はないのだ！

萬千子は、今、柳子に向つていつた言葉を、もう一度繰返して見た。柳子にそれをいつて見せた時は、むしろヒス

テリツクな興奮に支配されてゐた。が、今それを心に繰返して見ると共に、その時には未だはつきり握めなかつた實

感が、それ等の言葉を裏付けるべく、次第に確に根を張つて来ることを彼女は感じた。
さうだ！ これから新しい生活が初まるのだ。新しい生活の地平線がひらけるのだ。新しい「明日」がやつて来るのだ！

新しい「明日！」新しい「明日！」
彼女はさう心で呼び続けた。

そのうちに彼女は少しうとくとした。と思ふと、直ぐまた眼が覺めた。
隣の室から、何かいつてゐる柳子の甲高い聲が聞えた。それとからまつて、男の聲がした。澄んだ静かなバリトンには、聞き覚えがあつた。柳子の愛人で、二三度會つた事のある吉浦助の聲だつた。出勤前に、ちよつと立寄つたらしがつた。

何を語り合つてゐるのか？ 二人の會話は、いかにも相許した戀人同志らしく、打ち解けてそして楽しげであつた。

「柳子さんは幸福だわ！」

萬千子は、さう心で呟かざるを得なかつた。

友 だ ち

新しい「明日」新しい生活の地平線——。

だが、あまりに強過ぎ、あまりに急激過ぎた打撃は、容易に立ちあがり難く彼女を傷つけた。——事實彼女は、柳子のベッドに倒れたなり、病人になつてしまつた。

しかし、一寸醫師を呼ぶにさへ、はよからねばならぬ彼女の現在だつた。

「大丈夫よ。どんな人が來たつて私追ひ返してしまふから——」

自由な勤めの柳子は、社の方は休んで萬千子に附添ひながら斯ういつて力づけた。新婚旅行の途中からの花嫁の失踪——これは新聞種にしても随分センセーショナルな事件に違ひない。わななく思で朝々の新聞に注意したが、幸ひにそんな記事は出てゐなかつた。

「出てゐないわね。今日もこれで安心だわ。」

「いつその事堂々と新聞に出るといふのよ。日本にもさういふ勇敢な女性が現はれたといふ事を知らせてやりたいぢやアないの。」

「勇敢な女性だなんて——」

と萬千子は苦笑した。

新聞には出なかつたが、兩家から搜索の手は盡くされてゐるに違ひなかつた。小野寺家の方では勿論、横村家としても、體面上、警察などは持ち出さないであらうが、私立探偵社か何かの者らしい男は、その三日目かに、すでに

柳子に面會を求めて來てゐる。少なくとも一月ぐらゐ、いや、二月ぐらゐの間は、絶對に住所を知られてはならないと思ふと、萬千子は、氣が氣ではなかつた。そして一方、自分の失踪のために、婚姻が破れた以上、婚姻と交換條件になつてゐる小野寺家からの物質的援助が得られなくなり、父が非常な苦境に立つてあらうことも目に見えてゐる。時としては八度以上にものぼつたりする執拗な熱に苦しめられながら、萬千子は、苦しい毎日を一日／＼と柳子の庇護と介抱とに過ぎしたのであつた。

「本當にあんたにはすつかりお世話になつてしまつて——」

と、萬千子は心から柳子に感謝した。萬千子は、友だちといふものゝ有難さが沁み／＼と身にしみた。そして、柳子の愛人の吉浦も、柳子以外に事情を知るたゞ一人の人として、柳子に劣らない心づくしを見せてくれた。吉浦は、K大學の理財科を今年の春出たばかりの、柳子や萬千子といくつも年の違はない男で、京橋の方のある會社に勤めてゐた。モダンな感じの、瀟洒とした厭味のない男だつた。柳子の吉浦に對する愛情には、いくらか姉振つたところがあつた。

「兎に角ね、かうなりやア、私だつて働かぬやアならぬわ。——家の方だつてそんな事情なんだから、父や弟の世話ぐらゐしなきゃならないだし——」

と、萬千子は、その時來合はせてゐた吉浦の方に、病後のやつれが、一層の凄艶さを加へた顔を振り向けながらいつた。

「吉浦さんの會社に、女事務員の口か何かないこと？」

「それはあるにはありますがね——」

と、吉浦は、それが癖の、はらりと額におちかゝる髪の毛を華奢な女のやうな指先でちよいと撫であげながら、ゆげな眼付で萬千子を見上げた。そのゆげな眼付は啓三郎が萬千子を見る時にしたと同じやうな眼付であつた。

深く燃えながら、妙に臆病におど／＼とふるへる眼付——

「あつたら世話をして下さらない？ これつて能もない代りどんな事でもするつもりよ。」

「ですが、どうも勿體ないですねえ。あんたのやうな人が職業婦人になるなんて、まるでどうも——」

「あら、どうして？ 私には働けないとでも仰有るの？」

「働けないといふんぢやありませんよ。働けるかも知れないが働かせるのが勿體ないといふのです。」

「あら、吉浦さん。」

とその時柳子が笑ひながら口を出した。

「私だつて職業婦人よ。萬千子さんなら職業婦人なんかには勿體ないけど、私は——私は丁度い／＼とでもいふの。へんな事いつちやアいやよ。」

「いや、さういふわけぢやないんだ。そんな風にとつちや困ります。」

吉浦は眞面目に紅くなつて打ち消した。

二

いつまでも柳子の親切に甘えてばかりはゐられなかつた。健康が回復すると、萬千子は直ぐに巷に出て働く事を思つた。職業婦人として先づ立派に自立する。その上で、父のもとに行つて許しを請はう！ そして、事情次第では、父や弟の生活ぐらゐ、自分の手一つでも支へて行つてやらなければならぬ。ブルジョア娘——あの人は、自分を、生活に對する何の力もゝたぬ人間だと思つてゐる。自分が果してそんな意氣地無しブルジョア娘であるかないか？ それをあの人に見せてやらう！

とはいへ、彼女はまだ、おほッぴらに世の中へ出て行ける人間ではなかつた。

「まだ駄目よ。だつて、まだ一月にもならないぢやないの。もう少し経たなきや出て行くのは危険よ。」

「まあ、退屈でも、もう少しの間さうしてちつとしてゐるのよ。それにまだ、身體の方だつてすっかり癒くなり切つちやゐないんでせう。」

かうして、萬千子は柳子のアパートメントで、一月あまりの籠居を續けた。丁度、柳子の部屋の隣に空間が出来たので、そこを借りる事にして、柳子の書棚から手當りにひき出して來た本を、とりとめもなく讀んだりして、時を消してゐた。

さうした、爲す事もない籠居は、ともすれば彼女を物思ひに誘ひ勝たつた。もう、全く過去の世界に切りはなしてしまつたつもり、辰夫の事や、啓三郎の事がしきりに思はれた。辰夫の事が思ひ出されるのは、まあ不思議はないとしても、あゝして逃げて來た啓三郎の事が、妙に心に残つて、しつこくまつはつて來るのが、萬千子には自分ながら意外な氣がした。

萬千子は左の手の無名指の上にまだそのまゝにしてある結婚指環と婚約指環とをちつと眺めながら、心の中で呟いて見た。

「私、あの人をいくらかでも愛してゐたのか知ら？——いゝえ、そんな事はないわ。たゞ、氣の毒に思つてゐるだけだわ。本當に氣の毒な可哀さうな人！」

そして、彼女は頭を振るやうにした。

「又、つまらない事を考へて——。もう何もかも忘れてしまはなければ——それには働く事だわ！ 働いてく、火の出る程に働くのだわ！ 働いてゐれば、つまらない事を、考へたり感じたりする暇はなくなる筈だわ！」

たりする事は決して人間を幸福にはしない。たゞ、働くこと！ 考へたり感じたりする餘裕のないまで、傍目も觸らず働くこと！ それが唯一一つの幸福への道なのだ。

さう思ひながら、萬千子は一日も早く街へ働きに出られる日を待つのであつた。

その時、ドアにノックの音がした。はひつて來たのは、吉浦助であつた。

「いらつしやい。柳子さんは今日もまだお歸りにならないのよ。この頃は遅いのね。」

「さうのやうですね。」

吉浦は、柳子を訪ねて來たのではないといふ氣持を眼顔に見せて、

「どうです？ 退屈ですか？」

「ええ。随分退屈よ。」

と、萬千子は微笑しながら、

「私、もう構はないと思ふの。五六日で月が代るでせう。來月から私出て見たいと思ふの。」

「さうですね。しかし——。」

「駄目さうなの？」

吉浦から話のあつた或商會の事務員の口についていつてゐるのであつた。芝の方の、個人經營のあまり大きくない店で、比較的高給で女事務員を求めてゐるのだつた。

「いゝえ。駄目な事はないんですが、どうも僕は、變な氣がして仕方がないんです。あんなのやうな人があんなこみこみした店の女事務員なんかになるなんて——。」

「あら、どうして？」

萬千子は無邪氣に眼を腫つた。吉浦は、例の眩しげなおどくした眼付で萬千子の眼を見迎へた。

「本當にどんな事でもする氣であるのよ。どこへでもいふんですからお世話をして下さいな。——私、斯うなりやアもう女工にでも何にでもなる氣であるんです。」

「は、は！ 馬鹿な！」

「いゝえ。本當よ。青バスの車掌にでも何でも——」

「あんたが、車掌におなりなんらんだつたら、僕運轉手になりたいですね。は、は！」

吉浦は、冗談らしく笑つたが、その眼はひどく惱ましげであつた。

「いゝえ。冗談ぢやないのよ。私、一日も早く何うかしなければなりやア——考へると氣が氣ぢやないんですもの。」

「だが、あんたのやうな人を、塵埃の中で働かせなきやならないなんて——實際勿體無さ過ぎるんです。」

吉浦は、もう一度それを繰返した。

「又、そんな事を？ どうしてそんな事ばかり仰有るの？ 人間は誰だつて働くのがあたり前ぢやありませんか？」

「でも、何だか——たとへていへばですね、友禪縮緬を雑巾にするやうな。そんな氣がするんですよ。勿體無くていたしたくつて——實際、これほど僕等男性の心を痛ましめることはないのです。」

と、吉浦は心の底から吐き出すやうにいつたが、

「僕はつくづく自分の無力が怨めしくなるんです。」

少し間を置いてからいひ添へた。取つてつけたやうに、そして獨語めく調子で。

「え？」

萬千子は、美しい眼を瞠つて問ひ返した。

「いや、男性としてこんな心外な事はないといふんですよ。」

吉浦は、へどもどと紅くなりながらいつた。

「心外なのはこつちよ。誰でもがそんな事をいつて——」

萬千子は腹立たしくいつた。

「雑巾にだつて、何にだつてなるわ。私、ほんとに、自分の身體が摺りきれぬまで働くつもりよ。働けない女、一人で生きて行けない女、生活の上に無能力な何も出来ない女——初めからさうきめて、みんな私を馬鹿にしてゐるんですもの。」

いひながら萬千子は、あの辰夫との會見を思ひ浮べてゐた。

「そんな事はないんですよ。」

と、いつたが吉浦はそれきり黙つてしまつた。黙つて、惱ましげな眼で萬千子の顔を眺めてゐた。何かいはうとしていへない、もだくしさが、その惱ましげな眼の底に動いてゐるやうに見える。

萬千子は、そこにあるものを感じて、おや！と思つたが、しかしわざとそれに氣がつかぬ風をして、

「ねえ、本當にお願ひしますわ。その芝の方の口ね、私、明日からでも出たいと思ふんですの。どんく話を進めて見て下さいな。」

「承知しました。」

と吉浦はいつたが、心こゝにあらずといふ様子だつた。そして、なほしばらくの間愚圖々々と紙巻を燻らしなどしてゐたが、突然きつかけもなく立ちあがつて、

「ちや、失禮します。」

「あら、柳子さん、もうお歸りになるんでせう。待つてみらつしやいな。」

「いや、あの人には別に用事はないんです。」

「どう？ でも——。」

「構はないんですよ。」

いひ棄て、吉浦は出て行つた。

頼んで置いた勤口の事で、訪ねて来てくれたのかと思ふとさうでもない。別に用事もないのにやつて来て——それも、柳子のゐない間にやつて来て、二三十分ぐらゐるては歸つて行く。そんな事が、もう幾度となく繰返されてゐる事を考へて、萬千子は、少し、變だなと思つた。今夜の吉浦の様子はとりわけ變である。——萬千子は何か氣になりながら、ぼんやりとそこに坐つてゐるところへ、柳子が顔を出した。

「お歸んなさい。今、吉浦さんが見えて、お歸りになつたばかりよ。」

「あら——。」

柳子は、暗い眼付で、ぢつと萬千子の顔を、それから部屋の様子を眺め廻すやうにした。

四

柳子は、うさん臭さうにあたりを見廻した眼を、もう一度萬千子の顔に戻して、何か物いひたげに口許をわななかせたが、そのまゝくると睡を返すと、自分の部屋の方へ歸つて行つた。ばたん！ と、ドアのしまる音がした。

「あら。」

萬千子は呆氣にとられた。

——さういへば、そんな不機嫌な様子を、柳子は今日初めて見せたわけではなかつた。この十日ばかりこつち柳子の態度には、何となく冷たい、よそ／＼しいものがあらはれて來てゐた。あんなにも親切に迎へてくれた友達の、自

分のためにこの世の中では最初の扉を開いて迎へてくれた友達の、そして、たつた一人の相談相手でもあり力になつてくれ手でもある友達の、さうした冷たさ、よそ／＼しさは、ひどく彼女を心細くした。が、どうして急にそんな態度を見せ初めたのか？ 萬千子にはその理由が分らなかつた。

それが、やつといくら分つて來たやうな氣が萬千子にはした。吉浦の熱ッぽい眼付や、妙な言葉が、——今までは眼にも耳にもとめずに來たそれ等のものが、いち／＼、新しい意味を帯びて浮びあがつて來た。

「まあ、あの人——。」
と、萬千子は少し紅くなつた。が、やがて苦笑が口にきざまれた。とにかく、こゝから出て行つた方が宜ささうだ——と彼女は淋しい心の中で思つた。

吉浦が、その次に萬千子を訪ねて來たのは、それから一日隔いた或日の黄昏時であつた。矢張柳子は留守だつた。柳子は新年號が出る間際なので、この頃は毎日夜になつていなければ社をひけなかつた。吉浦は、それを承知で萬千子に會ふためにだけ訪ねて來るのに違ひなかつた。萬千子は警戒を以て吉浦を迎へた。

吉浦は例のやうに、熱ッぽい眼付を、ちら／＼と萬千子の顔に投げながら、無闇に紙巻を燻してばかりゐた。——勤口の話は出たが、それはたゞ、形式的にいって見たゞけで、そのほかにも別段、とりとめた話をするのでもなかつた。

萬千子はその對座に息詰るやうな苦しさを感じた。早く歸つてくれ、ばいと思ふ外なかつた。

と、ノックもなしにドアが開いて、今夜はいつもより早く柳子が、外氣に赤らんだ顔をさし入れた。

「又、來てゐるのね。」
と、柳子は、暗くふすぼる鋭い眼で二人の顔を代る／＼見てから、突き刺すやうな調子で吉浦にいつた。

「何を、あんた話してるの？」

「まあ、こゝへおはひんさい。」

吉浦は狼狽の色を見せていつた。

「私の部屋へいらつしやい。吉浦さん！」

氣の弱い吉浦は、しよびかれるやうにして柳子のあとについて、柳子の部屋へはひつて行つた。

柳子の部屋から、興奮した早口の、甲高な柳子の聲がびん／＼と扉に響いて來た。勿論、何をいつてゐるのかは聴きとれなかつたが、怒れる戀人の、激しい胸の喘ぎまでが、はつきりと氣配の中に感じられた。

やがて、吉浦は歸つて行つたらしい。

萬千子は、吉浦が歸つてから十分ばかりの後、そつと柳子の部屋をノックした。そして部屋へはひつて行くと、柳子はテーブルの上に突つ伏してゐた顔を振りあげて、硬ばつた表情で萬千子を見迎へた。その眼は涙に濡れてゐた。

「どうかなすつたの？」

萬千子は、わな／＼く聲をおし鎮めるやうにして訊いた。

「いゝえ。どうもしないわ。」

柳子は冷かにいつた。

「だつて——。」

柳子は、少し間を隔ててからいつた。

「萬千子さん！ 吉浦はあんたと何を話してゐたの？」

「別に何も——。」

「あの男、あなたを愛し初めてゐるのよ。」

柳子は口許では冷たく笑つたが、その眼は涙の底で燃えてゐた。涙の底で燃える青い炎！ 萬千子は、あの辰夫の

宿を訪ねた時そこゐた娘がちつと自分を見たその邪惡な眼を思ひ出した。萬千子は、今、その娘の眼と同じやうな眼をその親友の柳子の顔に見た——。

五

「そんな事が——まあ、そんな事が——。」

「あなたは、それに氣がつかかなかつたの？」

柳子の白眼が冷たく光つた。

「だつて、そんな事——。」

「隠さなくともいゝわ！——隠さなくてもいゝのよ！」

柳子は甲高い聲で叩きつけるやうにいつた。

「まあ！ だつて、そんな事ちつとも——。」

「いはいだつて、あの様子で大抵分るでせう？ どうも變だと思つてゐたら——あのお馬鹿さん！ いつの間にか

あなたに夢中になつてゐたのね。ほ、ほ！ 馬鹿にしてゐるわ！ 私を眼の前に置いて——。」

邪惡な表情にたゞれた眼で萬千子を見ながら、柳子は斷髪を振亂すやうにしてヒステリックに笑つた。

「だつて、私、何にも知らないんですもの。」

萬千子はさういふより外なかつた。

「知らない？ 知らないつて可笑しいわ。」

「まあ、柳子さん！ あなたは——。」

「それはあなたには責任はないことかも知れないけど——あなたは迷惑してらしたかも知れないけど、あなたのや

うなお美しい人はね、傍にゐる者も災難よ。まるで、刃物みたいなものだけ、傍にゐるものはみんな傷つけられるのよ。」

柳子は、つけくといつたが、一寸間を隔ててから、投げつけるやうにいひ添へた。

「あんたのやうな人には矢張早く何人かと結婚してもらつた方がいゝのね。」

「まあ！」

あまりの言葉に萬千子は腹が立つた。自分が全然知らない事なのに、こちらから誘惑したでも思つてゐるのか？ 馬鹿々々しいと共に腹が立つた。が、何よりもあの親切な友人の、俄に一變したその相貌が、萬千子の心を悲しませた。萬千子は涙ぐんだ眼で柳子の顔を見上げた。

柳子は、なほ何かいひたげに唇を顫はしたが、ぐいと顔をそつぽに向けると、頬杖を突いた右の肩を、險しく萬千子の眼の前で怒らせた。

「私、矢張こゝにゐてはいけないかつたのね。私、ぢやア、出て行くわ。」

「そんな事私いやしないのよ。」

「でも、私のある事が、あんた達のためによくないとすりやア出てゆく外はないわ。」

萬千子は静かな調子でいつた。

「ねえ。柳子さん！ あんたは私のたつた一人のお友達よ。どうぞつまらなく感情を害したりなさらないで頂戴。それは私も用意過ぎたかも知れないけど、本當に私何にも、知らなかつたんだから——。」

柳子はしかしそつぽを向いたまゝなほ顔色を更めなかつた。どうにもならない、冷たい頑なものがそこにあつた。

萬千子は、溜息を一つ吐いて自分の部屋に歸つた。

萬千子はテーブルに頬杖をして、この部屋を出て行く事を考へた。やがて何か職業が見つかったら、生活の根柢を

こゝに据ゑて、柳子と一緒に、いつまでも仲好く暮して行かうと思つてゐた。柳子のやうな道伴のある事がどんなに力強くも楽しくもある事かと思つてゐた。が、それも駄目！ 愈、たつた一人で、世の中へ出て行かなければならぬ時が来た——。

それにしても、あの柳子のはしたない態度はどうだらう？ 萬千子は輕蔑の微笑が頬にのぼるを禁じ得なかつた。

あまりに露骨な醜い嫉妬ではないか？ 眼覚めたる女性として、女性の自尊を説く平生の柳子はどうしたのだ？ 戀をするばかりが女の仕事ではないと自分にいつて聞かせたあの柳子はどうしたのだ？ あまりに、「たゞの女」過ぎる柳子の態度ではないか？

萬千子はもう一度輕蔑の微笑を浮べた。が、その微笑のあとの、彼女の心には深い悲が水のやうに湛へられてゐた。

嫉妬する柳子も、嫉妬される自分も、同じやうに氣の毒なあはれなものに思はれて來たのであつた。

そのあくる朝、萬千子はそのアパートを出た。何の目當も、何の頼もなしに——。

巴 渦

日曜の夜であつた。——父親は、神田の方の知り人の家を訪ねて留守だつた。辰夫も、一週間ほど前から旅行に出

てゐた。雪にでも降りかはりさうな冷たい雨が、さら／＼と堅い音を、締切つた窓の雨戸にたてゝゐた。美代子は、長火鉢

の前に坐つて、針仕事をしてゐた。美代子の縫つてゐるのは、辰夫の羽織であつた。——今日は、朝からそれを縫ひ續けてゐた。縫ひながら、彼女は

家庭的ななごやかな氣持を感じてゐた。十燭の電燈は、針をもつ手許も覺束なくくらゐだつたが、湯上りの、少し濃めに化粧した顔が、薄暗い灯影に、却

つて匂やかさを加へてゐた。火鉢では、ニツケルの藥罐が、じん／＼とたぎつてゐた。火鉢の横には、クロが丸くな

つて寝てゐた。彼女の縫つてゐる銘仙の布の、膝に餘つた部分が蠟の上にさら／＼と音をたてる毎に、クロは耳を動

かして媚びるやうな薄眼を開いた。彼女は、時々針の手をとめては、見えない影を空に追ふやうな眼付をした。そして、その小さい口許に、あるかな

いかの微笑をたゞよはせた。——彼女は、火鉢の抽斗を開けて一通の手紙をとり出した。今朝受取つた旅行中の辰夫からの音信であつた。彼女は

は、もう一度それを開いて、その手みじかではあるが力強い愛撫の言葉を讀返した。もう二三日すればあちらを發つ

と書いてある。明後日頃は、歸つて來るであらう？

美代子は、その手紙を封に戻して、もとの抽斗に丁寧にしまふと、再び針をとりあげようとしたが、ふと、そこに

寝てゐるクロが眼にとまると、兩手をのばして、蠟にのめるやうな恰好をして、クロを抱きあげた。

美代子の兩手は無意識にクロを弄んでゐたが、やがて、それを胸に押しあてると、ぎゅつと強く抱き締めた。ク

ロは苦しげに鳴きもがいた。「ほ、ほ！」

美代子は亂暴にクロを投げ出すと、聲をたてゝ笑つた。その時、窓の外で登音がした。

「お父ッあんかしら？」と思つたがさうではないらしかつた。「誰が來たのだらう？」

さう思ふと同時に彼女の胸は急に不安に騒ぎ出した。彼女は、いつも二人の訪問者を恐れてゐた。一人は、あのい

つぞやの早朝に訪ねて來た美しい令嬢であつた。令嬢はあれきり訪ねて來なかつた。が、いつ訪ねて來るか知れない

といふ不安に、あれからもう二月近くなる今日になつても、まだ彼女の胸を去らなかつた。もう一人は——

「御免なさい。」と聲がした。美代子は、はつとした。もう一人の——彼女の恐れてゐるもう一人の、あの「猪之さん」の聲だつた。

彼女の顔は急に蒼ざめ、彼女の身體は急に堅くなつた。——彼女は息を殺して押黙つてゐた。ガラリと格子戸が引き開けられた。

「御免！」

焦立しい聲がした。

それでも、まだ美代子は黙つてゐた。この十日ばかりちつとも顔を見せないのはいゝ按排だと思つてゐたのに――

「美いちやん！ ゐないのか？」

嗚鳴るやうな聲がもう一度した。

黙つてゐたら上がつて来るだらう？

仕方がない、美代子は立つて入口の方へ出て行つた。

「あ、いらつしやい。」

美代子は、わざとらしく落着いていつた。

「黙つてゐるもんだから、留守だと思つたよ。」

「お勝手の方にゐたものだから――」

赤城猪之助は、雨に濡れた外套をぬぐと、ぶかくと上がつて来た。

「小父さんは？」

「もう歸る時分よ。」

「二階の先生は？」

「ゐるでせう？」

「灯がついてゐないから留守なんだらう。美いちやん一人ツきりなんだな。」

猪之助は、長火鉢の前にむづと胡坐をかいた。

赤城猪之助は小柄な蒼白く瘦せた男であつた。蒼白いのは長い間植字工をしてゐて鉛の毒にあたつてゐるのであらう。やゝお出額の肩と目の間の狭い、見るからに神経質らしい容貌は一見労働者らしくない感じがした。が、この弱々しげな男が、時として、どんなに狂暴な激情的發作を示すかを美代子は知つてゐる。美代子は猪之助の、燃え爆ぜる炭火のやうにきらりと輝く眼をおどくと見迎へた。

「どうして、そんな眼で俺の顔を見るんだい？」

猪之助は初めから喧嘩腰だつた。

「え、俺がそんなに怖いかい？」

「怖くなんか――怖くなんかいいわ。」

「ちや、どうしてそんな眼付で俺を見るんだい？」

「別にどんな眼もしてやしないぢやアないの？」

「そんならいゝけどね。」

猪之助はにやりと底氣味悪く笑つて、

「今夜はね、はつきりと何もかも解決しようと思つてやつて来たんだ。二階の先生は――」

と猪之助は、その「先生」といふ言葉を輕蔑的にいつて、

「今夜は留守なんだね。」

何か非常な決心を潜めてゐるらしい猪之助の、蒼ざめた顔を見ると美代子はかすかな戰慄を身内に感じた。

「は、は！ 怖いのかね？ そんなに俺が怖いのかね――俺は、何時の間にも、美いちやんにそんなに怖がられる人間になつたかなあ。なあ、美いちやん！ ついこの間までは、あんなに仲の好かつた俺とお前だつたぢやアないか？

お前は、あの時分の事をもうすっかり忘れちやつたんだな？」

猪之助はいくらか悲を含んだ調子でいひ續けた。

「いつの間に、そんなにお前に怖がられるやうな人間になつたのかと思ふと、俺は自分で自分が悲しいよ。俺はね、お前に捨てられようが、逃げられようが、怖がられたり憎がられたりだけはしたくないと思つてゐた。お前に、そんなに、仇敵か悪魔かといふやうな眼で見られる——俺にすると、これほど悲しい事はないのだ。考へても見るが、いや。自分がこの世の中で一番愛してゐる人間から、この世の中で一番いけない奴のやうに思はれる——こんなつらい事があるだらうか？」

猪之助の眼にはちらと涙が光つた。そんな風にはれると美代子の胸も疼かすにはゐない。本當に、この人が、もう五六年間の長い間、どんなに優しい心づくしを自分に見せてくれたか？ この人の愛には——この人のいふ事はいつはりはないのだ！

「美いちちゃん！ 俺はもうあすこを罷めたよ。」

猪之助はふと話頭を轉じていつた。

「あら、罷めたの？」

猪之助が、今迄勤めてゐた印刷局の方にこの二三週間姿を見せなくなつた事には美代子も氣がついてゐた。どうしたのか？ と思ひながら、それだけ顔を合せる機會が少なくなつた事を美代子はひそかに喜んでゐたのであつた。

「あゝ。罷めた。おらア大阪へ行くつもりだ。」

「大阪へ？」

美代子は驚いて問ひ返した。

「あゝ。大阪へ行つて働くつもりだ。それでね、美いちちゃん！ 俺ア最後に、もう一度お願ひに來たんだ！ さうだ、お願ひだよ。頼みだよ。俺ア美いちちゃんに頼むんだ。ねえ、美いちちゃん、俺と一緒に大阪へ行つてくれ。」

猪之助は、息ざしをあらく、一生懸命にいつた。

「勿論お父アあんも一緒に連れて行くんだ。なあに、お父アあんなんか、さうすりや仕事はさせやアしない。お前だつて働きになんか出ないやうにさせてやるよ。俺だつて、一生懸命に働きさへすりや、二人や三人の口は樂に過ぎさせるだけの腕は持つてゐるんだ。それに、大阪へ行きや、何にも青服ばかり着てゐなくてもいゝ、もつと割のいゝ、氣の利いた仕事の當もあるんだ。だからね——。ね、これはお願ひなんだ、頼みなんだ！ ね、美いちちゃん！」

三

言葉はあくまでも下手に出てゐたが、ひたぶるに壓し迫る眼の色だつた。美代子は、答へかねて押し黙つてゐた。

「ね、俺は何にもいはない。たゞ、頼むんだよ、お願ひするんだよ。美いちちゃんが承知してくれりやア小父さんへは俺から話す。小父さんも今の處を罷められかゝつてゐるツて事ぢやアないか？ もう年齢だ。小父さんにだつてちつたア樂をさせなきやア。大阪へ行けば、小父さんにだつて、美いちちゃんにだつて生活のために働くやうな事アさせないつもりなんだ。」

「だつて——。」

美代子は辛うじて、これだけいつた。

「美いちちゃんと俺と一緒にゐるツて約束は小父さんだつて承知してゐる筈だらう。」

「だつて、急にそんな事をいひ出してそりやア——無理だわ。」

「おどく〜と見返しながら美代子はいつた。」

「無理？ どうして無理なのだ？」

「私、大阪へなんか行くの厭よ。」

「なぜ厭なんだ？」

「なぜッて——。」

「美代子ちゃん！ ぢやアお前は、どうしても二階の奴と別れられないつていふんだな？」

猪之助の眼から火花が散つた。

「石田さんとは関係のない事だわ。たゞ、私大阪へなんか行くの厭だつていつてゐるのよ。」

「お前はすつかり、あいつに騙されちやつたんだ！ お前は、あいつの女房になる氣なんだな。」

猪之助の言葉には底氣味悪くドスが響いた。

「あら、そんな事——それは猪之助さんの思ひ違ひだわ。猪之助さんはあんな事ばかりいふけど、私と石田さんとは、何でもありあしないのよ。」

見え透いた嘘ながら、美代子は矢張さういふより外なかつた。

「今更そんなにとぼけなくてもいふんだ。俺は何もかも知つてゐるんだからね。お前と石田とがどんな仲になつてゐるか、俺の眼だつて筒孔ぢやアないんだ。俺は石田の奴と決闘しようと思つたんだ！ 俺が死ぬかあいつが死ぬか、お互の生命と一緒にお前の身體をやりとりしようと思つたんだ！」

と、猪之助は次第に昂まつて来る激情にわななきながら、

「だが、俺はぢつと胸をさすつてゐるんだ。お前にしろ、屹度一時の迷なんだからと思つて、出来るだけ事を荒立てないやうにと、俺は我慢に我慢を重ねてゐるんだ。それに、あの男は口先だけにしろ、俺達の味方になつて俺達のために働くといつてゐる。俺達の仲間もいざとなれば頼になる人だつてんで何んのかと立てゝゐる男だ。さういふ男だと思つて俺はぢつと堪へてゐるんだ。お前さへ、俺の方に戻つて呉れりやア、俺は何にもいはないつもりだ。何もいはないでお前を伴れて大阪へ行くつもりなんだ。」

美代子は、言葉もなくうなだれてゐた。

「美代子ちゃん！ お前は、あいつが本當にお前を愛してると思つてゐるのか？」

ちよつと間を隔ててから、猪之助はヒステリックな焦立を以ていつた。

「私、別に——。」

「隠さなくつてもいゝツてのに！ お前があの男と出来てるツて事は田代からも聞いてゐるんだ。今更、どうして隠すんだ？」

「まあ、兄さんがそんな事いつてゐる？」

美代子は思はず眼を睜つた。美代子は、あの片腕の従兄を「兄さん」と呼んでゐる。美代子に「兄さん」と呼ばれてゐる田代庄作は美代子と辰夫との關係について、最初から好意ある保護者であつた。その庄作が、そんな事を猪之助にいつたのであらうか？ 美代子の戀が、何よりも猪之助をはよからねばならぬものである事は、庄作も知つてゐる筈なのに——。

「田代から聞くまでもなく、俺はこの眼でちやんと見てゐるんだ。生命賭けで思つてゐる女を、ほかの男にとられても氣がつかないやうなそんなぼんくらに俺が見えるのかい？」

と猪之助は口許を引ゆがめるやうにして妙な笑を浮べて、

「だがね、俺は出来ちやつた事を彼はいふんぢやアないよ。お前が、俺に戻つてさへ呉れりあそれでいふんだよ。」

四

だが、美代子は矢張ちつとうなだれて押し黙つてゐるのであつた。

「美代子ちゃん！ お前は間違つてゐるんだ。お前は表面しか見えないんだ。石田がどんなうまい事をお前にいつたか

知れないけど、うつかりそれに乗せられると後でひどい目に會ふよ。お前はあいつに愛されてゐると思ふか知れないけど、あいつが何でお前を愛してゐるものか。一寸可愛いくらゐるはそりやア思つてゐるかも知れないが、本當に心からお前を——いや！ あいつがたとひ心からお前を愛してゐるところで、俺のこの愛にくらべたらそんなものが何だ！ 俺は生命賭けでお前を愛してゐるんだ。俺はお前のためなら生命だつて投げ出すつもりでゐるんだ！ お前は俺がいつまでもこんななみじめな労働者なんで、それでいや氣がさしたんだらう？ 矢張りあの石田のやうに氣のきいた背廣でも着て、本でも讀んでるやうな人間の方がいゝんだらう？ そりやア判つてる。だから俺だつて、あせりもし、もがきもしてゐるんだ。大阪へ行きやア、俺だつて、ちやんとした洋服ぐらゐは着て暮せる筈だ。なあ、美伊ちゃん！

しかし、美代子は相變らず身體を石にして押し黙つてゐた。血の色を沈めた頬が白粉の下に蒼ざめて、片意地らしく硬張つた表情が、いつもの美代子とはまるで別の人のやうに見える。それを見ると、猪之助は、再び激しい怒と焦立とに捉へられた。

「美伊ちゃん！ 俺はお前のために生きてゐた人間だ。お前は俺の全部なんだ。お前を失ふくらゐなら、俺は死んだ方がいゝと思つてる。——ぢやア、これだけ訊く！ はつきりと返事をしてくれ！ お前はどうしても俺と一緒にゐる事はいやか？」

美代子は顔をあげた。哀願するやうな眼で猪之助の顔を見た。

「いやか？ いやならいやとはつきりいつてくれ。」

「勘忍して——本當にすみません！」

美代子は袂を顔に持つて行きながらいつた。それが、悔いの言葉でなく、もうどうしてもあととどりをする事の出來なくなつた自分の罪を、そむいた男の前に詫言する言葉である事はいふまでもなかつた。

「ぢや、どうしてもあの男とは離れられない——といふのだな？」
猪之助はもうその激しい怒を隠さなかつた。彼の全身は、その感情の暴風に野中の樹のやうに揺れた。

「すみません。」

「すまないつて？」

「私が悪いのです。」

美代子は嗚咽の中からいつた。

「美伊ちゃん！ ぢや仕方がない。お前、俺と一緒に死んでくれ！」

「え？」

と、思はず、そのほどぼしる涙の中から瞠つた眼に、猪之助の手に握られてゐる一振りの匕首が映つた。

「仕方がない。かうなりやア、お前を殺して死ぬだけだ！」

不自然に落着いた、底氣味悪い聲だつた。

「まあ！ 怖い——怖いわ。猪之さん！」

美代子は膝をすざらせながら、物凄く蒼ざめた猪之助の顔を恐怖に充ちた眼で見た。

「俺はもう覺悟してゐたんだ。一緒に死んでくれ。」

「勘忍して——。」

「逃げるのか？」

「だつて——怖い！ あら、猪之さん！ 怖い！」

立ちあがつた美代子を、猪之助も立ちあがつて、勝手の間隙の障子際に追ひつめようとした時だつた。

その障子が、がらりと引きあけられた。そして、支へをなくした美代子の身體が、よろ／＼と倒れかゝつたのを、そ

の腕の無い方の肩で受けとめて、
「猪之ス！」
と、力強いバスで呼びかけたのは、田代庄作であつた。庄作は、知らぬ間に、水口の方からそこへ飛込んで来たのであつた。
「猪之ス！ ふざけた真似はよせ！ 何てえくだらねえお芝居だ。よせ！」
庄作は壓迫的に低く叫んだ。

五

「庄さん！ 君の知つた事ぢやアないんだ。俺ア、美イちゃんに話があるんだ。」
猪之助は鋭く庄作を睨みながらいつた。猪之助の肩は、庄作の逞しい右腕でむづと引きつかまれてゐた。
「話があるんならおとなしく話したらいいだらう。そんなものを振り廻してあぶねえぢやアねえか？ 俺が聞いてやるから、まあ坐れ。」
「この女に話があるんだ。君になんか用はない。」
「だから、俺が美伊公の代りに話を聞いてやらうてんだ。」
「餘計なお世話かいだ。——庄さん！ 君アどこまでも俺の邪魔をしようてえのか？」
「邪魔をするんぢやねえ。譯をきかうといふのだ。そんな刃物なんか振廻して一體どうしようといふのだ？」
「その女を殺して、俺も死ぬつもりだ。」
「死ぬなら勝手に一人で死ぬ！ 俺がついてゐるんだ、美伊公を無理心中の相手になんかさせねえ。」
庄作は、頭へてゐる美代子を後手にかばひ、匕首を持った猪之助の手首を逆手に引ッつかんでゐた。

「俺がついてゐる？ 君は、あの石田の番犬だともいふのか？」
「何だと？」
「貴、貴様！ 貴様も一緒に殺してやる！」
猪之助はかう叫ぶと、掴まれてゐる手を振離さうと、物狂はしく身悶えをした。
「よし！ ぢや、俺が相手になつてやる。外へ出ろ。」
庄作はぐいぐいと押した。座敷を横切つて入口の障子際まで押し出すと、力一杯に突き離れた。障子が外れ、猪之助の身體は横倒しに土間にころけ落ちた。猪之助の手にしてゐた匕首は、いつの間にか庄作の手に奪はれてゐた。
「兄さん！」
美代子がおろ／＼として庄作に取り纏るやうにした。
「心配しなくてもいい！ こんなものあぶねえから。」
庄作は呼吸の亂れ一つ見せず、あくまでも餘裕のある態度で、匕首を美代子の手に押しつけたが、その時立ちあがつた猪之助は、
「畜生！」
と叫んで、猛然と庄作に飛びついて来た。庄作は、それを、もう一度強く突き飛ばすと、
「こゝちやアいけねえ。外へ出よう！」
威圧的なバスでいつた。
「よし、出て来い！ かうなりやア、貴、貴様と決闘だ！」
「しやらくせえ事いつてやがる。」
庄作は薄笑を浮かべながら外へ出た。

雨は冷たく降つてゐた。軒燈の影を映して濡れた地面が錫色に光つてゐた。格闘する二つの黒い影が、影繪のやうにその薄暗の中に躍つた。——双方無言の、たゞ激しい喘ぎと呻きだけが、肉體と肉體との相撃つ響に交つた。片腕でこそあれ、庄作の腕力は猪之助の比ではなかつた。猪之助は幾度となく地面へ叩きつけられた。が、猪之助は屈しなかつた。よろ／＼とよろめきながらも、死物狂ひで、執拗にとびついて来た。

「おい！ いゝかげんにしろ！」

「何を糞つ！」

庄作はたうとう猪之助を地面に捻伏せてしまつた。猪之助は片頬を泥にうづめながら、らん／＼と輝く血走つた眼で、斜に庄作を睨み上げながら、

「田代！」

と、苦しい喘ぎの中でいつた。

「何だ？」

「お前だつて——お前だつて——」

「何だ？ お前だつて？——何だ？」

庄作は、胸許を引ツつかんでゐるその手をゆるめずにいつた。

「お前だつて、あの女を——あの女を愛してゐるんだらう？」

「勿論だ！」

「そんならなぜ——なぜ！」

と猪之助は、その激しい憤りの眼付に、冷たい輕蔑の表情を交へて叫んだ。

「卑怯者！」

「何が卑怯だ？」

さういひながら、庄作がやゝ手を緩めた際に、猪之助は、むつくりとはね起きた。泥だらけの右の高頬には血の色がにじみ、頤ががく／＼とわな／＼いた。

「何が卑怯なのだ？」

庄作は繰返した。

「自分で自分に訊いて見ろ！ 君のやうな——君のやうな卑怯者はないぞ！」

「何をいつてるんだ？」

庄作の拳がうなつた。同時に猪之助の身體は、もう一度地面の上にたゞきつけられた。

「兄さん！ 兄さん！」

入口の格子戸につかまり、はら／＼としながら二匹の獸のやうに争ふ二人の様子を見てゐた美代子は、この時思はず飛び出して、庄作の肩に縋りついた。

「もう止めて——止めて——そんな亂暴な事しないで——後生だから——」

「亂暴な事をしたかアねえんだ。むかうから向つて来るから、仕方なしに相手になつてやつたのさ。は、は！ 意氣地なしめ！」

庄作は吐きつけるやうにいつたが、猪之助はそこへのめり倒れたまゝ動かなかつた。

「あら、猪之さん！」

美代子は、思はず猪之助の方へ走り寄りうとしたが、庄作は肩に手をかけてそれを押へた。

「放ッつけ！ 構ふ事アねえ。」
「でも——。」

「心配する事アねえんだ。」

庄作は、美代子を格子戸の内へ押し入れ、自分もあとからはひつてびしやりと戸を閉めた。美代子は上り框にべたりと腰をかけ、袂を顔に押當て、泣き出した。

「美伊公、どうして泣くんだ？」

「兄さん、あんまり、あの人をいぢめちやいや。」

美代子は泣きじやくりの間からいつた。

「いぢめる？ 別にいぢめるわけぢやねえ。あいつが馬鹿な真似をしやがるから、少し懲しめてやつたまでの事だ。刃物なんか振廻しやアがつて、あぶねえところだつたぜ。お芝居かも知れねえが、何しろ、あいつのぼせ性だからな。本當に何をするか分りやアしねえ。」

いつてしまつてから、庄作は外の氣配に聴耳を立てるやうにした。

「行つてしまつて？」

「うん。行つてしまつたらしい。」

「私、本當に殺されるかと思つた——。」

「まさか、本氣で殺す氣でもなかつたのだらうがね。は、は！」

「でも、私、考へて見ると悪いわね。」

美代子は涙の底から庄作の顔を見上げるやうにしていつた。

「——悪い？」

「え。猪之さんなら殺されても仕方ないかも知れないわ。——私、悪い女だわ。」

「うん。悪い女だよ。」

庄作は冗談らしくいつたが、その眼には案外におごそかな色を浮べて、

「猪之スばかりぢやねえ。俺だつてお前を殺したくなる事があるんだ。」

「まあ、何いつてるの？」

「猪之スに殺されると、俺に殺されると、どつちがいと思ふ？」

「何いつてるの？」

口許では笑つてゐるが、眼には妙に暗い色をたゞへて、ぢいつと凝視めてゐる庄作の顔を美代子は、おどくとした眼で見上げた。

「は、は！ 冗談だよ。ところで、石田さんは何時歸るんだ？」

「明後日頃歸るツて手紙が來たわ。」

「明後日か？ まち遠だな？」

「あら、あんなこと——。」

美代子は、頬を恥に赧らめて、まだ涙の残つてゐる眼で、なまめかしく笑つて見せた。戀をする娘の、おのづからなる嬌態だつた。

それを見ると、庄作は何か知ら激しい焦立をその胸に感じた。

「——この娘を長い間どんなに深く愛し續けてゐた自分であるか？ が今更のやうに考へられて來たのであつた。」

「俺は歸らう！」

庄作は、だしぬけにかういつて腰を掛けてゐた上り框から立ちあがつた。

猪作は冷たい雨に頬を打たせながら、足許に眼を落して歩いてゐた。彼は妙に憂鬱な悲しい氣持になつてゐた。猪之助に加へた暴力の名残が、節々に痛を殘し、その肉體の痛と共に或る精神的な痛が感じられた。まるで、彼自身がなぐられでもしたやうな——あゝして幾度も地面に叩きつけたのは、猪之助の身體ではなく自分自身の身體であつたかのやうな、そんな氣持もした。

「卑怯者！」

「さういつた猪之助の言葉が彼の耳に懸つて來た。」

「卑怯者！」

それに相應するやうに、心の底で叫ぶ聲がした。——その叫び、彼は否定する事が出来なかつた。彼は救はれ難くみじめだつた。

救はれがたくみじめな心を抱いて、猪作は、狭い横町を濠端の道の方へ出て行つた。すると、その横町の出口の處に——そこは丁度病院か何かの大きな建物の石塀の角になつてゐたが、その石塀の蔭にちつと蹲まつてゐる一つの黒い影があつた。外燈の光に浮んだその蒼白い顔、きら／＼ときらめく眼——それは猪之助だつた。

「猪之助！ まだこんな處にゐたのか？」

猪之助はものもいはず、たゞちろりと猪作の顔を見たま。

「歸れ！」

「俺の勝手だ！」

「歸れ！」

猪作は、猪之助の肩に手をかけて強く引くやうにした。猪之助はよろ／＼とよろめくと、そのまゝべたりと地面の上へ胡坐をかいてしまつた。

「お前も執念深い男だな。猪之助！ 脅さうがすかさうが、あの娘はもう駄目だよ。脈はとづくにゑがつてるんだ。いゝ加減にして男らしくあきらめろもんだ。なあ！ 潔く思ひ断つちまへよ。」

「田代！」

猪之助は、その鋭い眼で斬りつけるやうに、下から猪作の顔を見上げて、

「ぢやア、君は、潔く思ひ断つたといふのか？」

「何だと？」

「君は、あの娘の事を思ひ断つてるのかといふのだ？」

「俺が、美伊公の事を何とか思つてたとしてもいふのか？ は、は！ つまらねえ事をいつてやがる。は、は！」

猪作の顔の筋肉が激しく痙攣した。噎れた泣くやうな聲が咽喉佛をふるはしてほどばしつた。猪作は笑つたつもりだつた。

「嘘をつけ！ だから——だから、卑怯者だといふんだ！」

「何が、だからだ？」

「本當に君がああ娘を思ひ断つたんなら何故俺の邪魔をするのだ。何故俺に渡してくれないんだ。——何故、何故石田なんかにやつてしまつたんだ？」

「渡すの、やるのつて、美伊公は品物ぢやねえんだ。美伊公が勝手にあの男を好きになるのを、俺が傍でどうする事が出来る。つまらねえ事をいふもんぢやねえ。」

辯解的な調子が猪作の言葉を弱々しいものにしてゐた。

「さうだ。あの娘はあの男に誘惑されたんだ。あの男は、本當にあの娘を愛してなんかやるやしないんだ。だから、俺はどうかしてあの娘をこつちへ引き戻さうとしてゐるのだ。田代！ 君は何故その邪魔をするのだ。」

「邪魔をするんぢやねえ。お前があまり亂暴な眞似をするから止めただけなんだ。」

「亂暴な眞似をしたのは俺が悪かつた。俺はかツとする性分だ。——だが、田代！」

猪之助は、きらめく眼で庄作の顔を見つけて、

「あの娘を、あの石田にやつてしまへば、それで君の氣が済むといふのか？ それで君は勝つたつもりなのか？ たとひ敵になつて戦はうとも、俺とお前だ！ お互に殺し合へばツて、俺とお前だ！ 仲間だ！ 友達だ！ いはゞ同じ世界の人間だ！——あの石田が何だ？ あのブルジョアの本讀みが一體何だといふんだ？」

八

猪之助の眼からは涙がほどばしつた。猪之助は、蒼ざめた頬を涙に洗はせながらいひ續けた。

「君がどんなに美イちゃんを愛してゐたか？ それは俺だつて知つてゐる。君は、たゞ、妹のやうにして可愛がつてゐるだけだといつてゐるが、さうぢやアない——さうぢやアない事は、俺はよく知つてゐる。だから——。」

「それにしても、それは前の事だ。」

と、庄作は口を入れた。

「俺はこんな片羽だ！ 俺はこの一本の腕をなくした時から、美イ公の事は思ひ斷つてゐるのだ。」

「思ひ斷つたんなら、なぜ俺の邪魔をするのだ？ なぜ、石田なんか——。」

「俺が美イ公を石田にやつたのだともいふのか？」

と、庄作はなじり返したが、その言葉には力がなかつた。辰夫を愛するやうになつた、美代子の心の動は、彼の與

かり知るところではない。とはいへ、辰夫と美代子とを結びつけるために、自分が、辰夫に或る示唆を與へた事が事實でないといへるだらうか？——さうだ！ 猪之助がいふ通り、自分は美代子を猪之助にやりたくなかつたのだ。その當面の敵手であつた猪之助にだけは、どうしても美代子を與へたくなかつた。

「田代！ 俺は長い間——君と友達になつてから十年もの間、君を兄貴のやうに思つて來てゐた。二人は兄弟同様の仲なんだ。勝つても負けても俺とお前だ！ 俺は君になら、負けても仕方がないと思つてゐたのだ！ だが、石田なんか、あんな奴にあの娘をとられちやア、俺は死ぬにも死ねない氣がするんだ。」

「石田だつて美イ公を愛してゐるのだ。」

「何の、あいつが！——あいつが口先だけで何をいはうと、俺はあいつなんか信用しやしない。あんな奴が、どうしてあの娘を愛してゐるもんか？ 愛したとしても、一時の氣紛れだ。」

「さう一口にきめられるものか？」

「俺のいふ事が間違つてゐるかどうか？ 時が來れば分る話だ。——田代！ それで俺に對する君の復讐なのか？」

「復讐？」

「復讐なら、なぜ君自身の力で來ないのだ？ なぜそんな陰險な、卑怯な眞似をするのだ？」

「は、は！ 何をいつてるのだ。みんなお前の邪推だよ。」

「俺に復讐することさへ出來れば、あの娘はどうなつても構はないといふのか？——俺を苦しめる事さへ出來れば、あの娘をあんな男のおもちやにくれてやつても構はないといふのか？ それで君は満足なのか？」

猪之助の双眸は火箭のやうに庄作の顔を射た。——雨はいつの間にか雪になつてゐた。雪片がちら／＼と猪之助の額に、庄作の肩に舞ひかゝつた。

「みんな邪推だ！ 美イ公が石田に惚れたのは美イ公の勝手だ。俺に何の關係があるんだ。俺は美イ公の事なんかと

「思ひ断つたつもりでも、矢張り思ひ断つちやゐないんだ。思ひ断る事も出来なきや、愛しぬく事も出来ない！ それでそんな卑怯な真似をするんだ！ 田代！俺はお前がこんな卑怯な男だとは思はなかつたぞ！」

猪之助は蒼白い顔を引きゆがめて、冷やかな嘲をその眼に浮べた。その、いかにも輕蔑しきつたやうな顔付を見ると、庄作もくわつとせざるを得なかつた。が、庄作はどういひ返すべきか？ その言葉を知らないのだつた。卑怯といはれても、陰險といはれても、何といはれても仕方がないやうな氣がするのであつた。

電車が通りすぎた。ヘッドライトの光が、そこにある二人の姿を——一人は立ち、一人は地面に胡坐をかいて、はげしく罵り合つてゐる二人の姿を、ちらりと降る雪の中に、瞬間、ぱつと青白く照し出した。

同 伴 者

新婚旅行の途上から花嫁に逃げられた男——

世の中にこれほどみじめな男があらうか？ しかも、その逃げた花嫁のことが、いつまでも忘れられないに至つてそのみじめさは二重になる。啓三郎は限りもなくみじめであつた。

萬千子が想像した通り、双方の家の面目のために、この事實は、細心の注意を以て社會の耳目から隠蔽された。この事實を知る者は兩家に極く近身な範圍に限られてゐた。いや、次第にそれからそれへと知れ渡つて行つたにせよ。知れ渡つた頃には、もう噂の中心となるほどの新鮮味は失はれてゐた。

——その出来事から何時の間にか三月に近い日が経つてゐた。小野寺家と榎村家との兩家の間に持ちあがつた事後の問題も、何しろ本人の行方が分らない以上、解決のつけやうもなく、結局、それなりに打ち捨てられてしまつた。どんな事があらうと、必ず娘は探し出して、破談は勿論としても、お詫びだけはきつと、娘自身の口からもさせるから——といつてゐた萬千子の父の陽之助も、はげしい焦慮と憂悶のため、腦溢血で倒れて枕もあがらぬ状態におちるといふ始末で、いづれにせよ、もう事件は済んでしまつたといはなければならなかつた。

しかし、ひとり啓三郎自身にとつては、まだ決して済んでなどはないなかつた。——

三月も経つと、周囲の者も皆忘れた。ひとり、啓三郎だけは忘れる事が出来なかつた。忘れようと努めることさへしなかつた。

あまりに甚だしい侮辱のゆゑか？ さうではなかつた。啓三郎はその受けたる侮辱のゆゑに萬千子を忘れる事が出

来ないのか？ 侮辱に對する憎しみのゆゑに萬千子を忘れまいとするのであつたか？ さうではなかつた！ 啓三郎は、侮辱などは何とも思はなかつた。否、それを侮辱と感じさへもしなかつた。勿論恨みはした。けれども怒る事も憎む事も出来ない啓三郎だつた。啓三郎は——單純にいほう！ 戀しさのゆゑに、萬千子を忘れる事が出来ないのだつた。彼はその新婚旅行の途上から逃げた花嫁を、たゞひとすぢの戀で、戀ひ求めてゐる男だつた。

——日光室には、ガラス越しの冬の日ざしがしみ／＼と照らしてゐた。啓三郎は、その揺椅子に身を横へて、ちつと眼を閉ぢてゐた。彼は、あの時以來ひどく健康を害してゐた。食ふ事も眠る事も出来ないやうな日と夜とが、もと／＼あまり丈夫でない彼を、すつかりやつれさせ衰へさせ、頭はいつもぼんやりと曇つて、疲れ切つた神経はさまたまの幻想に弄ばれるのであつた。

さうして、眼を閉ぢてゐると、おのづからうつ／＼と眠りならぬ睡が襲うて来る。その夢ともうつ／＼ともない意識の面に、萬千子のきら／＼と輝かしい花嫁姿が浮かんで来る。箱根の宿で、淡い灯影に見た神々しいまでの美しい顔が浮かんで来る。汽車の窓に寄り添うて——と思ふと、急にはつとして啓三郎は眼を開く。今そこに、萬千子が戻つて来て、あの華やかな笑顔で自分に呼びかけたやうな氣がしたからである。だが、眼を開くと誰もゐない。再び啓三郎は眼を閉ぢる。

啓三郎は、眼のまはりから頬にかけて、温かいしめツぽいものゝやはらかな壓力を感じて、いつの間にか眠り入つたらしいその眠から眼を覺ました。眼を開かうとしたが開けない。額の上でしのびやかな笑聲がした。

「誰です？」

「ほ、ほ！ 當て、御覽なさい。」

「何だ？ 宮子さんだな？ お離し！」

「離さない。」

啓三郎は両手で宮子の手を眼の上から引離した。——宮子の顔が灰白く輪廓をぼかして、笑つてゐる唇だけが、紅く見えた。

「眼鏡をどこへやつたの？」

「どこへやつたか私知らない。」

「返しておくれ！」

「いや！ 返してあげない。」

と、宮子はいたづらくした眼で、啓三郎の顔を見やつてから、その眼を自分の手に移して、

「いやな啓さん！ 泣いてゐたのね。居睡をしてゐながら泣いてゐたんだわ！ 私の手に涙がついちやつたわ！」

二

啓三郎は、宮子から返して貰つた眼鏡をかけると、てれ臭さうにばち／＼と瞬をした。

「啓さん。」

「何です？」

「あんだ、まだ考へてゐるの？」

「何も——何も考へてなんかもせんよ。」

「嘘！ 考へて、夢を見て、泣いて——ほ、ほ、ほ！」

宮子は、紅い唇で笑つた。宮子はほつそりとした身體付の、しなくとした身のこなしの、跳ね返るやうな輕快さと、からみつくやうな媚態とを併せ持つた娘であつた。ふさ／＼とした鬘髪を、や／＼廣い額に振り分けて、長く引いた肩、濃く入れた頬紅、項も細く、頤も薄く、一體に薄手でたとへば押繪めいた感じがする。それだけに、年齢

も實際の二十歳よりは、一つも二つも若く見えた。——彼女が、啓三郎の母の妹の娘で、つまり啓三郎とは従妹になつてゐた。早くから両親に別れ、もう十年も前から、伯母の手許に引取られて、この家に育つたので、女學校では萬千子と同級であつた。

「啓さん！ 散歩にでも出かけない？」

宮子は、啓三郎のかけてゐる揺椅子のよりかゝりに手をかけていつた。

「あゝ。」

啓三郎は氣の無い返事をした。

「家にばかり引つ込んでゐるから餘計くさくとして考へ込んぢまふのよ。——伯母さまも心配してらつしやるのよ。少し引つ張り出して氣晴しをさせてあげておくれって、私、伯母様に頼まれたのよ。ねえ、久振りで銀座の方へでも出かけて御覽にならない？」

「あゝ。」

「でなきや、H座へでも行つて活動を見ませうか？ 兎に角お出かけになれば少しは氣が變つてよ。」

「あゝ。」

啓三郎の返事は相變らず煮え切らなかつた。

「ね、銀座でもしてゐるうちに、もしかしたら、ばつたりあの人に逢ふつてな事にもならないとは限らないわ。」

「逢ふ？」

啓三郎は、物に打たれたやうに、はつとした眼付で宮子の眼を見返した。

「えゝ。そんな事無いとも限らないぢやないの。——あの、東京にゐる事はゐるんでせう？」

「さあ、どうかね？」

「啓さん、若しか、そんな風にしてあの人に逢つたら、あなたどうして？」

宮子は、微笑を含んだ眼で啓三郎の顔を覗き込むやうにした。

啓三郎は、ぼんやりと空を凝視めるやうにしてゐた。

「啓さん！」

「何です？」

「あなたは本當に可哀さうな方ね。」

宮子は、半の隣と、半の嘲とを以て斯ういつた。その隣と嘲とを裏付けて何ともいへない腹立たしさと悶

悶しさが、締めき渦巻いてゐるのを宮子は感じざるを得なかつた。

「さあ、出かけませうよ。あの人を探しに——。お嫁さん歸つて来い！ 逃げたお嫁さん歸つて来い！ ほ、ほ！

そんな童謡か何かでなかつたか知ら？ 二人で歌ひながら探しに出かけませうよ。」

宮子にすゝめられて、啓三郎も出かけて見る氣になつた。からかはれてゐるのだと知りながらも、さういはれると若しやといふ氣もするのだつた。

啓三郎が洋服に着換へると、宮子はネクタイを結んでやつた。

「あなたは相變らず無器用ね。」

そんな事をいひながら宮子はネクタイを結んでやつたが、その時啓三郎は、あの朝、箱根の宿で、萬千子にネクタイを結んで貰つた事を思ひ出した。これからは、かうして毎日この人にネクタイを結んで貰へるのだと思ふと、たゞその事一つにだけでも無上の幸福を感じたものだつたが——。

「さあ、結べましたわよ。何をぼんやりしてんの？」

宮子は、そのネクタイのはしを纏んでぎゅつと首をしめてやりたいやうな妙な焦立たしさを——むしろヒステリッ

クな 憤を感じたのであつた。

三

尾張町の角で自動車に乗った二人は、そこからしばらくと歩き出した。黄昏の光は、次第に数を増して来る華やかな灯影にその輝を譲りつゝあつた。人々は、晝の勤務に疲れた身体と心とをその灯影が醸し出す蠱惑的な空氣に――脂粉のほひと酒の香とジャズの響との充ちた空氣に――魅せようとしつゝあつた。

宮子は、ほつそりとした身體を黒い毛皮の外套に包み、踵の高いエナメルの靴で地を蹴るやうにして歩いた。啓三郎はそれと並んで、まるで引き摺られるやうに重い歩を運んで行つた。

宮子は何かと話しかけるのだが、啓三郎は、ろく／＼返事もしなかつた。
――さういふ啓三郎を見ると、宮子は又してもむか／＼と腹立たしくなつて来る。何かから思ひきつた嘲の言葉

を浴びせかけてやりたくなるのであつた。
――勿論、宮子は啓三郎を愛してゐるのではなかつた。啓三郎の母は、宮子を啓三郎の妻にするつもりであつた。そして、宮子もまた啓三郎との結婚を定められた運命として考へてゐた事も事實であつたが、もと／＼啓三郎を愛してゐたのではないから、啓三郎の強つての希望から、萬千子が小野寺家に迎へられる事になつても、啓三郎の母が失望したほどには宮子自身は失望しはしなかつた。一方ではむしろ、うまく災難を通れたとさへ思つてゐた。それにも拘らず啓三郎がかうして、その一人の女を、身も世もあらぬといふやうに思ひ詰めてゐるのを見ると、宮子は何か腹が立つた。自分がまるきり無視されてゐる――その事が何よりも女の誇を傷つけるのである。そこに女性としての一つの意地も動かずにはゐなかつた。自分といふ者が、この男の前にそれほど無力な存在であるかどうか？ よし、それならばと彼女は心ひそかに、この一人の男の偏執的な魂を、自分の魅力の下に見事に征服して見せる事を思つて見ず

にはゐられなかつた。萬千子の失踪を寧ろもつけの幸とも思つてゐる啓三郎の母が、宮子にした蟲のいゝ註文には、笑つて答へなかつた宮子ではあつたが――。

「啓さん。」

「何です？」

「T――ホテルのダンス・ホールへ行つて見ない？」

「御免だ。そんな處――。」

「ほ、ほ、きつとさういふだらうと思つてたわ。ぢや、兎に角御飯を食ませうか？」

「まだ食べたくない。」

「ぢや、コーヒーでも飲みませうか？」

「あゝ。」

――本當に、これは厄介なお荷物だ！と思ひながら、宮子は啓三郎と一緒に、だん／＼雑沓を加へて来る夜の人通をぬつて行つた。

「おや！」

宮子はふと立ちどまつて驚の聲をあげた。

「啓さん！ あの人――あの白いシヨールの人！」

宮子は啓三郎の肘を捉へてぐい／＼と小突くやうにしながら、今擦れ違つた一人の女の姿の方へ、うろ／＼とした啓三郎の視線を向けさせた。

「違ふ？」

啓三郎は、片足をその方へ踏み出しながら、熱心にその視線をその白いシヨールにあつめた。

「違つたわね。ほ、ほ！」
 まるで似ても似つかぬ姿だつた。啓三郎は、苦笑して、力なく歩き出した。
 「でも、かうして歩いて行けば本當に逢ふかも知れないわ。」
 「いや、駄目だよ。——それにね、あの人はもう一人ぢやアゐないだらう？」
 「ぢやア、結婚してゐるの？」
 「多分、さうだと思ふ。」
 「矢張り、前から戀人があつたんだわね？」
 「でなきやア、あゝして逃げたりしやしないだらう？」
 「さうね。——でも、もし、萬千子さんがほかの人と結婚してゐるとすりやア、いくら探したところで駄目だわね。」
 「あゝ、それはさうだ——。」
 「それでも、矢張り、啓さんには思ひ斷れないのね？」
 「……………」

四

とある喫茶店の箱席に二人は向かひ合つて掛けた。
 「私、カクテル貰はうか知ら？ あなたは——。」
 「僕は紅茶だ。」
 やがてそこに運ばれた紅茶の匙を啓三郎はものうく動かしてゐたが、ふと、眼をあげて、斜め向うの、あちらの壁際に坐つてゐる一人の男の姿を認めると、思はずはツと眼を瞠つた。

——あの男だ。あの男に違ひない！
 と、その時、向うの男も面を起してこちらを見た。その男の眼にも、物にうたれたやうな表情が動いた。
 啓三郎が、その男が、あの日の朝小田原の停車場で萬千子と立話をしてゐた男である事を認めたやうに、その男——辰夫の方でも、それが啓三郎である事を認めた。あの時の、刹那の一瞥！ しかも辰夫の心には深く啓三郎の姿が刻みつけられてゐた。
 そして、辰夫の眼は、直ぐに、こちらには背だけ見せてゐる啓三郎の伴の方に移された。萬千子——彼は、それを辰夫の心は、はげしく混乱した。
 すると、次の瞬間、不思議な事が起つた。その萬千子の夫であるべき紳士は——啓三郎は、ついと、席を立つとふら／＼と、よろめくやうな足どりでこちらへ歩み寄つて來た。ちつと、眸を据ゑたまふ。
 「失禮ですが——。」
 と、啓三郎は、子供ツぼくちよいと頭を下げてから、きつくと吃りながらいつた。
 「あなたは——あなたは——萬千子さんと、お知り合ひの方——お知り合ひの方でしたか？」
 辰夫は、ひどく驚かされて、とみには言葉も出なかつた。
 「萬千子さんは、どうしました？ あなたは——御存じないでせうか？」
 「萬千子さんが——どうした？ と仰有るんですか？」
 辰夫は、辛うじてこれだけいつた。何といふ不思議な問ひだ？ 萬千子さんは——と、辰夫は、啓三郎の同伴者の方へ眼をやつた。と、立ちあがつて、慌てた眼付で、こちらを見てゐる宮子の眼と、その眼が合つた。それが萬千子でなかつた事で、辰夫は再び驚かされた。

「ええ。あなたは——あなたは御存じでせう？」
 いくらか悲を含みながら、熱心に凝視めた眼で、啓三郎はいつた。
 「萬千子さんは、あなたと結婚したのぢやありませんか？」
 「いゝえ。萬千子さんは——萬千子さんは——」
 「ぢやア、あなたの處へは戻らなかつたんですか？」
 「さうです！ あの人は、あの人の實家の方へも戻らないのです。行方が知れないのです。」
 「行方が知れない？」
 「あなたは知つてゐるでせう？」
 「いゝえ。僕は知りませんよ。ぢやア——」
 「ぢやア、矢張り戻らなかつたのか？ 辰夫は頭の芯があんと鳴るやうな氣がした。」
 「本當に——本當にあなたは知らないんですか？」
 「知らないんです。」
 「さうですか？——知らないんですか？」
 啓三郎は未練らしくいふのであつた。その眼は相變らず、ぢつと相手を凝視めたまふ。
 「まあ、啓さん。」
 と、傍へ寄つて來た宮子が、それを押しとめるやうにして、
 「そんなにしつこくお訊きするもんぢやありませんわ。失禮ぢやアないの？」
 「だが、あの方は——」
 啓三郎は、宮子を哀願的な眼で振り返りながら、呟くやうにいつた。

「だつて御存じないといふものを——」
 宮子は媚を含んだ華やかな笑を、辰夫の方へ投げかけて、
 「本當に失禮致しました。どうぞお氣にさへられないで——」
 宮子は、啓三郎をしよびき寄せるやうに、自分達の席に連れかへつて、
 「啓さん！ どうしたといふのよ？」
 啓三郎を睨むやうにした。

五

「どうしたの？ あんた！」
 宮子は、唇を引歪めて詰つた。啓三郎は、自分の席に逃げ歸ると兩手で頭を抱へるやうにして、テーブルに顔を伏せてしまつた。
 「あの人、知つてる人なの？」
 宮子は、上眼でちらと辰夫の方を見やつた。ぢつとこちらを凝視めてゐる辰夫の眼にぶつかると、慌てゝもう一度會釋した。
 「ねえ。あの人、萬千子さんを知つてる人なの？」
 宮子は、啓三郎の耳元に唇をさし寄せていつた。
 「さうだよ。——だが、間違つてゐたんだ。」
 啓三郎は顔を伏せたまふ、低く呻くやうにいつた。
 「本當に見つともないわ。いきなり、あんな突飛なことをなすつて——」

宮子は、赧らめた顔に周囲の視線を感じながら嗜めるやうにいつた。
 啓三郎も自分の無様過ぎた行動を考へて、恥のために眞赤になつてゐた。——事實、啓三郎は辰夫の顔を見ると、前後を忘れてしまつたのである。啓三郎は勿論、辰夫と萬千子との關係については知るところがなかつた。が、あの停車場で見た時は何とも思はなかつたのであるが、後になつてから不思議な直覺で、その男がもしや萬千子の戀人か何かで、萬千子の失踪とその男の存在との間にはある連絡があるやうに感じられて來てゐたのであつた。だから、辰夫の顔を見ると、いきなり、萬千子の所在を訊いて見ずにはゐられなかつたのであつた。
 「ああ、出ませうよ。」
 「あゝ。」

啓三郎は、宮子に促されて立ちあがつた。
 さうして、二人が扉の外へ出て行く後姿に、辰夫はちつとその眸を凝らしてゐた。

——さうではなかつたのか？ 萬千子は、矢張あの男の許に戻つてゐるのではなかつたのか？

辰夫は今の今まで、萬千子が、彼女自身の幸福のために、婚家に戻つてゐるだらうとばかり思つてゐた。あゝして自分の許にやつて來たのだが、自分が容れてやらなかつた以上、矢張、結婚した男の許へ歸る外はなからう？ 否、口では何といはうとも、結局そこに落着くにきまつてゐる。みんな一時の氣紛れなのだ。一時の情熱の發作に過ぎないのだ。今頃は小野寺家の新夫人にをさまつて、次第にその境遇に馴れつゝあるに違ひない——さう彼は思つてゐた。それゆゑ、啓三郎の顔を見た時、そして啓三郎に同伴者のあるのを認めた時、直ぐにそれを萬千子だと思つた。だが、さうではなかつた！ 萬千子は矢張結婚生活へは戻らなかつたのだ。

では、何處へ行つたのだ？
 あの男はそれを自分に訊いた。あの男が自分に訊くくらゐだから實家の方へ歸らないといふのも本當であらう。

ではどこへ行つたのだ？

辰夫は、萬千子が自分を訪ねて來た朝の事を思ひ浮べた。平安な結婚生活に歸るやうにと、吳々もすゝめた自分の言葉に對して萬千子のいつた言葉を思ひ浮べた。
 「私の事は私の考へで致します。どうぞ御心配なく。」

きつぱりとさういつた萬千子の言葉——。

それほどの決心で、あゝして自分を訪ねて來た萬千子であつたといふ事が、今更のやうに辰夫の胸に徹へた。

さうだ！ あの娘は、そんな一時の氣紛れや興奮で行動するやうな輕はずみな娘ではなかつた筈だ。一旦逃げ去つたところへ、再びおめくと歸つて行く事の出来るほど、誇の高くない娘でもなかつた筈だ。あの時、なぜ、それが分らなかつたのか？

激しい悔が、彼の心臓をかき裂きはじめた。

それから一時間ばかりの後、辰夫は、ほかの、もう一軒のカツフェのドアから、よろめく足どりで出て來た。身體だけは酔つてゐた。意識はちつとも酔つてはゐなかつた。

彼は、苦しげな息をほつと夜の空に吐きかけるやうにした。そして心の中で繰返した。
 ——萬千子よ。どこにゐるのだ？

六

「美イちゃん。水をくれ給へ。」

辰夫は、そこにあがつて來た美代子を見ると斯ういつた。辰夫は家に歸ると、ごろりと疊の上に仰向けに寝轉んでしまつた。めちやくちやに飲んだ酒で、彼はひどく酔つてゐた。しかし酔つてゐるのは、身體だけで、頭は益々牙え

返つてゐた。

美代子は、コップを盆にのせて運んで来た。

辰夫は、寝たまゝ、ごくりと一口飲んだ。

「お酔ひになつたのね？」

「うん。」

「お酒があがつたのね？」

美代子は眉をひそめて、いくらか詰るやうにいつた。

「飲んだから酔つたのさ。は、は！」

と、辰夫は笑つて、

「美いちゃんは、お酒飲は嫌ひだつたね。」

「えゝ！ 私大嫌ひ、田代の兄さんもお酒を飲むから私嫌ひよ。」

「美いちゃんは、田代君が嫌ひか？」

「嫌ひぢやないけど、お酒を飲むから嫌ひ！」

「ぢや、僕もあまり酒を飲むと、美いちゃんに嫌はれてしまふかな？ は、は！」

「お飲みにならない方がいゝのよ。——でも、どうして男の人ッて、お酒なんか飲むんでせうね。田代の兄さんだつて、前にはちつとも飲まなかつただけど——。」

と、美代子は獨語めく調子になつて、

「田代の兄さんがお酒を飲みはじめたのは、あの大怪我で、片腕を無くしてからだつたわ。」

「田代君も苦しい男だな。」

「お酒を飲むやうになると、どうしても亂暴になるわね。田代の兄さんはお酒を飲み出してから人間が變つたわ。」

「でも、美いちゃんを愛してる事だけは、昔も今も變らないだらう？——本當に田代君は美いちゃん思ひだな。」

「えゝ。それは親切ないゝ人だわ。」

美代子はうるんだやうな眼付で空を凝視ながらいつた。

辰夫も、ちつと天井を凝視するやうにして、しばらくの間押し黙つてゐた。

今夜も戸外には木枯がうなつてゐた。近くの濠端を通る電車が、その風のうなりに交つて、難破船の人々が救を呼ぶ悲鳴か何かのやうな響を立てゝゐた。

「美いちゃん。もし田代君が片腕をなくしたりなんかしなかつたら、美いちゃんは田代君のお嫁さんになるつもりだつたかい？」

しばらくの沈黙の後に辰夫はふとそんな事を問ひかけた。

「あら、そんな事——。」

「でも、田代君はいつてゐたぜ——。」

「そんな事嘘よ。私、田代の兄さんと、そんな、そんな事思つてみた事もないのよ。」

「君は思つてみた事もないかも知れないが、田代君の方ぢやそのつもりでゐたらう？」

「違ふわ。田代の兄さんは、たゞ妹のやうに私を可愛がつてくれただけなんだわ。」

「美いちゃんは、ぢや、矢張り赤城君の方が好きだつたんだな？」

「あら、そんな事——。」

「今よりも、もつと強い調子で美代子は繰返した。

「そんな事何もかくさないでもいゝよ。」

辰夫はものうげな言葉つきでいつた。
 「猪之さんの事だつて、私、何も——別に——。」
 「僕は、赤城君にすまないやうな気がするよ。」
 「猪之さん、石田さんに何かいつて——。」
 「何もいやアしない。あの男はあれで気が弱い男だからな。だが、心の中ぢや随分僕を憎んでゐるだらうよ。」
 「そんなこと——。」
 「いや、どんなに憎まれても仕方がないんだよ。」
 「だつて——。」
 「赤城君、この頃どうしてゐるの？ こゝへはちつとも來ないやうだね？」
 「えゝ。病氣で寝てるつて事ですの。」
 美代子は悲しげにいつた。

七

「寝てるゐる？ ひどく悪いの？」
 「そんなに悪くないんでせう？」
 美代子は不安さうにいつた。
 「お見舞に行つてやらないの？」
 「だつて——。」
 「薄情だな。」

「私が——私が薄情つて仰有るの？」
 美代子は氣色ばみ、眼に涙を浮べて迫るやうにいつた。その思ひがけない氣勢の鋭さに壓されて、辰夫はそのまゝ黙つてしまつた。
 「薄情なのは——。」
 と、少し間を隔ててから美代子がいつた。
 「石田さん、あなたよ。」
 「僕が、どうして薄情かね？」
 「どうしてつて——あなたはこの頃、何だか變だわ。何か考へ事ばかりしてゐらして、私の事なんか——私の事なんか——。」
 口下手なこの娘は、思ふ事が自由に言葉にならなかつた。だが、美代子のいはうとする事が何であるかは辰夫にもはつきり分つた。
 「——さうだ。この娘は自分の愛情に不安を感じ初めてゐるのだ！
 辰夫は、美代子を愛してゐる。（愛して）ゐる以上に、（愛さうとして）ゐる。辰夫は、すべてをなげうつてプロレタリアの階級に投じた男であつた。プロレタリア・イデオロギーの把握——これは辰夫ばかりでなく、辰夫のやうにブルジョア出のマルキシストである青年に共通のモットウであつた。辰夫がプロレタリアの娘を愛する事によつて、そのプロレタリア・イデオロギーの把握を確實なものにしようとして考へたとしても、誰がその考へを嗤ふ事が出来たらう？ そこに時代に生きる者の深い惱があつたのだ。彼は、その古い戀人を忘れるために美代子を愛したのだ。同時に一つの思想によつて美代子を愛したのだ。美代子は辰夫にとつて單なる女性ではなかつた。女性の形をとつた一つの思想であり、精神であるといつてもよかつた。」

だが、果して彼は美代子を愛し得たか？ 彼は白状しなければならぬ。美代子を抱く腕の中に、常にもう一つの幻を抱いてゐたことを。あのブルジョア娘の、古い戀人の、萬千子の幻を抱いてゐたことを。

それも、今夜、ある青年紳士と逢ふまでは、萬千子がすでに結婚生活に安んじてゐるものとばかり思つてゐた。だから、すべて皆過去のものとして考へてゐた。——だが、萬千子は結婚してはゐないと知つた今、辰夫は今更のやうに、燃え立ち騒ぎ立つものを、その胸に感じざるを得ないのであつた。

辰夫は、仰向に寝ころんで、ちつと天井を眺めてゐたが、その眼はいつの間にか壁上の小さい掛額の面に移されてゐた。それはカアル・マルクスの肖像畫であつた。髪の色に髻の黒さの目立つ温顔が、うすい電燈の光に浮んでゐる。そして、思ひなしか、その口許にあはれむやうな笑をたゞよはしてゐる。「どうしたのだ。わしの小さい弟子よ。」とでもいつてゐるやうに見える。

——その肖像畫の裏に、一葉の寫眞がはさまれてゐる筈だつた。それは萬千子の寫眞だつた。運動服を着てすらりと立つた十七歳の萬千子が、そこにはゑんである筈だつた。

白髪黒髻の革命的思想家の顔が明眸の少女の顔と重なり合つて、不思議な映像を彼の眼に描き出した。「何を——何を考へてゐらつしやるのよ。」

叫ぶやうな聲と一緒に、柔かい美代子の手が彼の肩をゆすつた。

「あなたは——あなたは、きつと後悔してゐるのよ。」

美代子は、涙聲でいふと、袂を顔に押しあてゝ泣き出した。

「は、は、馬鹿な——。」

と、辰夫は起きあがつて、

「なぜ泣くんさい？ え、美イちゃんもこの頃すこしヒステリイを起してゐるんだな。」

さういひながら、彼は美代子を抱き寄せようとしたが、美代子はかぶりを振つて拒んだ。そこへ案内もなく、庄作があがつて來た。

「何だ？ どうしてゐるんだ？」

庄作は突つ立つたまま、その光景を眺め廻すやうにして、

「は、は！ 痴話喧嘩をおツはじめたんだな。」

例の、やゝ悲調を帯びたやうな腹れた聲をあげて、庄作は笑つた。

一 彷徨

「だつて、伯母さま。」
宮子は伯母の顔を見ながら、笑止らしい表情をした。
「それはね、私のいふ事はあまり身勝手なひ分かも知れませんがね。お前の幸福のためにだつて——ね、さうぢやアありませんか。」

啓三郎の母の照子夫人は、五十を過ぎてどこかその前身を思はせるものを、何となく玄人染た様子にのこしてゐた。彼女はさういつて見て、あまりに押付がましい口吻に気が付いたかして、
「勿論、啓三郎はあんな男だし——お前の氣には入るまいけどね。」
と、今度は少し厭味らしくいひ添へた。

「どういたしましたして、伯母様。」
宮子は冗談とも眞面目ともつかぬ言葉で、
「私としちや、喜んでお身代りの役を勤めるつもりでゐるんですけどね。でも、啓さんの方でお氣に入らないものは仕方がないぢやない？」

「あれはお前子供のやうな男だもの。持ちかけよう次第でどうにでもなる筈ですよ。」
「子供のやうに一本氣で、だから強情で、思ひ込んだら挺子でも動かさないツて人なのよ。口惜しいけど仕方がないわ。——私初めツからすつかり嫌はれちやつてるんですもの。」

「そんな事いつて、案外意氣地がないね、お前も——。」
「ええ。私はたゞのお轉變娘よ。そんなすごい腕前なんかないの。——伯母様、教へて頂戴な。どんな工合に持ちかけたらいふの？」

宮子は笑ひながらいつた。
「お前は私を馬鹿にしてるんだね。」
照子夫人は不機嫌な顔付をした。

「あら、馬鹿にしてるなんて——。」
「この頃は、よく外出するやうだね？」
「ええ。毎日お出掛けよ。屹度、あの人を探し出すおつもりなんでせう？」

「どうしてゐるのかね？ あの女——。」
照子夫人は、憎悪を籠めて、吐き出すやうにいつた。
「何でも、職業婦人か何かになつてゐるツて事よ。電車の中で見掛けた事があるつて、お友達の人がいつてゐましたわ。」

「へえ、職業婦人にね。實家の方があんな風になつちや、さうでもする外ないだらうからね。尤も、實家がどうなつたか知らずにあるのかも知れないけれどね。」

照子夫人は、さげすみきつた口吻で、
「矢張男があつたツて事だね？」

「もちろんでせう？」
「男と一緒にゐるのだらうかね？」

「さあ、どうでせうか？——さうでもないらしいのよ。」
 宮子はあの時、銀座のカツフェで逢つた男の事を思ひ出しながらいつた。
 「本當に啓三郎も、何といふ男だらうね？ そんな女をまあ——。」
 と、しばらくの沈黙の後照子夫人は、深い嘆息と共に斯ういつたが、
 「啓三郎は、今日も出掛けたやうだね？」

「ええ。うちにはみらつしやらないやうね。」

小野寺家の、茶の間で、照子夫人と宮子とがこんな會話をしてゐる頃、噂の主の啓三郎は、黄昏近い銀座の街を、夢遊病者のやうな足どりでもらり／＼と歩いてゐた。宮子に誘はれて三四度その邊に散歩に出てから、啓三郎は籠居の習慣を破られた。彼はよく外出した。別に何處といふ當もなかつたが、足はおのづから銀座の方へ向いて行つた。この廣袤幾里に亘る廣い／＼人間の海、その中で、寄る波引く波渦巻く波の最も激しく揉み合ふところ。あらゆる機會、あらゆる偶然、あらゆる出來事の、無限の可能をそこに潜めてゐるところ——啓三郎の歩がそこに向けられるのに不思議はなかつた。

啓三郎は、黄昏から夜にかけての銀座の街を、人波に揉まれながら、不自由な片脚を曳きずるやうにして當てもなくさまよひ歩いた。しかして、歩み疲れては、見つけ次第に、カツフェなどに寄り、一杯の紅茶か、稀に一盞のウイスキーかに咽喉をうるほして、溜息をつきながら歸つて來る——これが、この頃、殆ど彼の日課となつてゐた。

二

——啓三郎は重い憂愁にうなだれながら、ものうい歩を鋪道に刻んでゐた。

萬千子に逢ふことが、所詮あだな望ならば、せめてあの男にもう一度逢ひたいと啓三郎は思つた。あの會てカツ

エで逢つた男——その男に逢つたら、何かの手が／＼りが掴めるかも知れぬといふ氣がした。で、その同じカツフェへ二度ならずはひつて見たが、勿論その男がいつもそこに來てゐるわけではなかつた。
 歸らう！

竹川町あたりまで歩いて、もう一度四丁目の角まで引き返した時、啓三郎はかう呟やいた。

そして、タキシードを拾ふために、停留所の雑沓から少し離れてぼんやりと立つてゐた時であつた。啓三郎の前を、黒いマントをきた一人の少年が歩み過ぎた。その、鼻の高い、きり／＼と口許のしまつた横顔を眼にとめると、啓三郎は想はず、

「千尋君！」

と呼びかけた。

少年は、萬千子の弟の千尋だつた。千尋はびつくりしたやうに振り返つたが、急にはにかんだ顔付になつてちよいと頭を下げた。

「しばらくでしたね。」

啓三郎は歩み寄りながらなつかしげにいつた。

「ええ。」

千尋は困惑した表情でもぢ／＼としてゐたが、もう一度べこりと頭を下げると、そのまゝ歩み過ぎようとした。

「まあ——待つてくれ給へ。」

啓三郎はあわて／＼引き留めて、

「お父さん、亡くなられたさうですね。あと、随分たいへんでせう？」

「ええ。」

千尋は、冷やかな無表情な顔でいつた。千尋の父は、一月程前に二度目の脳溢血でたうとう倒れてしまった。それ以前に横村家は破産の悲運に會してゐた。主人の死と共に、一家は離散し、あの加賀町の邸も、空家になつて債權者の手に移つてゐた。

「君は今どこにゐます？」
「中野の方にあるんです。」
「御親戚ですか？」

「いえ。友達の家にあるんです。」

千尋は機械的に答へた。初め千尋は叔母の家に引きとられたが何となくのづらい氣がして、半月ばかりでそこを出ると、彼の師事してゐるT畫伯の畫塾で知り合つた年上の友人の男世帯へ、身を寄せてゐるのであつた。學校も、退學した。千尋もまた働いて食はねばならぬ生活へ追ひ込まれたのであつた。

「姉さんからは——萬千子さんから、矢張り音信はないんですか？」

「ええ。ないんです。」

「姉さんはお父さんがお亡くなりになつた事知らないでせうか？」

「多分知らないでせう。」

「さうですか？ ぢやア、どこにゐらつしやるか分らないんですね？」

啓三郎は繰返した。

「ええ。分らないんです。」

千尋は、さすがに氣の毒さうな表情をした。

「君は——君は姉さんを探さうとはしないんですか？」

「ええ。僕は、姉をなるべく自由にさせて置きたいんですよ。」
千尋は、啓三郎の顔をまともに凝視めながらきつぱりといつた。
「自由に——？」

「ええ。姉だつて生きてきたかつたんです。本當の自分の生活を生きて見たかつたんです。父なんか、親不孝だの何だのと姉を悪者のやうにいひましたが、僕は、父の方が間違つてゐると思ひますよ。」

千尋は、強い調子でさういふと、何かいひたげにしてゐる啓三郎を尻目にかけるやうにして、
「ぢや、失敬します。」

さういひ棄てると、さつさと歩み去つた。その若々しい力に充みた潑刺とした後姿を、啓三郎はぼんやりと見送つてゐた。

謀 叛 人

門はびたりと鎖されてゐた。石塀が暗に仄白く、塀越の植込の梢が、暗い空にざはくと揺れてゐた。通に面した洋館の二階からも、勿論、灯影一つ見えなかつた。

その二階が父の應接室だつた。その肘椅子に肥つた身體をうづめて、元氣よく客と話してゐる父の姿が思ひ浮べられた。

—その父も死んだのか？

小野寺家への嫁入について、父から色々話して聞かされたのもその應接間であつた。それまでの高壓的な態度をがらりと變へて、實はかくくの家の事情なのだから、—とむしろ哀願的な調子でこまかに語つた時父の眼には涙があつた。

「わしだつて子どもの自由を尊重することは知つてゐる。自分の便宜のために娘を犠牲にしようなどとは夢更思つちやアをらんのだがな。」

さういつた父の言葉も思ひ出される。

萬千子は冷たい門の扉に顔をすりつけるやうにして泣いた。

萬千子は今日、もと使つてゐた女中に逢つてその口からも二月も前に死んだといふ父の死をはじめて聞いたのであつた。そして、驚いて来て見れば、家はもう空邸になつてゐる。家の滅び、父の死—みんな自分が招いたことなのだ。父は腦溢血で斃れたのだといふが、それが自殺にも等しいものであることを、萬千子は思はずにはゐられなかつた。

つた。

「済みません、お父様。」

萬千子は、扉に頬をすりつけて泣きながらかう心の中でいつた。

だが、父の死んだ後、母はどうしたのだ？ 千尋はどうしたのだ？

女中など随分澤山使つてゐたが、家族は自分を入れて四人だけだつた。その中で、母は、五年前から後入にはいつて来たばかりの人で、こんな場合にはうまく身を退く術も心得てゐる人だつた。だが、千尋は—まだ中學も出てゐない千尋はどうしたのか？

萬千子は小石川の叔母のもとへ行つて、その後の事を詳しく訊かうと思つた。萬千子は、門から離れて歩き出した。荒い夜風が吹いてゐた。萬千子はショールに顔をうづめ、うつむき勝の歩を運んだ。

ふと、ピアノの音が耳にはひつた。曲は何か分らなかつたが、優雅な曲節が、大きな邸の奥の方から、斷片的に、かすかに聞えて来るのであつた。—それが、萬千子に半年前までの娘時代の、静かななごやかな生活を思ひ出させた。たつた半年、いや、半年足らずの間に、どんなに遠くさうした生活から離れて来たことか？ どんなに多くのものを振棄て、そして踏越えて来たことか？

闘つて生きる者に、そんなセンチメンタルな涙は禁物だと思ひながらも、萬千子は又しても弱々しく涙ぐまれて来るのであつた。

萬千子が小石川の林町の叔母の家の玄関に立つたのは、それから三十分経つてからであつた。叔母は、萬千子達の死んだ母と、二人姉妹の妹で、その夫は私立大學の生物學の教授であつた。この東京での榎村家の親戚といへば殆どこの一軒しかなかつたが、叔父は學者によくある非常に非社交的な變屈な人であり、叔母の方も、どちらかといへば、かたくな、その上ひがみの強い女で、姉なる萬千子達の母とあまり仲が好い方ではなかつた。まして、萬千

子達の母が死んでから、榎村家との間はひどく疎遠になつてゐて、叔母とはいひ條、世間の叔母らしい愛情を萬千子はじめ持つ事が出来なかつた。さういふ叔母をこんな場合、こんな状態に於いて訪ねるのは随分つらかつた。

「おや。」

出迎へた叔母は、灯の届かぬ玄關の薄明に、萬千子の姿を見出すと、ひどくびつくりしたやうだが、すぐにさりげなくとりすましながら、

「萬千子さんですか？」

案の通り、冷たい言葉だつた。そして、何といつていゝか分らず、やゝ、もぢくしてゐる萬千子を、外々しい眼付で、何か不思議な人間をでも見るやうに、じろり／＼と見廻してから、

「まあ、お上り。そこぢやア話が出来ませんから。」

二

それから又二三分の後、萬千子が叔母の家の門を出た時は、萬千子の頬には更に新しい涙が流れてゐた。

「よくまあ、あんな大それた眞似が出来たもんだねえ。本當に私あきれた——」

じろ／＼と萬千子の顔を見つめながら、叔母の先づいつた言葉はこれだつた。叔母は、萬千子の失踪によつて引き起された騒とその後の兩家の間の紛紜とを、一通り語つてから、萬千子の父が、どんなに苦しみ悶えたかを話した。

「あの場合、あんな事をすればあとでどうなるか位は、お利口な萬千子さんだもの、分り過ぎる程分つてゐたんでせう？ 何しろ先方の親達はかん／＼になつて怒つて来る。あの負け嫌ひな人が、それこそ七重の蔭を八重にしてあやまつたのだよ。病氣になつたのも勿論そのためさ、何しろ一睡もしないやうな夜が十日も二十日も續いたのだからね。叔父さんなどもいつてゐた。義兄さんはつまり萬千子さんに殺されたやうなもんだつて。萬千子さんは怖ろしい娘だ。」

親殺もおんなじなんだつて。」

そんなひどい言葉をも萬千子は黙つて聽いてゐなければならなかつた。——事實、それに違ひないのだつた。

「萬千子！ 不孝者！ 死ぬまでさういつてゐましたよ。まはらない舌で、さう繰返し繰返しね。あの人は、死ぬまで萬千子さんを恨んでゐたんだよ。」

ねつちりとした調子でいふ叔母の言葉は、鋭い刃となつて萬千子の心臓を刺すのであつた。

「そんなにしてまでも、あれかねえ。好きな男の傍には行きたいものかねえ。親兄弟を犠牲にしてもいゝほど戀とやらは大事なものがねえ。私のやうな昔者は驚かされることばかりだよ。」

叔母はつめたい嘲を交へていつた。親兄弟を犠牲にして——事實さうに違ひなかつた。萬千子自身は、唯、自分が犠牲になりたくないと思つたばかりなのに——。

「一體、萬千子さんは今何うしてゐるの？ その男のひとと、ぢやア一緒になつてゐるんだね？」

「いゝえ、叔母さん。」

萬千子はさうではないといつたが、叔母は信じないらしかつた。

「それで、叔母さん、千尋さんや母さんはどうしましたの？」

「關子さんは大阪に身があるとかでその方へ歸つてゐるんですよ。もう來やしないだらう。あの人も現金な人だからね。千尋さんも妙な子さ。事情がかうなつた以上、うちなんかの暮しぢや一人口だつて容易な事ぢやないけど外にどこつて頼るところもないんだからせめて中學卒業迄はうちで面倒を見て上げようといふ事になつたんだがね。半月もたないうちに、叔父さんと喧嘩してふいと出て行つてしまつたよ。何でも繪の方の友達の處へ行つてるとかつて事だけれど、出て行つてからハガキ一枚よこさないんですよ。叔父さんは、姉も姉なら弟も弟だとあきれてゐます。實際、あの子も段々不良になつて行くやうですよ。」

叔母は吐き棄てるやうにいふのであつた。
 「ぢや、千尋さんは、今どこにゐるか分りませんか?」
 「今話したやうなわけね。出て行つたきりハガキ一枚よこさないんだからね。」
 「まあ、さうでございますか?」
 萬千子は嘆息した。
 「萬千子さんは、今どこにゐるのかね?」
 「私四谷の方にあるんでございます。」
 「水入らずで、さぞ暢氣な事でせうね?」
 叔母は鋭い皮肉な調子でいつた。
 「いゝえ。叔母さん。私一人でをりますのよ。」
 「一人で?」
 「えゝ。」
 「それは本當ですか? でも、妙ですね。」
 叔母はなほ疑を解かなかつた。
 「本當に一人でをりますのよ。」
 「ほ、ほ! ぢやア、もう喧嘩別れでもしてしまつたんですか?」
 あまり痛い叔母の言葉を、萬千子は、今、寒い風の中を歩きながら繰返して見たのであつた。

三

たゞ自分が犠牲になりたくないと思つたばかりだつた。しかも、その結果は反對にいかに多くのものを犠牲にしな
 ければならなかつたか? 悶死した父、家を失つた弟、みんな自分のための犠牲なのだ。
 不孝者と罵りながら、死んで行つたといふ父の怒が強く萬千子の胸にこたへた。――本當に何といふ不孝者であら
 う?
 萬千子の顔には熱い涙が亂れ落ちた。人影もない横町の暗闇を萬千子は泣きながら歩いた。何かに躓いて思はずよ
 ろよろと倒れかゝつた。萬千子はそのまゝ大地に身を打ちつけ、思ふさま號泣したい衝動から、辛うじて自ら支へる
 事が出来た。
 が、暗い横町から明るい通に出た時、萬千子の顔の涙は綺麗にぬぐはれてゐた。
 「――だつて仕方がないわ!」
 彼女はかう心の中でいつた。
 「屍を踏み越えて――この言葉は文字通り私の今の場合なのだわ! 屍を踏み越えて、生きられるだけ生きて行
 かなければならぬわ!」
 父の命を犠牲として獲たこの自由。父の血を以てあがなつたこの自由。この高價な自由を決して無駄にしてはなら
 ないのだ。
 (泣いてゐる時ではないわ! 勇氣を振起して強く雄々しく生きて行くのだわ!)
 彼女は、かういつてみづからはげました。そして、一足ごとに力を入れて歩き出した。
 だが、その歩が又次第に重くものうくなつて行くのを彼女は意識した。
 心の中にがらんと穴のあいたやうな、妙な空虚の感じ――その感じを彼女はどうすることも出来なかつた。
 この自由。だが、この自由の中に一體何があるといふのだ?

彼女は衷心無限の寂寥を感じずにはゐられなかつた。何ものをも待たない、何ものからも待たれない絶對に自由な生活。彼女は、それがどんなに頼りのない淋しい生活であるかを思はずにはゐられなかつた。だが、彼女はすぐに自分で自分のその弱々しさを叱りつけた。そんな風に感じるのは、自分の中に残つてゐる古い昔の女の氣持なのだ。そんな氣持は征服してしまはなければいけないのだ。女性もまた女性自身のために生きなければならぬ！そこに本當の生き方があるのではないか？（萬千子よ。しつかりおし！）

彼女は再びさういつて自らはげました。そして再び足踏み強く歩き出した。

しかし、彼女が、四谷見附に近いごくとした町裏の、その二階借りの住居に歸つて、火も無い火鉢のかたはらに、ぐつたりと疲れきつた身體を横坐に投げ出した時、彼女の顔には又しても涙が流れてゐた。悶死した父のこと、家出をした弟のことが、それからそれへと考へられた。

一日も早く、獨立自活の基礎を据えて、その上で改めて父のもとへ行き、自分の行動に對して許を請ふと共に、一家破滅の上は、生活上の負擔をも負うて立たうと思つてゐたのである。だが、こちらの準備の出來ないうちに、父は死に、弟は行方を晦ましてしまつた。

間に合はなかつたのだ——と思ふにつけても、萬千子はあれから三月あまりの、多難な月日を顧みずにはゐられなかつた。あれから——あの柳子のアパートから追はれてから、もう三月あまりの日が経つてゐる、その三月あまりがどんなに慘酷な試練で彼女を苦しめたか？

この世の中の生きにくさ、とりわけ、女の獨の生きにくさ——彼女は、今つくづくとそれを感じるのである。彼女は、柳子のアパートを出た日、途方にくれたあまり、神田の方の職業紹介所を訪ねて行つた事を思ひ出した。その紹介所の主任に、うさん臭い眼で散々眺め廻された末、こゝは貴女のやうなお嬢様の來るところではないといつて追ひ返された事を思ひ出した。兎も角も眠るべき屋根を求めて、とあるホテルの玄関に立つた時その事務員の變な誤解からどんなに思ひきつた侮辱の言葉を浴せかけられたかを思ひ出した。

それから——。

四

それから兎に角、かうして住むべき屋根を見出し、どうやら餬口するだけの仕事を見つけ出すまで、どんなに、憂く、辛く、苦しい思を重ねなければならなかつたか？

萬千子は二十日ばかり前から、内幸町の方或ビルディングの内にある、某商會社の事務所へ通つてゐた。そこに到着するまでに、彼女はすでに幾ヶ所となく勤め口を變へてゐた。或る處では——そこは個人經營の商會であつたが、その第一日において、初老に近いその主人の、無禮極まる申し出に脅かされた。或る處では——そこは小さな通信社であつたが、無頼漢めいた社員共の猥雑な冗談に苦しめられて、三日と辛抱が出来なかつた。新聞廣告で見つて、家庭教師を求めてゐるといふのへ行つて見ると、構だけは堂々としてゐるが子供などは一人もゐさうもない、怪しげな家があつたりして、もし、彼女にもう少し分別と思慮とが足りなかつたら、そのまゝ手もなくはまり込んでしまつたであらうやうな陥穽が、いたる所で、彼女を待つてゐた。

今度の處は、どうやら落着けさうに思はれたが、しかし、まだどうなるか分らなかつた。楽しんで働ける、そして安心して一日が過ぎせるといふやうな時と場所とが、何時になつたら、どこへ行つたら見出せるであらう？ まるきりその見當がつかないのであつた。

そして、萬千子は、ひどく疲れてゐた。頭が痛んだり、胸が苦しくなつたり、わづか四月の間に、目に見えて健康

が衰へて来た。

「今から、こんな事でどうするのか？ これから無限につよいいてゐる嶮難の道を、こんな事でどうして踏み破つて行けるか？」

「さう自ら叱つて見ても、じりりと蝕んで来るやうな健康の衰を、どうすることも出来なかつた。

女學校時分にスポーツで鍛へた身體なので、健康についてはかなり自信をもつてゐた。だが、その健康はわづか百日あまりの生活苦をすら支へるだけの力をもつてゐなかつた。

「さういへば、千尋さんはどうしてゐるのだらう？ あの人は丈夫さうに見えてもしんは弱い方で、この頃になると、毎年よく風邪をひいたものだが、今はどこで何うしてゐるのであらう？」

二人きりない姉と弟とが、二人とも、互の居場所も知らず、ちりちりばらばらになつて激しい波風にもまれるやうな成行きが、萬千子は今更のやうに悲しかつた。

そして、萬千子が千尋の行方を悲しく思ひやりながら、窓の外の木枯を聴くともなく聴き入つてゐる時だつた。階下の小母さんが、ひよいと階段の上り口から顔を出した。

「お歸りになつたんだね。つい、氣がつかずにゐたもんだから——。」

小母さんはさういふと、又階下に降りて、十能に火種を入れて持つて来た。

「あの、お留守の間にお客様でしたよ。」

小母さんは、思ひ出したやうにいつた。

「吉浦さんとか仰有いました。若い方でしたよ。」

「ええ。たしかさう仰有つてよした。お留守だと申しますと、ぢやまたもう少し経つたら來るといつてお歸りになり

ましたよ。」

「さうでございますか？」
といつたが、萬千子は、あの執拗な求愛者の事を考へるとうんざりした。住所だけはどうしてもいはずにゐただが、たうとう嗅ぎつけたと見える。

小母さんは——死んだ亭主は請負師で相當な暮をしてゐたとかいふ小母さんは、もう五十越してゐたが、江戸前でもいふのか、すつきりとした若々しい感の人であつた——萬千子の顔にあらはれた當惑さうな表情を見ると、

「でも、もうお出でなさりはしないですか？ あれから一時間も経ちますよ。」

「あの、小母さんその人が來たらゐないつて頂戴。——いゝえ、今夜ばかりでなく、いつでも——。」

「いつでも？」
小母さんは、問ひ返しながら眼で笑つた。

五

萬千子が、吉浦助と逢つたのは、つい二週間ばかり前、いつもそこで電車を降りる四谷見附の停留場であつた。萬千子はあたりまへに挨拶して別れようとしたが、吉浦は萬千子を離さなかつた。

「僕はあなたにお話したい事があるのです。どうぞ一寸何處かへ寄るなり、一緒にその邊を歩くなりして下さい。」

さういふ吉浦の眼はきらりと燃えてゐた。萬千子は體よく斷らうとしたが、それも出来なかつた。止むを得ず灯

照し頃の街を新宿の方へ向つて一緒に歩き出した。
「萬千子さん！僕は柳子と別れましたよ。」

「まあ！」

「すつかり別れたんです。もう柳子と僕とは何でもないのです。お互に絶対に自由なのです。僕は、今こそあなたに言へるのです。あの時はいたくてもいへなかつたんです。一つは僕の意気地無しにせむですが、一つは柳子とあんな工合になつてゐる以上、僕がどんなに圖々しくても、到底そんな事はいへなかつたのです。——しかし、今はいへるのです。」

吉浦はそんな風に前置きをした。熱い息吹とまじはり合つて、激しい求愛の言葉が、萬千子の耳朶を亂れ撲つた。

「だつて、そんな事困りますわ。あなたは私のお友達のお柳子さんの——」

「だから——僕は柳子とはもう何の關係もない人間になつてゐるのですよ。あなたのためならば、百人の柳子をだつて僕は棄てるでせう？」

「そんな事仰有つちや、柳子さんがお氣の毒よ。勝手ねえ、男性といふものは——」

「勝手かも知れません。しかし、それを責める事はあなたにだけは出来ない筈です。あなたが僕をこんな勝手な人間にさせたのです。柳子のことは僕だつて氣の毒ともかあいさうとも思つてゐます。ほんの一寸あなたといふ人とお親しくして頂いた事のために、僕等幾年かの戀があぶくのやうに消えてしまつたのです。」

「だつて、私何にも知らない事ですわ。」

「それはさうでせう？ しかし、あなた自身では知らないでも、すべての事があなたから起つてゐるのです。あなたにはあまりに美し過ぎるのです。そいつに一睨みされるとあらゆる人間が石に化つちまふといふ魔物の話が西洋の神話か何かにありましたね。あなたに一睨されると、あらゆる男性がみんな火になるのですよ。とりわけ僕は燃え易い性分なのです。」

——兎に角、その時は逃げるやうにして別れたのだが、その次の日から、殆ど毎日のやうに、その停留所で彼女が電車を降りるのを待ち合せてゐる男の、燃えるやうな一双の眸があつた。彼女は一つ先まで乗り越したり、一つ手

前で電車を乗せたりして辛うじてその待伏から逃れ／＼してゐたのだが、昨日また攪まへられてしまつた。そして、今夜尋て来たといふからには、たうとうこの宿をもつきとめられてしまつたのだ。もう、こゝにも居れなくなるかも知れないと思ふと、萬千子は、實際、やりきれない氣がして來るのであつた。

だが、あの吉浦のほかに、いかに多くの吉浦が、彼女を包圍してゐる事であらう？ ——萬千子はそれを知つてゐる。萬千子は、どこへ行つても、燃える眸と、喘ぐ唇と、それどころではない、もつと露骨な挑みや無禮な申し出にぶつかるのである。勿論、家にゐる頃にも、随分返事に困る男性の言葉を聞きはしたが、しかし、その頃の彼女は横村家の令嬢であつた。今、あらゆる背景をなくして、赤裸の女性として巷に出づるに及んで、いかに無遠慮に愛慾の嵐が吹きつけることぞ！ 彼女はたつた四五ヶ月の経験で、彼女に無關心でゐられる男性が、この世の中に殆ど一人もないといふ事實を知らねばならなかつた。

かうして世の中へ出て、男の中で働くためには、本當に、彼女はあまりに美し過ぎた。

——それを知つた時、彼女はむしろ自分の美しさを呪ひたい氣がした。戀するためには美しくあれ！ だが、働くためには、美しいことは却つて思ひなのだ。

「あなたのやうな美しい人が働くには、こんな處は不適當だわ。もつとほかにあるのよ。」

仲間の女事務員の一人が、やゝ嘲るやうな調子でいつた言葉が思ひ出された。

もう一度來るといひ置いたといふ吉浦は來なかつた。彼女は寢床に入つた。屋外では木枯がすすんでゐた。又しても、父の事や弟の事が思はれた。萬千子はいつまでも眠れなかつた。

明 眸 難

Tビルディングの地下室の食堂の一隅の食卓を取圍んで事務員らしい三四人が、食後の紅茶をすゝりながら盛んに話し込んでゐた。放膽な話ぶりの中にも、何となくあたりを憚るひそやかな調子があつて、こそぐるやうな笑聲が時々それに交つた。

「兎に角すばらしい代物だよ。柘植君が夢中になつてゐたあれなんかアまるでダンチだな。あゝいふのがわれ／＼の仲間に舞ひさがつて来たのかと思ふと、實際僕ア感謝するね。」

蛇の皮のやうなネクタイをつけた、オール・バックのモ・ボ型が斯ういふと、在學中は野球の選手でもあつたらしい、色の黒い、巖疊なのが、レイ・メードらしい無恰好な洋服の肩をゆすり上げるやうにして、

「感謝するツて？ いや、僕ア感謝どころか大いに迷惑だな。」

「迷惑？」

「——ぢやアないか？ だいち、氣持が落着かなくて困るよ。」

「同感だ。僕ア少し神經衰弱になつたよ。」

もう一人の、年齢に似合はず額のぬけあがつたのが、さういつて笑つた。

「意氣地のねえ事をいふな。——僕ア、ちよつと手を握つて見たぜ。」

オール・バックが得意さうにいつた。

「うそぢやアないよ。今朝エレヴェーターの内でね。冷たい手をしてやがつた。」

「あの女は手套をしてなかつたのか？」

「今朝はしてゐなかつたよ。」

「うそをつけ！——いや、島地がどんな無頼不逞の不良青年にしろ、あの女の手はさう易々と握れるもんぢやアないよ。あの女は美しいだけぢやない、一種犯し難い處女の威嚴をもつてゐる。」

色の黒いのがいつた。

「處女の威嚴だつて？ そんなものが何だい？ まあ、見てゐ給へ。」

オール・バックの島地が昂然と自信ありげにいふと、色の黒い柘植が冷笑した。

「見てゐようよ。ドオトンヌの鳥子なんかア少しちがふぜ。」

「一體どこから来るのかね。相當の家の令嬢に違ひないと思ふんだが、令嬢が職業婦人になるツてえのも變だしね。」

若禿が口を入れた。

「四谷の方だよ。四谷見附で電車を降りるんだ。」

島地がいつた。

「どうしてそれを知つてゐるのだ？」

「尾行したのさ。」

「こいつ、もうそんな事をやつてるのか？」

柘植が腹立たしげにいつた。

「駄目だよ。君達がいくら騒いだつて、あの女はどうにもなりやしないぜ。」

今まで黙つてにや／＼と笑つてゐた年嵩の一人が、この時口を開いた。

「どうしてですか？ 渥美さん。」
島地が反問した。

「どうしてつて？ あの女はもう結婚してゐるぢやアないか？」
「いや、そんな事アない。どう見たつて結婚した女ア見えませんよ。娘ですよ。處女ですよ。——あの女が結婚してゐるつてえなら、どうしてそれが分つたんです？」

「君は、あの女の無名指にはめてゐる指環に気がつかなくつたかね。」
年嵩の渥美は、ロイド眼鏡の底で笑つた。

「指環？」

「あの金の蒲鉾が、あれが、結婚指環だくらゐはとうに気がついても宜ささうな筈ぢやないか？——それに、あの様子を見給へ。何處かかう洗んだ、落着ききつたところがある。あれを見たよけでも、結婚生活をしてゐる女だぐらゐは分りさうなもんぢやないか？」

「さうか知ら？ そんな指環なんかはめてゐたか知ら？」

と、オール・バックの島地は少し悄氣て考へ込んだが、鼻の先に不逞な笑をふふんと浮べると、

「結婚して居ようとうしてゐるようそんな事ア問題ぢやアない。なあに結婚してゐるんだとすりやア、却つてその方が仕事は仕易いんだ。」

二

——こんな會話をするのは、この四人の男性達ばかりではなかつた。これはいはゞ一例だ。萬千子と同じ事務所に働いてゐる者は勿論、このビルディングに出入して、一度でも萬千子の姿を眼にした程の男性達は寄るとさはるとこ

んな風な會話をと리카はすのであつた。萬千子は躁る處の男性達の間に、一つの熱狂を惹起した。

もし萬千子の美しさに、あの柘植といふ男のいはゆる（犯し難い處女の威嚴）が伴つて居なかつたら、萬千子は一層無遠慮な襲撃に苦しまねばならなかつたであらう。たとへば白百合の花のやうな一塵の汚をも許さぬ凛とした氣品があつて、どんな勇敢な漁色家共も、たやすく手出しが出来兼ねるといふ風に見えた。それともう一つ、彼女の護身に役立つたのは、その左手の無名指の結婚指環だつた。

「あの指環を見給へ。」

「うん。蒲鉾だね。僕は處女だとばかり思つてゐたんだが——。」

そんな囁を耳にして、ひそかに微笑した事もある。兎に角、この指環は意外な働をしてくれた。萬千子は、わざと手袋を脱いで、その指環をはめた手を男共の貪慾な眼の前にかざして見せるやうにした。

近寄るな！

燦然として輝きながら、指環は、かういふ信號を男共に與へたのであつた。——萬千子は、あの、名ばかりの結婚の記念が、こんな事に役立つ事を考へて、妙に悲しい氣持がした。

だが、その信號も、必ずしも、いつも効果を奏するといふのではなかつた。

逞しい戀の獵人——彼女は絶えず、あるひは底氣味悪くきらめく情熱的な眼で、あるひはアムウラスな粘りつこい視線で、前後左右からとり圍まれてゐた。彼女の乗るエレヴェーターはいつも満員だつた。化粧室の出入りにすら、彼女は廊下の人影に氣を配らねばならなかつた。

「いや、どうも——。」

と、萬千子と机を並べてカードの整理などをしてゐる老事務員はにや／＼と笑ひながらいつた。
「牧さんの人氣は大したものですね。あんたがこゝへ通ふやうになつてから、T——ビル全體が、わつと湧いてゐま

すぜ。」
 萬千子は、牧といふ名でこゝに勤めてゐた。素性を知られないための用意だつた。
 「本當よ。」
 と、女事務員の老嬢が、白眼勝の眼を三角に尖らせていつた。
 「お綺麗な方は本當に得だわね。——だけど、それほど美しくつてゐらつしやりながら、何もこんな處で働かなくとも宜さうなものだと私なんか思ふけれどね。私が、牧さんぐらゐ美しけりやア、こんな仕事なんか一日だつてしちやゐないわ。」
 「本當よ。私だつて——。」
 と、もう一人の女事務員が合槌を打つた。

「は、は！ こんな仕事をしなけりやア何をしますかな？」
 老事務員がいつた。

「私、牧さんほど美しけりや蒲田へ行くわ。そして一躍してスターになつちやふ——。」

洋装をした若い方がいふと、老嬢の方が冷たく笑ひながら、
 「ワンサ・ガールにならいつてもなれるんでせう？」

「ワンサになるくらゐなら、女給仕になつた方がまだいゝわね。それともダンサーにでもなるかな？」

「ダンス・ホールつてもこの頃随分方々に出来たやうね。ダンサーつてお金になるのか知ら？」

「そんなにお金にはならないでせう？ でも、月給五十圓よりや少しはいゝでせう？」

「本當にやりきれないわね。でも私なんかまあこれが相當なんだらうけど、牧さんのやうなお美しい方なら、ほかにいくらでもお金になる仕事がありさうなものなのにね。」

骨に示されてゐた。
 自分達の領分を荒す闖入者に對する憤といふやうなものが——端的にいへば、嫉妬が露

——萬千子はそれを感じながら、黙つて仕事の手を續けてゐた。

——異性はうるさかつた。同性は冷かだつた。萬千子はつく／＼と生くる事の難さを感じた。

三

その日は命じられた仕事を手間取つたので、萬千子の歸りは同僚より少し遅れた。少しおそくなつたけれど、今朝の新聞の三行廣告で見た貸間を見に廻らうか知ら？ と考へながら、萬千子はエレヴェーターを降りた。今の宿ではもうあの吉浦に留守がつかひきれなくなつてゐる。宿の小母さんは、親切ないゝ小母さんなのだが、吉浦から身を隠すために、宿をかはらねばならぬ必要に迫られてゐるのであつた。

屈託深く、そんなことを考へながら、エレヴェーターを降り切つて、入口の方へ出てゆくと、
 「牧さん！」

と、そこに立つてゐた男が呼びかけた。見ると、あの蛇の皮のやうなネクタイをした島地であつた。——こゝにも一人！ 萬千子の顔は見る／＼當惑の表情で曇つた。

「遅かつたですね。」

「え。」

「牧さんのお宅はたしか四谷の方でしたね。」

「え。」

と答へてから、

「御免下さいませ。」

小腰をかよめ、シヨールの端しを押へるやうにして、停留所を眼がけて小走りに走り出さうとすると、

「一寸待つて下さい。」

モ・ボ型の若い事務員は、あわてゝ呼びとめて、

「そこまで御一緒に——僕もあの方面に行かうと思つてゐるのです。」

「でも、私急ぎますから——。」

「どうせ同じ電車に乗るのですよ。」

「でも——。」

「まあいゝぢやありませんか？ 同じ事務所に働いてゐるんですから、たまには同じ電車に乗つたつていゝでせう。」

島地はにや／＼笑ひながら追ひ纏るやうに歩き出した。

「あの私、少し寄り道がございますから、お先に失禮させて頂きます。」

「は、は！ まあそんなに逃げないでもいゝでせう？ あなたはどうもひどく警戒するんですね。」

「そんなわけぢやございませんけど——。」

萬千子は益々當惑していつた。

と、萬千子のあとから降りて来て、階段の處に立つて、ちつと二人の様子を見てゐた黒いオヴァー・コートの紳士

が、その時大膽につか／＼と萬千子の方へ歩み寄つた。そして、

「お嬢さん——あなたは横村さんのお嬢さんぢやありませんか？」

いきなり、さう呼びかけた。

萬千子は驚いて、その紳士の顔を見上げた。五十恰好の、血色よく肥つた無髯の紳士は、薄の葉のやうに切れた細

い眼に微笑を浮べて、

「私をお見覚えはありませんかな？」

いはれて見ると、あの加賀町の邸の應接間か何かで、たしか二三度見た事のある顔だつた。が、それが誰であるかは思ひ出せなかつた。

「は、は！ お見忘れなすつたかな？」

「あの、どなた様であらうしやいましたらう？」

紳士はだまつてポケットから大きな紙入を、紙入から大型の名刺を出して萬千子の手に渡した。その名刺には、東

洋製麻株式会社社長 横原幸蔵と刷出されてゐた。その名前を見ても、しかし、萬千子には、その人が何ゆゑこんな風

に親しげに自分にいひ掛けるのか分らなかつた。

「——いや、あなたの方には御記憶はないかも知れませんが、私は、あなたの御親父の横村さんとはおちかづきだつた。

仕事の方の關係で、度々、お宅をお訪ねした事もあり、あなたの御婚禮の時は、私も参列の榮を得たんで、私の方

やあなたの顔をよく覚えてゐるのですよ。は、は！」

「まあ、さやうでございますか？」

萬千子は頬のほてりを感じながらいつた。

「横村さんはお氣の毒な事でしたな。ところであなたは——。」

と、横原氏は、萬千子の様子を眺めながら、

「こんな處へ、働きにも来てをられるのですか？」

「はあ。」

と、萬千子は僅に答へた。

「——實はわたしの會社の事務所もこゝなで、ちよいくやつて来るのだが、二三日前にもちらとあなたの姿を見て、おや！と思つたのです。どうもさうらしいと思つたのだが、矢張あなただつたのですね。」

塙原氏は、細い眼でもう一度萬千子の様子を見直すやうにして、

「だが、どうして又こんな——職業婦人になどなられたのかな？」

萬千子は答へる代りに眸の伏せた。

「いや、お宅の方も本當にお氣の毒な事だつた。——あなたにもいろ／＼の事情があたりだつたらしいな。」

塙原氏はちよつと言葉を切つて、

「今どちらにをられるのかね？」

「あの、四谷の方にをるのでございます。」

「四谷なら丁度いゝ。わしは市ヶ谷へ歸るのだから、おうちの近所まで送つてさしあげよう。どうです？ わしの自動車にお乗りなさらんか？」

塙原氏は、そこに待たせてある大型のキヤデラックに眼をやつた。

「いえ、あの——。」

萬千子が拒むやうにいふと、塙原氏は、五六歩離れて、街路樹の蔭に立つたて、ふすぼるやうな眼でちつとこ

らを見つめてゐる島地を眼ですくつて、

「おつれの方ですか？」

と皮肉らしくいつた。

萬千子も思はず、島地の方を見た。島地の顔を見ると、吉浦のしつこさは又變つた、その圓々しい不良青年に對する嫌悪がぐつと胸にこみあげて來た。

「いゝえ。さうぢやございません！」

と、わざと島地に聞えるやうに萬千子はいつた。

「ぢや、よから。——さあ、お乗んなさい。」

萬千子は躊躇した。彼女の視線は、二人の男の顔をあわたしく往復した。死んだ父の知り合だといふ中老紳士の

の顔が、この場合、ひどく頼もしいものに彼女の眼に映つた。この圓々しい不良青年に鼻を明かしてやることを思

ふと、一寸愉快でもあつた。

「では隅の方拜借させていただきますわ。」

「さあ、さあ——。」

萬千子は自動車に乗つた。塙原氏はその大きな體を萬千子と並べてどしりと腰をおろした。自動車はなめらかに走

り出した。

「あゝいふ連中、随分うるさいことでせうな？」

塙原氏は匂のいゝ葉巻の煙をにやりとした笑と共に吐きながらいつた。

「え？」

「いや、あの若い男ですよ。あれは同じ事務所の者ですか？」

「はあ。」

「大變美しい女事務員がゐて、みんな大騒をやつとる——さういふ話はわしも聞いてみましたよ。だが、それがあんな

ただとは思ひがけなかつたですね。は、は！」

「まあ！」
 「實際、檳村陽之助の令嬢が、こんな處で女事務員をしてゐるなどは、誰だつて想像もつかないでせうからな。あの小野寺家の若夫人として納まつてゐるべき筈の人がですよ。は、は！ 妙な事になるものですな。」
 「でも、仕方ございませんわ。」
 萬千子は、低く、しかし、しつかりとした調子でいつた。

「いや、あなたが敢然として己の欲するところに就いた勇氣にはわしも敬服してゐる。わしはさう舊式な考をもつた男ぢやないから、あなたの行動に對して非難せうとは思はんね。新時代の女性としてはさうなくちやならんとさへ思つてゐるのですて。」

「父には、すまないと思つてゐるのでございます。」

「檳村さんはお氣の毒だつたが、成行として止むを得んで。だが、昨日まではお嬢さんのあなたが、かうして職業婦人になつて働いてをられる——實に大奮發ですな。」

「でも、働くといひましても、何にも出来はしないのでございます。」

「ところで、後楯の方は、どうしてをられるのですか？」

檳原氏も又、萬千子が一つの結婚から逃げて、別の一つの結婚生活に入つてゐるのだと推察してゐるらしかつた。

五

父の知人だといふこの中老の紳士に對しては、別段擬態の必要はないと思つたので、萬千子は正直に一人であるのだと語つた。

「ほう！」

と、檳原氏は眼を睨つて、

「ぢや、まだ獨身で——獨身で居られるのだな。さうか？ そりやア大變だ。いろ／＼の噂を聞いたので、わしは又、手鍋さげて——といふやうな事ぢやないかと思つてゐたのだがね。」

「ほ、ほ！ そんなのだと宜しうございますけど。」

と萬千子は笑つて見せた。

「だが、それぢやア大變だな。ふうむ。」

檳原氏は呻めくやうにした。

「でも、随分暢氣でございますわ。」

虚勢を張りたい氣持で、萬千子は心にもない事をいつた。

「暢氣かも知れないが、しかしどうも危険ですな。あなたのやうな美しい娘さんが、あゝした男共の中に交つて働く——それも獨身とあつちやア、こりやどうもあふなくて見て居られん。はらくしますな。——一人で、ぢやア、下宿でもして居られるのかな？」

「はあ。」

「弟さんが一人あつた筈だが、一緒に居られるのぢやないのかな？」

「はあ。弟の事も心配してゐるのでございますけれど、どこにゐるのか分らないのでございます。何分、家の方があんな風になつたものでございますから——。」

千尋の事を思ふと萬千子の胸は痛むのだった。彼女はさういつて、思はず溜息をついた。

「ぢや、弟さんどこにゐるか分らないのだね？」

「はあ。私一生懸命になつて探してゐるのでございますけど——。」

「お母さんはどうなされたのかな？」
「母は、繼母でございましたものですから——。」

「さうか。ふうむ。ちり／＼ばら／＼といふわけだね。ふうむ。」
と、塙原氏は、さもいたましげにいつた。

しばらく會話が跡絶えた。——萬千子は、軽い眩暈を感じはじめた。後頭部が空になつたやうな感じ、胸苦しく吐きさうな感が次第につつて来て、額に冷たい汗がにじんで来た。萬千子は、左手のハンケチで額をおさへて、ちつと眼を閉じた。

「どうか、しましたかな？」

塙原氏は、驚いて、蒼ざめた萬千子の顔を見やつた。

「いゝえ。何でもございませぬ。」

「急に気分でもお悪くなつたのかな？」

「いゝえ。たゞ、少し眩暈が致しますやうで——。」

「そりやア、いけませんな。」

「いゝえ。すぐによくなります。何でもございませぬ。」

「いつたが、さうして坐つてゐられぬぐらゐ苦しくなつて来た。」

「おい、川田！」

と塙原氏は運轉手に聲をかけて、

「すこし、速力をゆるめてくれ。」

「さう命じておいて、大きな身體をぎこちなく動かして自分は補助椅子の方へ移り、
「多分、腦貧血か何かだらう？ さあ、遠慮なく、そこへ横におなりなさい。」
「いゝえ。何んでもないのでございます。——すぐによくなります。本當に御迷惑おかけして——。いゝえ、あの、
よろしいでございます。」

「いや、遠慮する事はない。少し身體を横にして、ちつとしておるでなさい。」

塙原氏は、兩手をのぼして萬千子の肩にかけて、そつとそこへ寝かすやうにした。

「いゝえ。よろしいでございます。」

「いつたが、萬千子はもう我慢にも、さうして坐つてゐる事が出来なかつた。彼女の身體は斜に座褥の上にくづを
れた。」

「もう直ぐだ。わしの家へ行つて、すこしの間靜かに横になつておるでなさい。多分、腦貧血だ。——川田、もう少し
靜かにやつてくれ。」

そんな、言葉をうつゝに聞きながら、萬千子はそれを拒むだけの元氣がなかつた。

六

萬千子が漸く心地がついた時、彼女は立派な部屋の内、やはらかな夜具につままれて横たはつてゐる自分を見
出した。——彼女は慌てゝ起きあがつた。眼前がぐら／＼と暗くなつた。が、しばらく額をおさへて突伏してゐるう
ちに次第に氣分が直つて来た。彼女は枕許に脱ぎ捨てゝあつた羽織をひきよせて、坐つたまゝそれを羽織つた。——
初めて逢つた人に、飛んだ厄介になつてしまつた！ 一刻も早く歸らなければと思つてゐると、襖がすうつと明いて
十三四位のおかつばさんにした女の兒のくるりと圓い眼がのぞき込んだ。

「もう、よくおなりんなつて？」
女の兒は、無邪氣に訊いた。

「ええ、お嬢さん！」
萬千子は愛想笑をした。

「そのお酒召上るといふのよ。私、先刻もつて来てあげたのよ。」
女の兒は、枕許の銀盆の上に置かれた赤い葡萄酒の壺とコップを眼で指して、にッと笑つた。その様子が如何にも可愛らしかつた。

「ありがたう！」

その時大きな足音がして、女の兒のうしろから襖がすつと開けられ、ゆつたりと和服に着換へた埴原氏が、湯上りらしいてらくとした顔で入つて来た。

「どうです？ 御氣分癒りましたか？」

「ええ、もう大丈夫でございます。本當に飛んだお世話になりました——。」

萬千子は丁寧にお辭宜をして、立ちあがらうとしたが、埴原氏は慌てゝそれを手で押へて、

「まあ、さうしてゐらつしやい。まだ顔色が本當でない。すつかり氣分が回復するまでちつと横になつてゐられるがよいのです。」

「いゝえ、もうこれなら大丈夫でございます。」

「さうですか？ ぢやアまあこちらへいらしつてお茶でもあがつて下さい。自動車を送らせますから——。」

「いゝえ、それには及びません。私、もうこれで——。」
「まあいゝでせう？ 道子、梅やにさういつてお客様の方へお茶をもつて来ておくれ。」

いはれると女の兒はばた／＼と足音を立てゝ駆け出して行つた。
「お嬢さま、本當にお可愛らしうございますわね。」

「いや、どうも甘えツ子でね。」

埴原氏はいかにも慈愛深い父らしく細い眼で笑つた。

埴原氏の客間は二十疊もあらうかと思はれる洋室で、壁には佛蘭西の大家の新作らしい静物などが掲げられ、飾り棚には古い佛像のやうなものが置かれてゐた。大理石でたゞまれた燧爐には電熱器が赤く燃えてゐた。その前に引寄せられた緑色の腕椅子に斜に相對して、埴原氏は非常な物柔かな親切な調子で語るのであつた。——どうもああいふ仕事はあなたの身體には無理らしい。いたましい事だといふやうな事を繰返してから、

「私の事務所へ來られたら、どんな便宜でもはかつてあげるつもりだが、しかし、さうも行くまいな。——いや、仕事は兎も角、あゝして大勢の人間に交つて働く氣苦勞が、一番身體に好くないのだね。とりわけ、あなたなどは若い男性共にあゝしてわい／＼騒がれて餘計な苦勞もせにやならんて。苦勞はいゝが、わしなどの眼から見るとどうも險難でな。何しろまるで狼の中に一匹の羊を放しとくやうなものだ。は、は！」

と笑つて、

「ところで、一つあなたと相談だがね。」

さういつて持ちかけた相談といふのは、あの道子といふ一人娘のために家庭教師になつてくれまいかといふのであつた。母親が病身で寢てばかりるので、他に同胞のない道子は、精神的にひどく饑えてゐる。家庭教師として學課の面倒を見てくれると共に、あの娘の姉さんとして遊び相手になつてやつてはくれまいか？ 勿論、事務員などのそれよりもずつといゝ報酬をさしあげるつもりだから——と、埴原氏はいふのであつた。勤が骨が折れるといふのではない、一番萬千子が苦になるのは、あの多くの男共——埴原氏のいはゆる狼共——にうるさくつきまとはれる事であ

つた。その煩ひから遁れる事の出来るのは何よりだったが、しかし、塙原氏の申出を容れて一旦見棄てたブルジョア生活の寄生者になる事は、どうも萬千子は氣がすまなかつた。

七

「どうですか？ お氣が向きませんか？」
萬千子の躊躇を見ると、塙原氏は一寸意外といふ面持になつていつた。

「いゝえ。さうではございませんけど——御親切に仰有つて下さつて本當にうれいのでございますけど——」
「いや、あくまで獨でやつて行く、苟くも他の力を借りたくないといふ、あなたのお心持は分つとる。だから、わたしは何も、特別にあんたのお世話をしようといふんぢやアない。たゞちよつとした便宜をあなたのためにはかつてあげたいといふだけの事なのです。あなたは御存じないかも知れんが、わたしはあなたの御親父とは、仕事の方の關係ではあつたが、随分立ち入つたおつきあひも願つてゐたんでな。」
と、塙原氏は熱心にいひ續けた。

「しかし、わたしは何も恩惠的な氣持でこんな申し出をするのぢやないのです。あなたから若干の勞力を提供してもらひ、それに對する若干の報酬を拂ふといふだけの事で、その點あなたとしちや會社に勤めるとつまり同じ事なのだ、あゝしたうるさい誘惑の中で働くよりもその方がいくらか働き心地が宜からうと思ふのでね。」

「それはさやうでございます。本當に私、困つてゐるのでございます。」
萬千子は、あの吉浦の事や、島地といふ男の事などを思ひ浮べながらいつた。

「あなたのやうな人が、あゝした誘惑の巷に身を置いてゐるのを見ると、わたしはまつたくはらくする。——勿論立派にきりぬけて見せてはくれるだらうが、その方はまあいゝとしても、問題は健康ですよ。ね、あなたはひどく疲れ

てゐる。だから、しばらく休養するつもりで、どうですか？」

「は、ありがとうございます。」
萬千子の心は次第に動いて行つた。

「いつまでもといふのぢやない。十分な健康が回復するまで、しばらくの間そんな事にして見たらどうですか？」
「はあ。」

「さうなさい。ね、悪い事はいはん。」

「ありがとうございます。兎に角少し考へさせて下さいませ。」

「考へて御覽なさい。——直ぐにといふのぢやないのだから。ところで御氣分はどうかな？」

「えゝ、もうすつかりよくなりました。本當にとんだ御厄介になつてしまひまして——」
萬千子が立ち支度をする、塙原氏は、小間使を呼んで自動車の支度を命じた。

「いゝえ、あの電車で結構でございます。」

「は、は！ 電車だと、あのさつきの男が、停留所の先廻りをして待つてゐるかも知れませんが。」

「まあ！」

「四谷のどの邊でしたかな？」

「あの、四谷見附の停留所から二三町入つた處でございます。——でも、私、近くそこを越さうと思ひますの。」

「どうですか？ さうきめて、いつそのこと、このわしの家に来る事にしては？」

「は、ありがとうございます。」
といつたが、兎に角その事は少し考へさせてもらふといふ事にして、萬千子は塙原邸を辭した。
塙原氏の親切が萬千子は身にしみてうれしかつた。高級車のすべりのいゝ乗心地、それも久振りのものだつた。

路地の入口で自動車を降りて、運転手に禮を述べて、小走に入口の格子戸の前まで走り寄つたが、ある豫感を感じて、そつと格子戸を明けると、出て来た小母さんが、眼に警戒の色を浮べ、萬千子の前に手を振つて見せた。

「——あの人が来てゐますよ。」

小母さんは小聲でさゝやいた。

「あの吉浦さんとかいふ人——お留守だといふのにどんく二階へあがつてしまつて、私本當に困つてしまいましたよ。」

「まだゐるの？」

「ええ。二階に頭張つてゐるんですよ。けふは少しお酒を飲んでゐるらしいんですよ。——ね、もう少しその邊を歩いていらつしやいよ。そのうちに、私が何とかいつて歸してしまひますからね。」

と、小母さんはいふのであつた。

劇 場

三月も、もう末の、うす紫の夜が、街の灯の色を美しくする季節になつてゐた。濠洲の劇場は、石造建築の白い肌を壯麗に電飾して、ロシアから來朝の世界的の名を博してゐる舞踊團のはなやかな演技に、満都の人氣を煽つてゐた。

兩側の車寄には、ぎつしりと自動車が進んでゐた。その中には、某國大使館用などもまじつてゐる。特等のボックスには、孔雀のやうに盛装した外國婦人の姿も見られた。通例の興行とはいくらか客種も違つて、紳士淑女といつた側の上流の人達が比較的多かつたが、同時にまた、學生らしい若者達などもすくなくかつた。

番組の最初の一つが終つたところで、見物席を立つた人々は、色ある波となつて、廊下の方へ流れ出した。味はうより前に、壓倒されてしまふよ。」

「何よりもあの精力的なところにまゐるね。だが、あれがソビエツト・ロシアの藝術か知ら？ あゝいふものは矢張りブルジョア藝術ぢやないの知ら？」

柱の蔭にたゞずんでそんな事をいつてゐる文學青年らしいのゝそばでは、

「どうだ？ あのすばらしい肉體は？ 實に豐滿そのものだな。——あれぢや、一寸、太刀打ちはむづかしい。」

「は、は！ さすがの猛者も溜息をついたね。は、は！」

中年の紳士がそんな事をしやべり立てゝゐたりした。

「どうだね？ 面白いかね？」

「え。」

「矢張りあたり前の芝居の方が面白いだらう？」

「え。」

人々にまじつて、ゆつくりと歩きながら話してゐるのは、石田辰夫と美代子とだつた。美代子はひどく落着かない様子で、きよとくとあたりを見廻した。そのどこもかしこも燦爛と輝いてゐる建物の立派さ、そこに集まつてゐる人々の装ひの眩ゆさ——美代子は眼に觸るゝものに毎に激しい驚異を感じて、うつとりと、ぼんやりと、まるで夢の中でも歩いてゐるやうな氣がしてゐるのであつた。

辰夫が屬してゐる極左派の無産政黨は去年の夏解散を命ぜられて以來、再組織にあせつてゐるのだが、何分思ひきつた彈壓に手も足も出ないかたちで、當分絶望の状態にあつた。で、辰夫も近頃では實際運動から遠のいて翻譯などに力をそゝいでゐたのであるが、ロシアにゐるうちから手を着けてゐた大部の翻譯が五六日前にやうやく完成した。——その仕事が終わつたら、心祝にどこへでも好きな處へつれて行かうといふ前からの美代子との約束だつた。

「どこがいゝ？」

「さういふと、美代子は、

「お芝居がいゝわ。」

と答へた。——多くの娘達と同じく、美代子の憧憬もまた劇場にあつた。だが、美代子は淺草の小さい芝居小屋こそ時々覗いた事もあるが、東京名物の一つになつてゐるT劇場には未だ足を入れた事がなかつた。

「さうか？ ぢや、T劇場へつれて行つてあげよう。僕も、T劇場は久振りだ。」

——事實、辰夫自身も、こんな華やかな空氣にひたるのは幾年振りかだつた。

さうして、人波をくゞつて廊下を歩いてゐるうちに、辰夫は、久しく見棄てゝゐた故郷の土を、再び踏んで見る思ひがした。

當然、そこに彼の心によみがへつた一つの思ひ出があつた。——彼は、かつて、萬千子と共にこの劇場に來た時の事を思ひ出した。

彼が萬千子と共に、この劇場へ來た事は二回ある。一度は、ポーランドの提琴家のK氏がその妙技を揮つた夜であつた。その時は、死んだ妹の志津子も一緒であつた。音楽好きの志津子をひどく興奮させた、あの世界的名手の夜のヴァイオリンは、同時にまたやうやくゆらびき初めた二人の戀への、よき伴奏であつた。

二度目の時は、何を観、何を聴いたか？ ちつとも記憶に残つてゐない。その筈である。二人は舞臺をよそにたゞ互の顔をばかり見、互の聲をばかり聴いてゐただから。

二

その夜の萬千子が、いかに情熱的で、いかに魅力的であつたか？ そのうるみかどやく黒い眸が、内の炎を透かすやうに美しく靨らんだ頬が、まさしくそこに描き出される。そして、それからの、哀歡にあざなはれた戀の幾情景がフィルムのやうに眼の前に展開される。——もしあの状態があのままに進展して行つたら、論無く、そこに幸福な一對であり得た二人だつたのだ！

さう思ふと辰夫は、あの時あのやうに自分を驅りたてた思想が、全く一つの迷妄に過ぎなかつたやうな氣さへして來るのであつた。

いや、あの時でもまだ遅くはなかつたのだ。あの萬千子が自分に來り投じた時、なぜ自分は双手を開いて萬千子をこの胸に抱きとらなかつたのだ？

いや、今でも——今でもまだ遅くはない。萬千子は結婚してはゐないのだ。が、そこまで考へて来た時、辰夫は、自分の肩の蔭に小さく身をそばめるやうにし、おど／＼と眸を動かしてゐる美代子に気がついた。

その華やかな雰圍氣の中に置いて見る時、仕立直しの銘仙の羽織を着て、メリンスの帯を締めた美代子の姿は、あまりにもみじめなものだつた。美代子ばかりではない。さうした同伴者と共に、こんな處を歩いてゐる自分自身もまた、ひどくみじめなものに辰夫には思はれた。思ひなしか、周圍の眼が皆嘲を帯びて自分達二人に集まつてゐるやうな氣がする。辰夫は恥のために頬が熱くなるのを覺えた。

「さあ、もう座席へ戻らう！」

辰夫は、美代子をうながして座席へ戻つたが、さうして人の少い中に坐つてゐると却つて餘計に目立つやうな氣がした。辰夫は、美代子を連れて来た事を後悔した。

「矢張り、淺草へでも行けばよかつたね？」

「え？」

「面白くないだらう？」

「いえ。」

「淺草のK劇場か何かの方が面白かつたらうがね。」

「いえ、こゝも面白いわ。」

美代子はいつたが、正直のところ美代子もあまり面白くはなかつた。舞踊そのものも、どこが面白いのか一向分らなかつた。こゝに見るものゝすべてが、彼女の目にはあまり壯麗過ぎ、あまりにきらびやかであり過ぎた。初めのうちこそそれ等のものゝ一々が、彼女の子供のやうな好奇心を充たしてくれたが、次第に彼女は胸苦しい壓迫を感じは

じめた。そして、辰夫が感じた事を、彼女の方が辰夫より先に感じてゐた。彼女は、自分が全くこんな場所に相應しくもないものであることを、その華やかな雰圍氣の中であまりにみじめ過ぎるものである事を感じてゐた。

これは自分などの來てはならない、自分達の世界とは全く別の世界なのだと思つた。他の世界にまぎれ込んだ異邦人の心細さを彼女は感じた。その氣持で彼女はそばに坐つてゐる辰夫を眺めた。そして、彼女は今まで、まともな意識とならずにゐたものを、はつきりとそこに意識した。それは、辰夫の世界と自分の世界とが全く別のものであるといふことだつた。

この人は、こゝにゐる人達の仲間なのだ。だが、自分はさうではない！

敏感な美代子は、妙に不機嫌になつてしまつた辰夫の様子から、辰夫が自分をこゝへ連れて来たのを後悔してゐるのだといふ事を感じ知つた。美代子は、一層心細くなつて来た。

そして美代子もまた、思ひ出す事があつた。

あの猪之助と一緒に、淺草のK劇場で見た喜劇がどんなに面白かつたか？ 可笑しくてたまらなくなると、並んで坐つてゐた猪之助の腕を思はず兩手に抱へ込み、猪之助の身體をゆすぶるやうにして笑つたものだつた。猪之助も、ふだんの陰氣に似合はずはれ／＼と聲をあげて、一緒に笑つたものだつた。

猪之助さん！

このごろ、ふつつりと姿を見せなくなつたが、あの人はどうしてゐるのであらう？ と、美代子は、苦惱に引きゆがめられた猪之助の顔をそこに描き浮べるのであつた。

三

——やがて、開幕のベルが鳴つた。金糸銀糸に縫ひとられた緞紅色の緞帳が徐かにあげられると、崩れかゝるやう